NRI

第16回

# NRI学生小論文コンテスト2021

［受賞論文記録集］

# サステナブル未来予想図

～こんな地球で暮らしたい・安全安心な社会のカタチ～

野村総合研究所グループ
Nomura Research Institute Group

# サステナブル未来予想図

## ～こんな地球で暮らしたい・安全安心な社会のカタチ～

みなさんは、10年後、30年後、あるいはもっと先の未来に、どのような地球で暮らしていたいでしょうか。さまざまな危険や災害から身を守って“安全”に暮らせる社会を構築していくことは、人が生きるために必要不可欠です。また、心地よく暮らしていくためには、信頼できる人間関係を築いたり、快適な家でリラックスしたりといった“安心”も重要です。

人々がこの地球で暮らしていくサステナブルな未来に向け、そのキーワードの一つである「安全安心な社会」の実現につながるアイデアを提案してください。

## 「NRI学生小論文コンテスト」とは？

**日本と世界の未来について、次代を担う若い学生のみなさんに考える機会を持っていただくための論文コンテストです。**

NRIグループは「未来社会創発企業」として、新しい社会のパラダイムを洞察し、その実現を担うとともに、日本のみならずアジア、そして世界の発展に貢献することを目指しています。

この一環として、これからの社会を担う若い世代のみなさんに、日本や世界の未来に目を向け、自分たちが何をなすべきかを真剣に考え、その熱い思いを発表する場を持っていただこうと、2006年から毎年「NRI学生小論文コンテスト」を開催しています。

毎年、学生のみなさんから、明るい未来に向けた斬新で力強い提案をいただいています。

NRIは、コンテストで入賞した若い世代からの提案を広く社会に公表することによって、若者を含む幅広い世代が、日本の未来を考えるきっかけにしていただきたい、と考えています。

# コンテストへの想い

## この地球で暮らしていくサステナブルな未来に向けた、安全安心な社会を実現するアイデアを、楽しみにしています

2006年に開始した「NRI学生小論文コンテスト」は、今回で16回目となりました。このように長く本コンテストを続けて来ることができたのは、論文を応募してくださる学生のみなさんはもちろんのこと、学校関係者、審査委員など、多くの方々のご協力のお陰であると感謝しております。ここに改めて深く御礼申し上げます。

私たちの暮らすこの地球には今、経済活動や消費活動による大きな負荷がかかっています。そのうえ、いまだ終わりの見えないコロナ禍によって、これまでの“当たり前”が見直されて生活様式や働き方なども大きく変化し、私たちは「安全安心な社会」がどれだけ大切なのかを、日々実感させられています。

次世代を担う高校生・大学生のみなさんが、この地球に暮らし続けていくサステナブルな未来に向けて、新しい着眼点から、「安全安心な社会のカタチ」を提案してくださることを期待しています。

NRIグループにおいても、安全安心な社会の実現に貢献していけるよう、今後の事業活動を行っていきたいと考えています。

NRI代表取締役会長兼社長
此本 臣吾

**これまでの募集テーマ**

| | 大学生の部・留学生の部 ｜ 高校生の部 |
|---|---|
| 第1回（2006） | ユビキタスネット時代のITと人間の関わり ｜ モチベーションクライシス |
| 第2回（2007） | 日本が世界と共生するには ｜ 日本から見た世界 世界から見た日本 |
| 第3回（2008） | 日本の「第三の開国」に向けて ｜ 2015年の日本人像・家族像 |
| 第4回（2009） | ITを活用した日本発ビジネス ｜ 日本はコレで世界一になる！ |
| 第5回（2010） | 日本が世界のためにできること ｜ 世界のなかで日本の魅力を高めるには |
| 第6回（2011） | 2025年、新しい“日本型”社会の提案 ｜ 2025年の日本を担うわたしの夢 |
| 第7回（2012） | 自分たちの子ども世代に創り伝えたい社会<br>あるべき社会の姿と私たちの挑戦 ｜ 私たちがすべきこと、できること、やりたいこと |
| 第8回（2013） | あなたが考える“わくわく社会”を描いてください |
| 第9回（2014） | 創りたい未来社会 ―あなたの夢とこだわり |
| 第10回（2015） | 2030年に向けて ―「守るもの」、「壊すもの」、「創るもの」 |
| 第11回（2016） | Share the Next Values! 世界を変える、新たな挑戦 |
| 第12回（2017） | Share the Next Values! 地方の課題をイノベーションで解決する。<br>サブテーマ ①震災復興 ②地方創生 ③地方の産業改革 |
| 第13回（2018） | 2030年の未来社会を創るイノベーションとは ―世界に示す日本の底力！ |
| 第14回（2019） | サステナブル未来予想図 ～豊かで活力ある未来のために～ |
| 第15回（2020） | サステナブル未来予想図 ～最適な社会の構築に向けて～ |

これまでの受賞論文記録集

ジャーナリスト

## 池上 彰 さん

### 「自らの問題意識を深め、考えをまとめて発信するチャンスと捉えて」

「NRI学生小論文コンテスト」の審査に携わるのは今回で16回目となります。毎年優れた論文やプレゼンテーションを拝見し、順位づけに悩むと同時に、若いみなさんの考え方に触れ、「若い人たちはこういう問題意識を持って、このように論理を展開させるのか」と私自身、大変勉強になっています。

自らの考えを論文にまとめ、それを多くの人に知ってもらうのはとても意義のあることです。本コンテストを、自らの考えを発信するチャンスと捉え、ぜひ論文執筆にチャレンジしてください。

**池上 彰**（いけがみ あきら）──ジャーナリスト。名城大学教授、東京工業大学特命教授、東京大学客員教授など9つの大学で教える。1973年NHKに記者として入局し、1994年から「週刊こどもニュース」の“お父さん”を11年間務め、2005年独立。著書に『伝える力』『池上彰の現代史授業──21世紀を生きる若い人たちへ シリーズ』『知らないと恥をかく世界の大問題』『池上彰教授の東工大講義』『大世界史』『考える力がつく本』『考える力と情報力が身につく 新聞の読み方』『社会に出るあなたに伝えたい なぜ、読解力が必要なのか?』『池上彰の世界の見方』『なぜ世界を知るべきなのか』など多数。

ノンフィクションライター

## 最相 葉月 さん

### 「広い視野と自由な発想で課題を見つけ、それぞれの未来を描いて」

今回のテーマは「サステナブル未来予想図 ～こんな地球で暮らしたい・安全安心な社会のカタチ～」です。広い視野をもって自らの自由な発想で課題を見つけ、想像力を羽ばたかせてそれぞれの「安全安心な社会のカタチ」を描いて欲しいと思います。

自分の考えを論文で表現しようとする若いみなさんの真摯な姿勢には、毎回とても触発されるものがあります。今回もみなさんの柔軟で斬新なアイデアに出会えることを、楽しみにしています。

**最相 葉月**（さいしょう はづき）──ノンフィクションライター。科学技術と人間の関係性、災害、医療などを中心に取材執筆活動を行う。著書に『絶対音感』（小学館ノンフィクション大賞）『青いバラ』『ビヨンド・エジソン 12人の博士が見つめる未来』『セラピスト』『れるられる』『ナグネ 中国朝鮮族の友と日本』『調べてみよう、書いてみよう』『理系という生き方──東工大講義 生涯を賭けるテーマをいかに選ぶか』、共著『胎児のはなし』など多数。『星新一一〇〇一話をつくった人』にて大佛次郎賞、講談社ノンフィクション賞、日本SF大賞、日本推理作家協会賞（評論その他の部門）、星雲賞（ノンフィクション部門）受賞。

## 大学生の部、高校生の部　募集テーマ

# サステナブル未来予想図

～こんな地球で暮らしたい・安全安心な社会のカタチ～

**みなさんは、10年後、30年後、あるいはもっと先の未来に、どのような地球で暮らしたいと思いますか。**

**人々が安心を感じ、安全に過ごせる社会には、どのようなことが必要だと考えますか。**

2020年は、新型コロナウイルスにより、私たちの生活は一変しました。みなさんも一時は学校に行けなくなったり、旅行や外出を控えたりされていたのではないでしょうか。目に見えないウイルスへの対策が必要となった社会では、それまでの“当たり前”が見直され、生活様式や働き方などが大きく変化しました。それに伴って、Web会議ツールや非接触型決済システム、食事宅配サービスなど、人々がお互いの安全を守りながら過ごすことに役立つサービスも、広く浸透しました。

さまざまな危険や災害から身を守って“安全”に暮らせる社会を構築していくことは、人が生きるために必要不可欠です。それだけではなく、人が心地よく暮らしていくためには、信頼できる人間関係を築いたり、快適な家でリラックスしたりといった、“安心”も重要です。

では、安全安心な社会の実現に向けて、近年話題になっているトピックスにはどのようなものがあるでしょうか。いくつか例を挙げてみましょう。

- 地球規模では、温室効果ガス削減、省資源化、再生可能エネルギーの利用促進、平和な社会の創造　など
- 身近な生活の中では、地域活性化、食品ロス削減、健康増進、異文化理解、働き方の多様化、人との絆の強化　など

このように枚挙にいとまがありませんが、世界各国の連携や助け合い、AI（人工知能）をはじめとする先進技術の活用、個々人の意識の高まりや行動変容などにより、日々改善に向かっているものもありますね。10年後には、思いもよらない解決方法が見つかっているかもしれません。

野村総合研究所グループでは、「安全安心社会の共創」をサステナビリティ経営目標の1つに掲げ、さまざまな事業を行っています。例えば、金融関連システムなどの社会インフラの高度化を通じて安全安心な社会の実現に向けて取り組んでいます。

次世代を担うみなさんは、どのような地球の未来を描いているでしょうか。柔軟な発想で、安全安心な社会の未来予想図と、その実現に向けた取り組みを考えてみてください。日本や世界、地球のより良い未来へとつながるアイデアを、お待ちしています。

# 募集要項

「サステナブル未来予想図　～こんな地球で暮らしたい・安全安心な社会のカタチ～」
未来を拓く、オリジナリティあふれる提案をお待ちしています

## 大学生の部

**募集期間**
2021年7月1日～9月3日

**応募資格**
日本国内の大学院、大学、短大、高等専門学校（4～5年）に在籍している学生で、2021年7月1日時点で27歳以下の、個人またはペア（ペアの相手は、「大学生の部」「高校生の部」いずれかの応募資格者であること）。

**字数**
4,500～5,000字　＊別途400字程度の要約を添付

**賞**
［大賞1作品］賞金50万円
［優秀賞1作品］賞金25万円
［留学賞特別賞1作品］賞金25万円
［敢闘賞 数作品］賞金10万円
［奨励賞 数作品］賞金5万円

## 高校生の部

**募集期間**
2021年7月1日～9月10日

**応募資格**
日本国内の高校、高等専門学校（1～3年）に在籍している学生で、2021年7月1日時点で20歳以下の、個人またはペア（ペアの相手は、「高校生の部」の応募資格者であること）。

**字数**
2,500～3,000字　＊別途200字程度の要約を添付

**賞**
［大賞1作品］賞金30万円
［優秀賞2作品］賞金15万円
［敢闘賞 数作品］賞金6万円
［奨励賞 数作品］賞金3万円

〈応募に際しての注意事項〉

・応募論文は、日本語で執筆された、自作で未発表のものに限る。
・他の著作物を引用する場合は、その箇所を明記するとともに、論文の最後に出所を記載する。
・図表中の文字、図表タイトル、注釈、参考文献一覧は、字数に含まない。図表の数は5点以内とする。
・他のコンテストなどに同内容の論文を多重応募することは禁止とする。
・入賞した論文の著作権は、野村総合研究所に帰属する。

# 審査のプロセス

入賞論文は、予備審査→一次審査→二次審査→論文審査会→最終審査会という5つのステップを経て決定しました。

**最終審査会では、プレゼンテーション審査を実施**

- 論文審査会を通過した入賞者には、最終審査会において6分間のプレゼンテーションを行ってもらいました。
- 各賞は、最終審査会におけるプレゼンテーションで確定しました。

最終審査会以外は、どの審査においても、応募者の学校名、氏名などの属性を秘匿したうえで、厳正に行っています。また、評価が偏らないように、1つ1つの応募作品を複数の審査委員が評価しています。

| | |
|---|---|
| **予備審査** ｜ 9月3日～10月11日 | 事務局で、応募論文全て（3,043作品）について、応募基準をクリアしているか審査。 |
| ↓ **一次審査** ｜ 10月13日～10月28日 | NRIグループの社員延べ104名が論文を評価し、評価が高かった18作品（大学生の部:8、高校生の部:10）が二次審査へ。 |
| ↓ **二次審査** ｜ 11月2日～11月15日 | 特別審査委員を含めた審査委員7名が論文を評価・採点し、事務局が集計。 |
| ↓ **論文審査会** ｜ 11月18日 | 審査委員7名が議論を行い、入賞論文9作品（大学生の部：4、高校生の部：5）を決定。 |
| ↓ **最終審査会** ｜ 12月20日 | プレゼンテーション審査を実施。<br>大賞・優秀賞・留学生特別賞・特別審査委員賞を決定。NRI公式サイトで入賞論文を発表。 |

〈論文審査の評価基準〉

**◆ 問題発見力**
- 独自の視点で問題の提起がなされているか
- 論点に対する切り口の鋭さ、考察の深さ
- 具体例、数値を使用するなど論点のわかりやすさ

**◆問題解決力**
- 提案や解決策のスケールの雄大さ、視野の広さ
- 提案や解決策の独自性・実現性

**◆文章力**
- 論文構成のわかりやすさ
- 文法の正しさ、誤字・脱字の少なさ

**◆斬新／大胆な発想力**
- 実現性に乏しくても、発想が斬新で大胆なもの
- 多くの人に夢や希望を与えるもの

**◆上記には該当しない評価点**（これまでに評価された点の例）
- テーマや提案内容に対する熱い想い
- 独自の調査・取材
- 体験談

# 入賞作品

入賞者のみなさん、おめでとうございます！

## 大学生の部

**大賞**　ひよっこドクターのほけんしつ ～Student Doctorたちによる地域住民の健康相談の場～
中島 寛音　新潟大学 医学部３年

**優秀賞**　新しい教育の形を世界へ
上原 綾乃　嘉悦大学 経営経済学部２年

**特別審査委員賞**　セルフサービスフードバンク　～新しい食品リサイクルのかたち～
張 穎慧　東北大学 大学院 教育学研究科２年

**留学生特別賞**　留学生から見る老舗旅館に対する改善策の提案及び観光まちづくり
尹 思源　高崎経済大学 地域政策学部３年
金 秀玟　高崎経済大学 地域政策学部３年　（共著）

## 高校生の部

**大賞**　～バングラデシュから始まるエシカルファッションの時代～
縫製工房Clothes Mom
平松 明華　北海道 函館白百合学園高等学校２年

**優秀賞**　日本を第二の故郷に　～未来の人材にクラウドファンディング～
篠原 瑞希　埼玉県 本庄東高等学校２年

**優秀賞**　世界の女性をつなぐ「Soap-Loopプロジェクト」　―SRHRの実現へ―
原 まりこ　埼玉県立浦和第一女子高等学校２年

**特別審査委員賞**　自然災害から笑顔を守る復旧・復興の新しいカタチ
生方 智絵　東京都 広尾学園高等学校１年

**特別審査委員賞**　人間、う○ちくれるってよ　by分解者
深尾 優子　岐阜県立岐阜高等学校２年

# 入賞作品

## 大学生の部　敢闘賞・奨励賞

**多拠点デジタル縄文時代** 敢闘賞
北川 桜子　東北大学 工学部２年
簗瀬 美智子　千葉商科大学 政策情報学部３年（共著）

**ペットボトル許すまじ** 敢闘賞
村田 拓真　早稲田大学 商学部４年

**3H création city ～Hopeful × Habitable × Harmony～** 敢闘賞
安田 真雪　立命館アジア太平洋大学 アジア太平洋学部３年
塩飽 悠乃　立命館アジア太平洋大学 アジア太平洋学部３年（共著）

**「安全基地」の提供によって自殺のない社会を創る** 敢闘賞
山本 康太郎　大阪大学 工学部４年

**分散型ホテル普及による地方都市の人口減少克服に向けた提案** 奨励賞
佐野 寿來　獨協大学 経済学部４年

**おもいでのもりプロジェクト** 奨励賞
武智 香奈　慶應義塾大学 総合政策学部３年
佐藤 紺衣　慶應義塾大学 環境情報学部３年（共著）

## 高校生の部　敢闘賞・奨励賞

**廃棄されてしまう規格外野菜を食べ物に困っている札幌の子どもに届けられるか** 敢闘賞
小川 莉功　北海道 立命館慶祥高等学校３年

**『PROJECT　つよい子』の提案 ～こどもの防災意識を高めるには～** 敢闘賞
中野 愛菜　宮城県 気仙沼高等学校３年

**１人１人に寄り添えるサポートを ～ヤングケアラー支援の在り方～** 敢闘賞
中村 真唯　東京都 中央大学高等学校３年

**日本を変える水力発電「雨どい楽水プロジェクト」** 敢闘賞
峯山 ひとみ　埼玉県 狭山ヶ丘高等学校２年

**平和な世界** 敢闘賞
村井 志織　福岡県立筑紫丘高等学校２年

**いつも近くに、食品ロス ～安全安心な社会を目指して食品ロスをへらす～** 奨励賞
小島 恵奈　埼玉県 本庄東高等学校２年

**Eco Eatプロジェクト ～バーチャルウォーターから考える新しい食生活～** 奨励賞
佐藤 雅哉　東京都立西高等学校１年

**デジタル化する社会で虐待撲滅を目指す「たすける君」で子供たちをたすけよう** 奨励賞
副田 詩歩　福岡県立修猷館高等学校２年

**廃棄枠取引の導入による食品廃棄削減 ～発展途上国の栄養状態を改善するために～** 奨励賞
髙橋 佑奈　群馬県立中央中等教育学校５年

**新たな防災アプリ「Protect」 ～１人でも多くの人を救うために～** 奨励賞
武内 萌花　埼玉県 狭山ヶ丘高等学校１年

**高齢者のためのスマートシティ「ホスピタリティタウン」** 奨励賞
辰己 芙優　東京都 広尾学園高等学校１年

**子供たちの将来を救う ～小中学校への通信制とｅスクールの導入～** 奨励賞
谷 帆樺　福岡県立筑紫丘高等学校２年

**悩める若者を自分なりの道へと導くマッチングアプリ「My Way」** 奨励賞
中岡 星穂　東京都 広尾学園高等学校１年

**災害を活用しよう —地球温暖化が進む世界で安心に暮らすために—** 奨励賞
西村 七菜　東京都 中央大学高等学校３年

**外国人児童生徒の未来 ～自分らしく、楽しいスクールライフを～** 奨励賞
山本 絵美子　埼玉県 本庄東高等学校１年

# 応募概況

「NRI学生小論文コンテスト2021」の応募論文数と入賞論文数は、以下のとおりです。

**応募論文数**　（　）内は留学生

| 大学生の部 | 高校生の部 |
|---|---|
| 265（26） | 2,778 |
| 総数　3,043 | |

**入賞論文数**

| | | 大学生の部 | 高校生の部 | 計 |
|---|---|---|---|---|
| 最終審査会参加者 | 大賞 | 1 | 1 | 2 |
| | 優秀賞 | 1 | 2 | 3 |
| | 特別審査委員賞 | 1 | 2 | 3 |
| | 留学生特別賞 | 1 | | 1 |
| 敢闘賞 | | 4 | 5 | 9 |
| 奨励賞 | | 2 | 10 | 12 |
| 計 | | 10 | 20 | 30 |

論文審査会

最終審査会

NRI学生小論文コンテスト2021

# 大学生の部

受賞論文

大賞［大学生の部］

# ひよっこドクターのほけんしつ
## ～Student Doctorたちによる地域住民の健康相談の場～

新潟大学 医学部3年
中島 寛音 なかじま ひろね

［要約］
現代の日本には、地域住民のかかりつけ医の不在、医療機関や医師についての情報不足、医学生の全人的に患者を診る視点の欠如、独居や老老介護による高齢者の孤独といった医療に関わる課題がある。「誰でも気軽に医療を受けられる、あるいは体調のことを相談できる」安心安全な社会を目標とし、この実現の手段として「ひよっこドクターのほけんしつ」を提案する。この企画ではStudent Doctorの資格を持つ医学生が地域住民の健康相談に乗ることで、かかりつけ医がいない住民の医療不安解消、かかりつけ医の見つけ方の情報提供、医学生が患者の背景を理解する力の育成、孤独な高齢者の精神的なケアを同時に叶える。また、ひよっこドクターのほけんしつを長期的に継続することで、Student Doctorと医師によって「地域住民や患者のことを地域でずっと見続けられるサイクル」が回る。これは地域で持続可能な医療を実現し、みんなが暮らしたい社会をつくるための第一歩となる。

## 1. はじめに

筆者は新潟県出身の医学生である。新潟県は、医師の数や医師が十分いる地域の偏りなどを数値化した「医師偏在指標」で全国ワースト1位である[1)]。端的に言えば、医師が足りていないのだ。そんな地域に住む筆者にとって安全安心とは、誰でも気軽に医療を受けられる、あるいは体調のことを相談できる社会であり、ぜひそのようなところに暮らしたいと思う。この理想を実現させる手段の1つとして「ひよっこドクターのほけんしつ」を思いついた。

## 2. 提案に至った課題意識

### （1）かかりつけ医が欲しいけれどいない人が、約５人に１人いる日本[2)]

医療の視点で「安心安全な社会のカタチ」と言うと、かかりつけ医がいなくても健康について気軽に相談できることがひとつの理想である。筆者自身、以前激しい背中の痛みを経験した際、かかりつけ医がおらず、どこに相談したらいいのかと大きな不安を感じたことがある。公益財団法人日本医師会（2020）によると、かかりつけ医がいない人は全体の43.8%で、そのうち4割強が「かかりつけ医はいないが、いるとよいと思う」と考えている。つまり、日本の中で約5人に1人はかかりつけ医が欲しいがいない状況である。

また、かかりつけ医がいない理由は「あまり病気にならないので必要ない」「その都度選ぶ」が上位2位であったが、3位以降には「どのような医師が適しているのかわからない」など情報不足を訴える回答が並ぶ。このことから、現在かかりつけ医がいないが、欲しい層の医療ニーズに応えるため、かかりつけ医を見つけるための適切な情報を提供する場が求められていると考えた。

### （2）倍率の高いレンズしか持たない医学生

患者の病気だけでなく、体全体、さらには家族や地域なども考慮に入れて総合的に診ることを、「全人的（ぜんじんてき）医療」と呼ぶ。厚生労働省（2020）の公開データから、医療費ベースでは医療を受ける人の60.6%が65歳以上の高齢者だとわかる[3)]。医療のターゲットの5分の3が高齢者である現代、1つの病気に対処するだけでは不十分で、その患者の他の病気や家族構成、経済事情、介護事情、居住環境なども考えることが医師を含む医療従事者に求められている。このような全人的医療を行うためには、倍率の異なるレンズが必要だ。ここで言うレンズとは患者を診察する際の視点のこと

であり、倍率が高く「病気を細かく診られる」視点、倍率が中くらいで「他の病気を含め患者の体全体を診られる」視点、そして倍率が低く「患者の家族や地域を遠くから見られる」視点の3つに大別できる（図1）[4]。

現行の医学部のカリキュラムでは、特に倍率の高いレンズは得やすい。なぜなら講義で様々な病気の特徴を学び、大学病院等での実習でその治療法を習得するからだ。一方、患者が生活する実社会を知る機会は限られており、倍率の低いレンズは手に入れにくい。

患者の背景を踏まえ全人的に診られるようになるには、彼らが日々どのように暮らしを営んでいるのかを知ることが必須だろう。我々医学生は、患者のリアルな生活環境の実体験を得る機会を今以上に持つべきだと感じる。

### （3）増え続ける一人暮らしの高齢者や老老介護と、それに伴う高齢者の孤独

内閣府（2020）によると、2015年に日本で一人暮らしをする65歳以上の高齢者は男性約192万人、女性約400万人で、65歳以上人口のうち男性13.3%、女性21.1%が単身である[5]。また一人暮らしの高齢者数と65歳以上人口に占める割合は、少なくとも2040年までは増加すると推計されている[5]。

加えて厚生労働省（2019）によると、在宅介護のうち介護される側と介護する側が65歳以上同士である老老介護の割合は、59.7%である[6]。2016年から2019年のわずか3年で、その割合は5ポイント上昇した。

独居高齢者と老老介護の割合が年々増加している状況から、物理的に同居する人がおらず孤独な高齢者と、同居する人がいても会話ができる相手がおらず孤独な高齢者が増加すると私は予想した。近年では、孤独死という言葉もよく聞く。家族や地域との繋がりがない高齢者を減らすため、また孤独に息を引き取る高齢者を減らすため、彼らが人と繋がりたいと思える場を提供することが社会の責務だと考える。

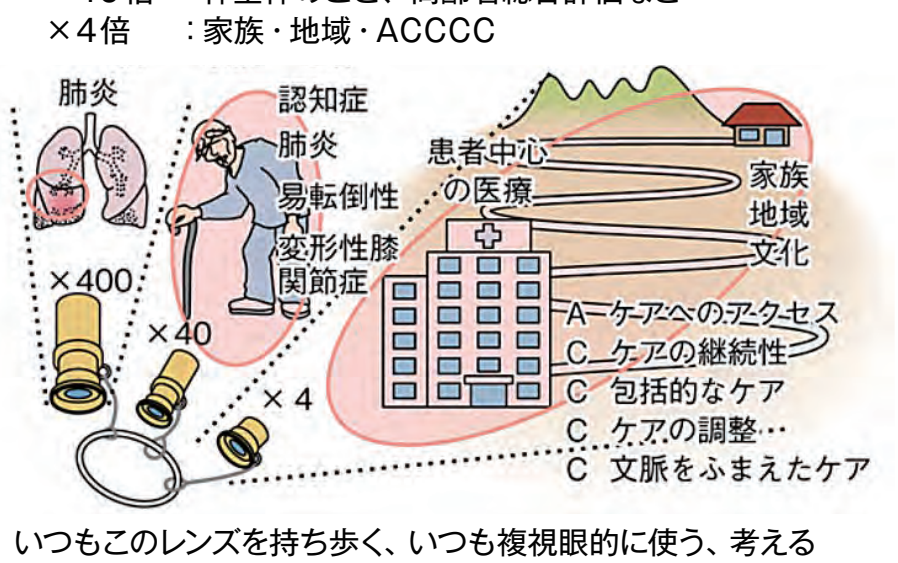
## 3. 先行事例の紹介

**新潟県地域医療セミナー　～医学生による阿賀町でのいきいき健康教室～**[7)、8)]

この企画は2018年3月12日、当時3～5年生だった医学生が参加し、新潟県阿賀町の高清水集落活性化センターで行われた。地域医療を学ぶことを大きなテーマとし、地域住民への質問も交えながら医学生が健康に関する発表を行い、住民と医学生が交流した。

事後アンケート結果によると、参加医学生の91%が「非常に満足／まあ満足」していた。一方、「十分な準備時間が確保できていなかった」「スケジュールがきつかった」「もう少し患者の話を引き出したかった」などの意見もあり、時間的な面で課題が残った。1回きりで終わらせず、定期的かつ継続的に開催することで住民、医学生双方にとってより実のある企画になる余地がある。

図1　3つのレンズ




出所）吉村 学「へき地こそ最高の医学教育の場」
『レジデントノート』Vol.11 No.11(2010年2月号)

## 4.「ひよっこドクターのほけんしつ」の提案

### ひよっこドクターのほけんしつ　～Student Doctorたちによる地域住民の健康相談の場～

3つの課題意識と先述の先行事例を踏まえ、「ひよっこドクターのほけんしつ」を提案する。ここから提案の詳細について述べる。

まずStudent Doctorについて軽く説明したい。Student Doctorとは、全国の医学生が4年次に受ける全国共用試験の結果、「臨床実習を開始する前に備えておくべき知識・技能・態度を身につけていることが認められた医学生」である[9]。彼らはその試験合格後の医学部4～6年次に実施される臨床実習において、指導医の監督の下で医行為の一部を行える[10]。

「ひよっこドクターのほけんしつ」でのStudent Doctorの主な活動内容は、地域住民の健康に関する悩みや不安を傾聴することを想定している。また、かかりつけ医の見つけ方など地域住民が知りたい医療に関する情報を提供したり、インフルエンザなど季節性の感染症が流行する時期には住民に対する予防接種を行ったりしたいと考えている。

「ひよっこドクターのほけんしつ」の開催頻度は、オフラインのみの場合は月1回、リモートも組み合わせる場合は隔週を想定している。また継続的に地域住民の様子を見たいため、具体的な期限を設けず実施したい。

筆者の住む新潟県において、「ひよっこドクターのほけんしつ」を開催するエリアの候補は2つある。

1つ目は、新潟県内を7エリアに分けた2次保健医療圏のうちの「県央医療圏（三条市、加茂市、燕市、弥彦村、田上町から構成）」である。ここは人口20万人強のエリアにも関わらず、新潟県内の2次保健医療圏のうち唯一まだ救命救急センターが設置されていない[11]。救急医療をはじめとして医療面で周辺地域の助けを借りているのだ。県央地域のように医療体制が他地域よりも弱く、地域住民が医療に対して不安を抱きやすいエリアにおいて、日頃から健康相談ができる場は非常に効果的であり地域住民にもありがたく思われると予想する。

2つ目の候補は、高齢化率が40%を超える自治体だ。新潟県内では阿賀町、粟島浦村、出雲崎町、関川村、津南町、佐渡市、糸魚川市、十日町市の8つが該当する[12]。筆者の課題意識の中に高齢者の一人暮らしや老老介護、それに伴う孤独があることが、この候補を挙げた理由である。

### Student Doctorに焦点を当てた理由

この企画を練るにあたり、Student Doctorの資格を持つ4～6年次の医学生に焦点を当てた理由は2つだ。

1つ目は、彼らは臨床実習を行うにあたり全国共用試験を突破した医学生だからである。全国共用試験は、知識と問題解決能力を評価される「CBT（Computer Based Testing）」と、態度と技能を評価される「OSCE（Objective Structure Clinical Examination）」の2試験から構成され、全国の医学生が4年次に受ける。Student Doctorたちはこれに合格しており、知識やレベルの面で医学生の中でも一定の水準を満たしていると言えるのだ。

2つ目は、地域住民としても、何の資格もない医学生に相手されるより、Student Doctorの資格を持つ医学生に相談をする方が安心できるだろうからである。

### 「ひよっこドクターのほけんしつ」が解決する３つの課題

（1）かかりつけ医の不在と医療機関に関する情報不足

「ひよっこドクターのほけんしつ」では、特にかかりつけ医のいない住民の健康相談も気軽に無料で受ける。そのため、わざわざ医療機関を探して受診するのは大変でも、医学生による健康相談であれば抵抗低く来てくれる人にアプローチできる。

また、ここに来てStudent Doctorたちや指導医と話すことで、かかりつけ医の見つけ方など、知りたい医療情報を入手できる。

（2）倍率の低いレンズを得る機会の不十分さ

参加するStudent Doctorたちは、現実世界での活動を通して、患者の背景を理解する力を養える。医療機関での臨床実習で目にする患者の様子は、その人の人生のごく一部でしかない。患者が人生の大半を過ごす実社会に出て、その人のことを深く知る過程を経験し、幅広く見られる倍率の低いレンズを手に入れることができるのである。また、臨床の現場で必須の患者とのコミュニケーション能力を高めたり、医師国家試験の勉強や医師になるモチベーションが上がったりすることも期待できる。

（3）高齢者の孤独

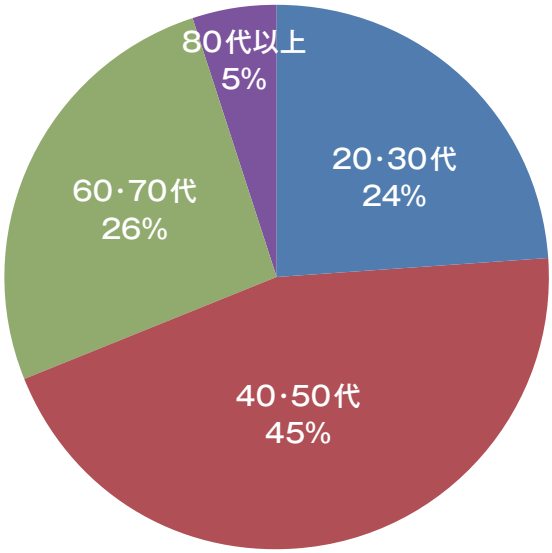
1人で暮らしていたり、老老介護だったりと普段は話す相手がいない高齢者でも、「ひよっこドクターのほけんしつ」に来れば話を聞いてくれる人がいる。Student Doctorたちが住民の話を傾聴し精神的にケアすることで、孤独な高齢者の心の拠り所を提供する。

### 参加する指導医へのメリット

「ひよっこドクターのほけんしつ」は、Student Doctorたちを指導する医師にも参加するメリットがある。若い医師と年代の近い医学生と関わることで指導スキルが上達する、というものだ。新潟県の20～30代医師の割合は24%で、30～40代の割合45%に比べ半数ほどである（図2）[13]。このため自分の職場に若い医師がおらず、知識や技術を教える機会がない指導医がいる。そういった医師が「ひよっこドクターのほけんしつ」での指導を通して医学生と交流すると、指導医側の意識が変化し、若い人に積極的に教えようという雰囲気が作られることが期待できる。

初期臨床研修医（医学部卒業後1、2年目の医師）がいない、とある病院の医師の話では、Student Doctorの実習受け入れを増やしたところ、指導医たちの意識が変わり積極的に教えるようになり、病院全体が活気付いたそうだ。

図2　（新潟県）医師年代別割合




データ出所）新潟県（2019）
グラフ作成）筆者

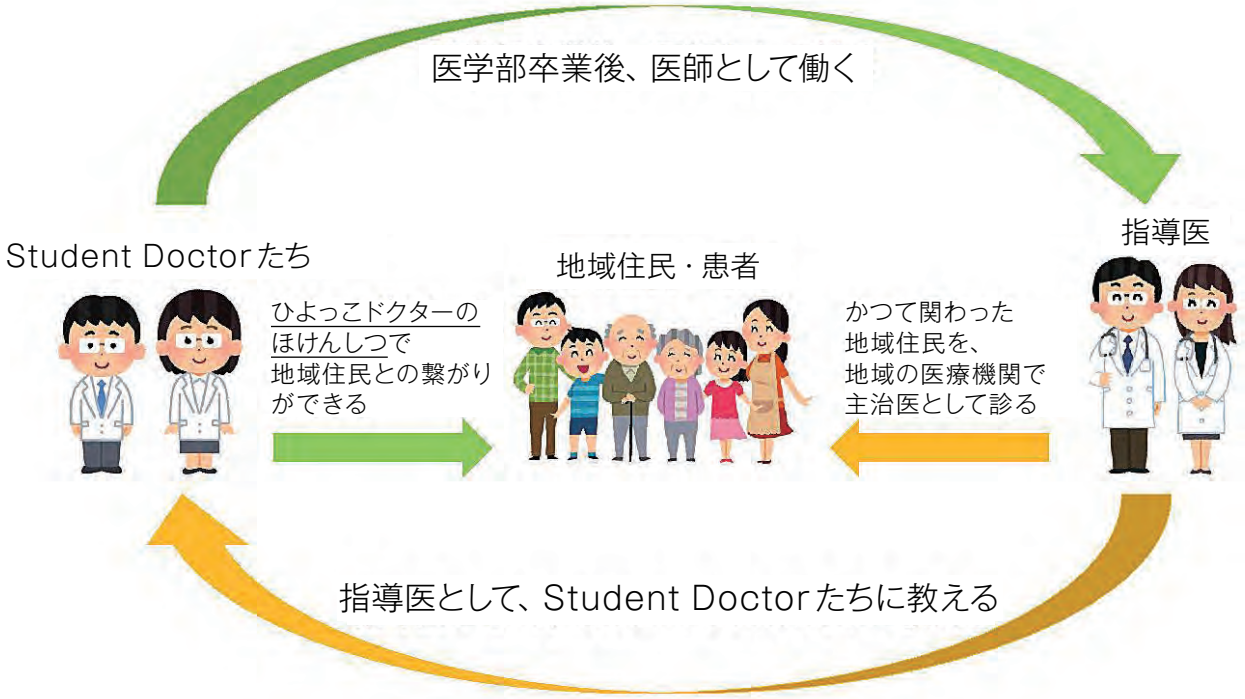
**「ひよっこドクターのほけんしつ」を続けることの意味**

この企画を継続的にすることは、非常に意味がある。「ひよっこドクターのほけんしつ」で地域住民との繋がりを得たStudent Doctorたちは医学部卒業後、医師として働く。経験を積み、整形外科や小児科など特定の診療科の医師になると、後輩医師に教える立場の「指導医」になる。指導医になると「ひよっこドクターのほけんしつ」のStudent Doctorたちに教えることに加え、かつて関わった地域住民を地域の医療機関で主治医として診ることができる。つまり、患者のことを地域でずっと見続けられるサイクルが回るのだ（図3）。

## 5. おわりに

大目標として「みんなが暮らしたいと思う安全安心でサステイナブルな社会をつくること」があり、医療に的を絞って「誰でも気軽に医療を受けられる、あるいは体調のことを相談できること」をゴールとし、この実現のための手段として「ひよっこドクターのほけんしつ」を提案した。まだ荒削りではあるが、決して実現不能ではないと自負している。筆者が医学部にいるこの時に、医師不足を解決したいというエネルギーに溢れる新潟の地で、共に活動してくれる仲間を集め、「ひよっこドクターのほけんしつ」の実現に向けて進んでいきたい。

図3　「ひよっこドクターのほけんしつ」のサイクル



参考文献


1) 厚生労働省 医療従事者の需給に関する検討会 第35回医師需給分科会 参考資料3「医師確保計画を通じた医師偏在対策について」p.9「都道府県の医師確保計画に用いられている医師偏在指標」（令和2年8月31日）
https://www.mhlw.go.jp/content/10800000/000665196.pdf

2) 公益社団法人 日本医師会「『第7回 日本の医療に関する意識調査』について」（令和2年10月7日）
https://www.med.or.jp/dl-med/teireikaiken/20201007_4.pdf

3) 厚生労働省「平成30年度 国民医療費の概況」結果の概要 5.年齢階級別国民医療費（令和2年11月30日）
https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-iryohi/18/dl/kekka.pdf

4) 吉村 学（地域医療振興協会 揖斐郡北西部地域医療センター）「連載 診療所実習・研修をのぞいてみよう！ 第2回 診療所実習・研修のコツ①」『レジデントノート』Vol.16 No.7(2014年8月号)、羊土社
https://www.yodosha.co.jp/rnote/pcfm/pcfm_02.html

5) 内閣府「令和2年版 高齢社会白書（全体版）」第1章 第1節 3.家族と世帯p.10
https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2020/zenbun/pdf/1s1s_03.pdf

6) 厚生労働省「2019年 国民生活基礎調査の概況」Ⅳ介護の状況 3主な介護者の状況
https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa19/dl/05.pdf

7) 新潟県地域医療支援センター（2018）「第2回新潟県地域医療セミナーのしおり」

8) 新潟県地域医療支援センター（2018）「平成29年度第2回新潟県地域医療セミナー アンケート結果」

9) 宮崎大学医学部 医療人育成推進センター「Student Doctor」
http://www.med.miyazaki-u.ac.jp/home/iryoujin/clinical_medicine/graduation/student-doctor/

10) 厚生労働省「医学部の臨床実習において実施可能な医行為の研究 報告書」門田守人 他
https://www.mhlw.go.jp/content/10803000/000341168.pdf

11) 新潟県「県内二次保健医療圏の設定状況」
https://www.pref.niigata.lg.jp/uploaded/attachment/231548.pdf

12) 新潟県「にいがた県統計ボックス（統計課）」「新潟県の老年人口（65歳以上人口）」統計表 表3 市町村別年齢（3区分） 別人口割合（老年人口割合の高い順）
https://www.pref.niigata.lg.jp/site/tokei/02rounenjinkou.html

13) 新潟県「平成30年 福祉保健年報―5」統計表11-3-1 医師数、年齢（5歳階級）・従業地による保健所別（平成28年12月31日現在）
https://www.pref.niigata.lg.jp/sec/fukushihoken/1356914263808.html


＊ウェブサイトは2021年8月29日閲覧

［受賞者インタビュー］

## 興味のある課題や、したいことを自覚することができた

**――コンテストに応募した理由、きっかけは？**

大学生になってから自分の考えを長い文章にまとめる機会がなく、このコンテストは腕試しの絶好のチャンスだと思ったから。また文章を第三者に読んでもらい、率直なフィードバックをもらいたかったから。

**――この論文を書き上げるまでに、どのくらいの時間がかかりましたか？**

構想を練り始めてから３カ月、実際に書き始めてから３週間。

**――この論文を書く上で苦労したことはありますか？**

小論文の書き方についてほとんど知らなかったので、小論文を書き始める前に、小論文の書き方について本を何冊も読んで勉強したこと。

**――この論文を書いたことで良かったことはありますか？**

小論文を書くことで、自分がどのような課題に興味があるのか、何をしたいのかが自覚できたこと。また、この機会がなかったら勉強しようと思わなかった小論文の書き方について勉強できたこと。

優秀賞［大学生の部］

# 新しい教育の形を世界へ

嘉悦大学 経営経済学部2年
上原 綾乃 うえはら あやの

［要約］
「すべての人が、どこにいても笑顔でいられる社会」、それは人理解から始まるのではないだろうか。私の提案するインターナショナルティーチャー制度では、日本の英語教育や人権や宗教教育の新しい形、そして、南アジアの教育インフラを整えることの2つを実現する。この制度は、途上国の教員志望の学生を対象に行う。教員志望の学生が、オンラインで、日本の小中高生を対象に、宗教、自国の慣習や文化、国際政治、歴史についての授業を行い、その経験を活かして自国の学校で先生をするという内容だ。これは、アジアの教育の発展を築く基盤となるような制度であり、10年後、20年後の世界を、すべての子供たちに教育を受ける権利があるという考え方で溢れているものにするための取り組みである。

## 1. はじめに

私が思い描く理想の社会とは、「すべての人が、どこにいても笑顔でいられる社会」である。

東京2020オリンピックパラリンピックでは、「多様性」をモットーとした大会が開催された。私は、日本が、東京2020オリンピックパラリンピックの開催国として、世界にあっと驚かれるような多様性の社会を先導していく国になることを強く願う。しかし実際は、今、どれほどの人が多様性の社会をイメージすることができているのだろうか。

近年では、コロナウイルスの影響で様々な事業やイベントが打ち切りとなり、ソーシャルディスタンスやオンラインを意識した形でそれらを行うことが多くなった。

だがしかし、私は、このような時代だからこそ、一人ひとりが個として存在するのではなく、共生を意識する必要があると考える。自分のことだけでなく、全体、世界、地球のことを考えた行動が求められる時代に私たちは生きている。

そのためには、まず、今現在よりも、「人」について理解を深める必要がある。例えば、宗教や歴史、政治である。確かに、私たちは宗教や世界の国々についての知識は学校で教わる。だが、出会ったことのない宗教や人種の人々が、本当に自分とは異なるのか、どのような考えを持っているのかについては、知る機会がないように思う。

他国の文化や慣習に触れることで、異文化への理解を深めるだけではなく、多角的な視野で私たちの生きる社会を捉えることができるようになるだろう。

## 2. 途上国の教育体制

途上国では、様々な理由から教育を受けられていない子供たちがいる。その理由の一つに「学ぶための環境」が整っていないことが挙げられる。

具体的には、生徒の家から通える距離に学校がないこと、教員が足りないこと、教育の質が低いことの3点である。教員志望の学生はいるものの、家から通える距離に学校がないこと、正当な額の給料が支払われないことから、教師不足という問題が起こっている。

特に、南アジアは21世紀の仕事に必要なスキルを持つ次世代の若者の育成において、他の地域に遅れをとっている。ユニセフが昨年、国際委員会と共に算出した2030年の南アジア諸国の学習成果予測に基づく推計では、南アジアは世界平均を大きく下回っていた。インド、パキスタン、バングラデシュを筆頭に、18億人にのぼる地域人口のほぼ半数が24歳未満である南アジアは、2040年までには世界最大の若い労

働力を持つ地域となる。このことは、地域が活気に満ちた生産的な経済を推進する可能性を提供する。しかし、南アジアの3万2,000人の若者を対象にした“Voice of Youth”調査では、近代経済に対処する十分な準備を自分たちができているかについて、24歳未満の若者たちが抱える懸念が明らかになっている。調査によると、南アジアの若者の多くは、教育制度が時代遅れで、就職のための準備にならないと感じている。彼らは実務経験の欠如（26%）、就職の可能性を高めるための支援の不十分さ（23%が支援を全く受けておらず、ほとんどが限られた、包括的でない支援しか受けていない）、賄賂の要求／差別的で不公正な雇用慣行（44%）などを、学校卒業後に立ちはだかる就職活動への主な障壁として挙げている。

## 3. 私の提案

このような現代の背景を通して、私はインターナショナルティーチャー制度（International Teacher System）を提案する。この制度は、途上国の教員志望の学生を対象とした教育インターンシップである。教員志望の学生が、オンラインで、日本の小中高生を対象に、宗教、自国の慣習や文化、国際政治、歴史についての授業を行い、その経験を活かして自国の学校で先生をするという内容である。この制度の特徴としては、以下の9つが挙げられる。

1）オンデマンドではなく、あくまでもオンラインで授業を行う。
2）途上国の学生を、南アジアの学生に限定する。
3）南アジアの学校では、教育インターンシップを経験している者は、優先的採用や賞与・昇給、保険制度などにおいて高待遇を受けることができる。
4）インターンシップの採用枠には、授業担当と教材作成担当の2つが存在する。
5）授業は基本、英語で実施される。担任の先生が補佐を行い、高校生には英語のみで授業が行われる。
6）基本は、南アジアの教員志望の学生2人が1クラスを担当する。
7）このインターンシップ経験を経て教員となった者は、1年に1度、南アジアの学生と日本の学生で合同授業を行う（高校1年生が対象）。
8）授業は特別活動として、年に数回（学校同士の決定により変動あり）実施される。
9）授業の対象学年は、小学校5年生から高校1年生である。

1）の理由としては、この制度を導入する目的の一つに、教員志望の学生に教えることのやりがいを体験してもらうことがあるからだ。そのためには、学生たちが生徒の反応や授業の雰囲気をきちんと知り、フィードバックを得て、自身の授業内容の反省や振り返りを行うことが大切であり、担任の教員とも連携をとる必要がある。

2）の、途上国の学生を南アジアの学生に限定する理由は、主に2つある。1つは、南アジアの教育体制が整っていないことである。「世界子供白書」表10によると、南アジアは教育期間の未登録率、修了率、若者の識字率はアフリカ地域に次いで悪い結果であり、これからも教育分野の発展を見込むことができる。もう1つは、私たちの住む日本と時差が少ない地域を選ぶことで、コロナ禍で減ってしまった国際交流や合同授業の機会を実現させることが可能になる。

3）に関しては、このインターンシップでは実践的な授業や授業準備の経験ができるので、学生はこのアドバンテージを加味した採用条件で雇用されるべきであるという提案だ。

4）では、授業担当と教材作成担当の2つが存在すると述べた。途上国の教育課題は、「2.途上国の教育体制」に記述した通り、教員不足だけではない。もちろん、実際に授業を行う教員の経験やスキルは重要だ。しかし、「学ぶための環境」には教育の質が大きく関係しており、教育内容を作成するという仕事を充実させる必要がある。

5）では、授業が英語で行われると述べた。まず、日本の英語教育は、単語や文法を重視した教育である。入試改革で、リスニングやリーディングを重点的に問う共通テストが実施されてはいるものの、未だ英語に苦手意識を持つ人は多い。学生に関しては、英語の得意不得意、好き嫌いの分かれ目となる時期が中学生の頃である。また、参考文献2、3の調査を見ると、中高生で英語を好きと思う割合とほぼ同じ程の学生が、英語を嫌い、もしくは苦手としている。そして、図1を見ると、その意識は成人した後も顕著に表れてしまうということが分かる。

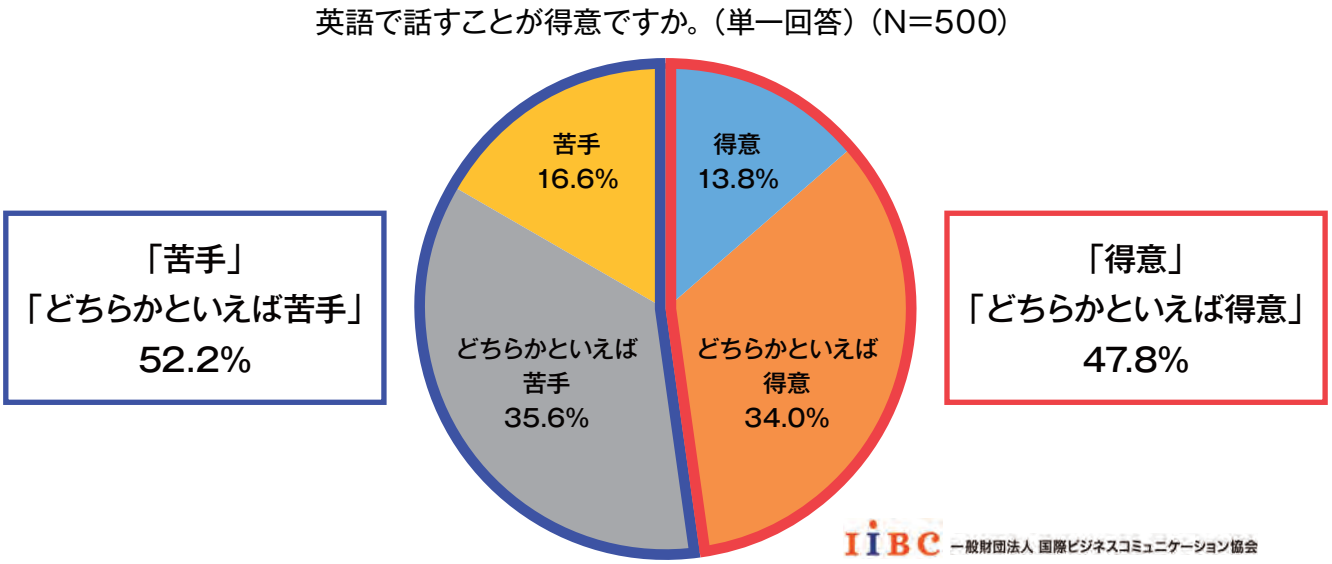
確かに、英語で歴史や文化などの授業を行うことで、こうした苦手意識がさらに浸透していってしまうのではないかという意見もあるだろう。しかし、この授業では、歴史や政治に対して、自分の意見をディベートする機会や、先生や他国の学生との交流をする機会がある。それらの内容を6年かけて主体的に学んでいくことで、学生一人ひとりが、政治や歴史に個人の意見や関心を持つことのできる大人になることを目指す。

6)では、各授業に担当の学生を2人にするという内容である。授業を担当する学生を2人にすることで、不安にならずに、安心して授業に取り組むことができるほか、振り返りなどもしやすくなり、学生自身のスキル向上につながる。

7）は、国際交流をするための仕組みである。この授業を経験し、先生となった者は、日本の教員と協力し、グループワークを中心とした授業を行う（日本の教員1名、南アジアの教員1名が担当）。

8）、9）は、学校の既存のカリキュラムに支障をきたさないために、この活動を特別活動と定義し、小学校高学年から高校1年生までの6年間を通して実施されることとした。

図1　英語のスピーキングに対する意識




出所）一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会
「英語のスピーキングに関する実態と意識」インターネット調査（2020年2月19～26日）
英語学習をしている全国の20～50代のビジネスパーソン男女500名対象
https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000026.000051295.html

## 4. 南アジアの教育課題

南アジアの多くの地域においては、貧困は何世代にもわたる抑圧と同義であり、おそらく他のどの地域に比べてもその傾向が強い（南アジアの国でこうした傾向及び以下に述べる特徴の見られないのは、ブータンとおそらくモルディブの2カ国のみである）。ときとして抑圧は、たとえばカースト、人種、宗教に基づく差別がそうであるように、社会的な性格を持つ。こうした社会的抑圧は女性に対して過酷であり、家庭生活や子供の幸せを左右するさまざまな世代間関係に対する影響をもたらしてきた。さらに、地主が君臨する政治構造、あるいは、汚職だらけの役人と不正な選挙によってもたらされる政治的な抑圧もある。

社会的なものであろうと政治的なものであろうと、貧困をもたらす根本的な原因は、あらゆる種類の悪い統治（bad governance）とこれに伴う職権乱用である。貧しい人々もそう考えている。

南アジアの多くの国々では、公教育制度が、貧しい人々のたった1つの願いを叶えるより、富める者をさらに富ませる仕組みになっていることが多い傾向にある。公教育における悪い統治の事例としては、以下のものが挙げられる。

- 学校の入札および建設における不正（リベート、収賄）
- 教科書、学校用家具、学校給食、その他の教育用備品の調達における不正（リベート、収賄）
- 公立学校施設の私的流用（小学校の校舎を住居または政治活動拠点として使用する等）
- 教科書印刷・配布における組織的な贈収賄
- 「幽霊教師」（公立学校の教員として給与を受け取っているにもかかわらず実際には教えていない、主に好条件の年金を受け取る目的で教員資格のない者が教員ポストを買い取る等）
- 無断欠勤（農村部の学校から都市部の学校に転任するために政治家に賄賂を贈る教師）

## 5. 政府と学校の連携

インターナショナルティーチャー制度は、これらの悪い統治を終わらせる可能性を秘めている。そのためには、南アジア諸国の政府、各学校にこの制度を導入することに同意を求める必要がある。南アジアの国々の政府は、授業や教材作成経験のある教員に良い条件で雇用する制度を導入するにあたり、各学校の教育体制が整っているかを見極めたうえで、認可を行う。そして、認可を受けることのできた学校は、日本円で5万円程度の助成金が国の教育予算の中から支払われる。そのため、教員志望の学生を適切な環境で受け入れることのできない学校は、この制度を導入することができない。

インターンシップでは、SDGsに取り組んでいる日本のコンピュータを製造している会社が、必要機材を、教員志望の学生に貸し出す。また、各国の通信費は国の助成金の一部を用いて支払われる。

## 6. おわりに

日本は、同じアジア圏に位置する南アジアの国々を、発展途上国として捉えるのではなく、一緒に成長していけるような国々であると認識することで、お互いの国の良さを引き出して

いくことができるようになるのではないだろうか。

この制度を導入し、10年後、20年後には、差別や格差が少なくなることを目指したい。中学生などの青年期に、多様な価値観に触れることで、個人の身の回りに起きていることだけではなく、社会や世界に視野を大きく持つことのできる学生が増えること、そして、南アジアの教育インフラを整え、子供が学校に通うことを当たり前にすることを強く期待する。

参考文献


1) ユニセフ「世界子供白書2019」表10：教育指標
https://www.unicef.or.jp/sowc/pdf/UNICEF_SOWC_2019_table10.pdf

2) 文部科学省「平成26年度 英語教育実施状況調査」生徒の英語力の状況
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/112/shiryo/__icsFiles/afieldfile/2016/06/13/1367805_6.pdf

3) 文部科学省「平成29年度英語力状況調査結果（高校3年生）の概要」
https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/__icsFiles/afieldfile/2018/04/06/1403470_03_1.pdf

4) ユニセフ「南アジア 若者のスキル危機、半数以上に影響」
https://www.unicef.or.jp/news/2019/0153.html

5) 文部科学省「世界の学校体系（ウェブサイト版）」中東 アフガニスタン・イスラム共和国（平成29年10月）
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/__icsFiles/afieldfile/2017/10/02/1396869_001.pdf

6) 内海成治「紛争後の国への教育協力と課題―アフガニスタンを例として―」『比較教育学研究 第31号』「特集 国際教育協力の現状と課題」2005年
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jces1990/2005/31/2005_31_15/_pdf/-char/ja

7) シャンティ国際ボランティア会　ウェブサイト
http://sva.or.jp/activity/oversea/afghanistan/background.html

8) 河井由佳「インドにおける女子教育の現状と課題 ―西ベンガル州ビルブム県の事例を中心に―」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部 第64号』2015年
https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/files/public/3/38985/20160129134924882048/BullGradSchEduc-HiroshimaUniv-Part3_64_29.pdf

9) 久保田恭代＋寺田聡子＋奈良崎文乃『わたしは13歳、学校に行けずに花嫁になる。未来をうばわれる2億人の女の子たち』合同出版、2014年

10) 一般社団法人Think the Earth『未来を変える目標 SDGsアイデアブック』紀伊國屋書店、2018年

11) 池田香代子『世界がもし100人の村だったら』マガジンハウス、2001年

12) 独立行政法人経済産業研究所 RIETI 西水美恵子 ガバナンス・リーダーシップ考 Vol.1「なぜ貧困解消が世界にとって重要か？―南アジアの事例から（I）」
https://www.rieti.go.jp/users/nishimizu-mieko/glc/001.html


＊ウェブサイトは2021年9月2日 最終閲覧

［受賞者インタビュー］

## 理想の社会について思い残すことなく書きあげることができた。

**――コンテストに応募した理由、きっかけは？**

大学のゼミの先生からの紹介で、このコンテストのことを知りました。サステナブルデザインについて考えることが好きだったので、応募しました。

**――この論文を書き上げるまでに、どのくらいの時間がかかりましたか？**

２カ月。

**――この論文を書く上で苦労したことはありますか？**

自分の提案が実現可能性に欠いている部分が多かったので、時間をかけて考え、工夫をしました。また、南アジアについての内容は、私自身行ったことのない国でしたので、データを集めることが大変でした。

**――この論文を書いたことで良かったことはありますか？**

私は経営経済学部に所属しているので、普段はビジネス、利益、実現可能性など、様々なことを加味してサステナブルデザインについて考えますが、今回は理想の社会について思い残すことなく書きあげられました。

特別審査委員賞［大学生の部］

# セルフサービスフードバンク
## ～新しい食品リサイクルのかたち～

東北大学 大学院 教育学研究科2年
張 穎慧 ちょう えいけい

［要約］
日本での留学生活のなかで、私はコンビニなどで発生する大量な食品ロスに「もったいない」と思うようになった。日本では、事業系と家庭系を合わせて年間600万トンの食品ロスがあるという。さまざまな理由で貧困にあえぐ人、現在コロナ禍で経済的に苦しんでいる人が多く存在する一方で、まだ食べられるのにさまざまな理由で処分されてしまう食品を、食べ物に困っている人に届ける仕組みを考えた。
アメリカに短期留学したときに、ボランティア活動を通して「フードバンク」という活動を知った。フードバンクは食品ロスを削減しながら、食べ物に困っている人を支援する活動である。日本のフードバンクの実態および課題を踏まえ、本稿では、新たな食品リサイクルのかたちとして「セルフサービスフードバンク」を提案する。自動販売機のように街角に「セルフサービスフードバンク」を設置することで食品ロスを削減し、食べ物で困る人がいない、より安心な社会を作ることを目指している。

## 1. はじめに

日本での留学生活は間もなく2年になる。半年前からコンビニでのアルバイトを始めた。従業員としてアルバイトしている私たちは、よくため息をつき、同じ言葉をつぶやく。「もったいないなー」。

コンビニでは、毎日何度も鮮度チェックをする。鮮度チェックというのは、販売期限になる商品をチェックして売り場から撤去することを指す。すなわち、商品を「廃棄」するわけである。毎日行うのは、おにぎり・サンドイッチ・パンやお弁当などの食品の廃棄である。同じように、カウンターで販売する揚げ物・焼き鳥・肉まんなどに対しても販売期間をチェックして、必要なら廃棄する。

「もったいないなー」と思うのは、まず、おにぎり・サンドイッチ・パンやお弁当などの販売期限は消費期限より何時間も前に設定されている（普通は消費期限の2時間前である）ので、商品を売り場から撤去する時点ではまだ食べられるからである。まだ食べられるのに、多くの食べ物が廃棄になってしまう。また、カウンターで売っている揚げ物・焼き鳥・肉まんなどの販売期限は、一般的に作ってから4～6時間が販売期間となる。作ってから4～6時間が過ぎても、もちろん、まだ食べられる。しかし、食感は揚げたてのものより若干悪くなってしまう。食感が悪くなることだけで捨てられてしまって「もったいないなー」とつくづく思う。

故郷の中国においては、山間部などの地域を中心に、貧困のために普通にご飯を食べられない家庭はまだ多く存在している。栄養不足のため体が弱くて非常に痩せている子供の姿も時々報道されている。また、都市においても、街中に寝泊まりするホームレスが見られ、非常に苦しい生活を送っている。中国だけではなく、日本においても、生活が苦しく、栄養バンランスのとれた食事を食べられない人が存在しているだろう。コロナ禍の中で失業する人たちや、一人暮らしの高齢者たちなどは決して少なくないだろう。私の周りでも経済的に困窮している留学生が多い。もし支援として、安全を確保した上で、まだ食べられるのに廃棄されてしまう食品を提供できれば、彼らはより安心な生活を送れるようになるのではないかと思う。

以上に述べたように、まだ食べられるのに捨てられてしまうことは「もったいない」。本稿では、食品ロスを削減しながら、経済的に苦しい人たちを支援し、安心な生活をサポートする方策を提案する。具体的には、自動販売機のように街角

に設置する「セルフサービスフードバンク」という仕組みを検討する。

## 2. 日本の食品ロスの現状

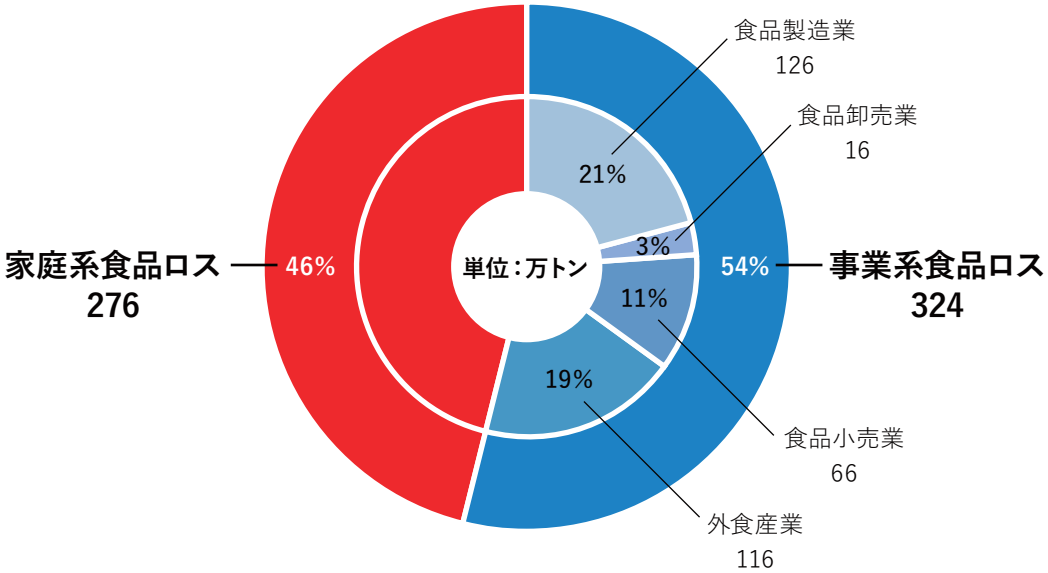
農林水産省によると、「食品ロス」とは本来食べられるのに捨てられてしまう食品をいう。日本の食品廃棄物等は年間2,531万トンで、その中で本来食べられるのに捨てられる「食品ロス」の量は年間600万トンになっているという。図1が示すように、事業系食品ロスは324万トン、家庭系食品ロスは276万トンであり、半々となっている。事業系の食品ロスをさらに4業種に分類すると、食品製造業が126万トン、食品卸売業が16万トン、食品小売業が66万トン、外食産業が116万トンになっている。日本の総人口で割れば、1人当たりの食品ロス量は年間約47kgとなる。

日本ではこれほどの大量な食品ロスが発生しているのに対して、世界中では約8億人が栄養不足だという。自然の恵みを受けながら大切に作られた食品をより効率的に利用するには、どうすればよいだろうか。

## 3. 食品ロス削減事業の一つ：フードバンク

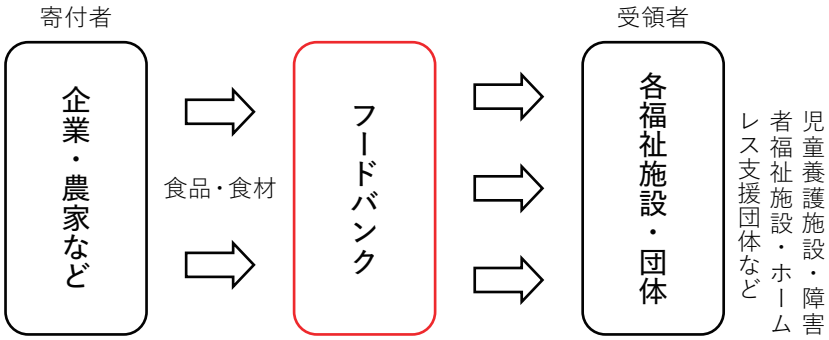
「フードバンク」は、「食料銀行」を意味する。まだ食べられるのに、さまざまな理由で廃棄されてしまう食品を、食べ物に困っている施設や人々に届けるシステムのことをいう。図2が示すように、一方に余っている食べ物があり、他方で食べ物に困っている人がいて、フードバンクはこの両方をつなぐ。アメリカに短期留学した時にフードバンクでボランティア活動をした経験を踏まえ、ここではアメリカのフードバンクと日本のフードバンクそれぞれについて述べる。

図1　日本における年間食品ロスの実態（平成30年度）




出所）農林水産省「食品ロス量（平成30年度推計値）の公表」を参考に、筆者作成
https://www.maff.go.jp/j/press/shokusan/kankyoi/210427.html

図2　フードバンクの仕組み




出所）農林水産省HPを参考に、筆者作成
https://www.maff.go.jp/j/shokusan/recycle/syoku_loss/foodbank.html

### 3.1　アメリカのフードバンク

中国で大学生だったとき、アメリカのユタ州に1カ月間短期留学した。その時は、週何回も現地のフードバンクでボランティアとして活動し、食品の品出しや梱包などを手伝った。ユタ州にあるこのフードバンクは、個人の家庭やスーパーマーケットなどから食料の寄付を受ける。そして、生活に困窮している人たちはスーパーで買い物するように、ショッピングカートを使ってフードバンクで自分が必要な商品を取って家に持ち帰ることができる。もちろん無料である。その時は、初めてこのような食品リサイクルの方法と出会って感銘を受けた。中国においては、お客さんを食事に招待した時、食べきれないほど多くの料理を出すほど礼儀正しいという風習がある。しかし、大量の食品が食べられなくて食品ロスになってしまう。アメリカでのボランティア活動を通して、フードバンクのようなリサイクル的な、余った食品を集めて必要な人に提供する仕組みが将来さらに発展することで、よりよい社会をつくることができるではないかと考え始めた。

### 3.2　日本のフードバンク

農林水産省の調査によると、フードバンクの2018年の食品取扱量は2,850トンである。この量は年間食品ロス量（600万トン）の0.5%未満である。食品提供は、農家、食品製造業者、小売業者、生協などから受ける割合が高い。食品受取先については、「子ども食堂」「生活困窮者支援」「社会福祉団体」などが6割超を占める。日本のフードバンクは、現状として以下のような課題を抱えていると思う。

①提供食品が不足している

年間食品ロス量の0.5%以下しか扱っていないということは、ごく一部の食品しかフードバンクに回収されていない。食品提供者は主に大手の農家や企業で、家庭内の食品ロスはフードバンクに提供されていない。

②物流のコストが高い

食品提供者が少なく、食品受取先も極めて限定されているため、食品提供者からフードバンクまで、フードバンクから食品受取先までは長い距離の流通が必要になる場合が多い。従って、物流コストが高くつき、フードバンクの運営が難しくなってしまう。

③人力不足

フードバンクの運営は、食品寄付の受け取りと管理、寄付者と受贈者との連絡、食品の流通などに多くの人力が求められている。しかし、運営資金不足に加え、少子高齢化の日本社会では、フードバンクで働く人材を確保することが難しい。

④フードバンク活動に対する社会的認知度が低い

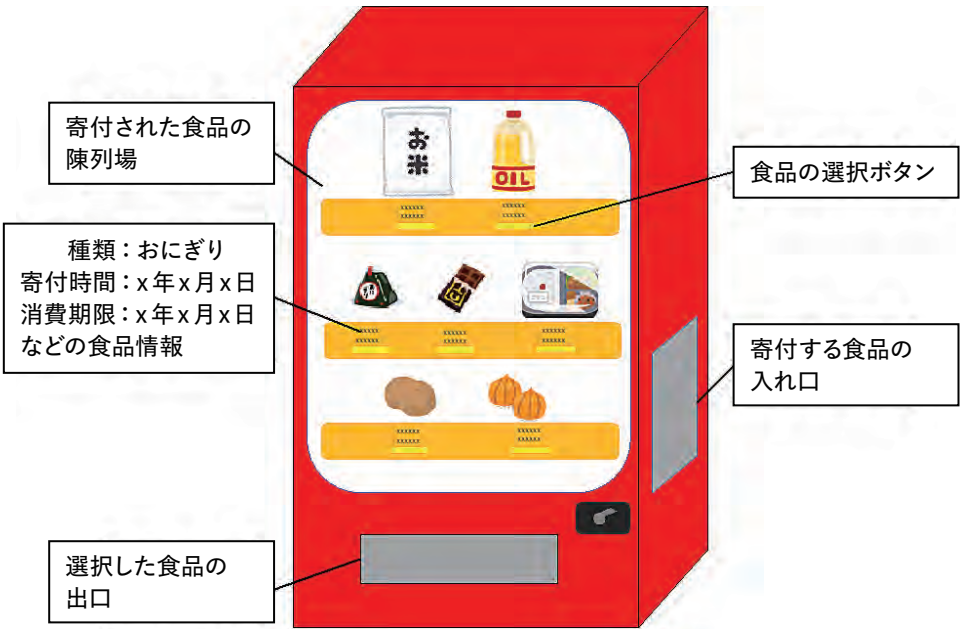
アメリカのフードバンクほど普及しているわけではないため、日本のフードバンクは一般社会における存在感が薄い。社会的認知度が低いため、事業者や家庭からの食品提供が少ないだけではなく、食べ物に困っている人たちの利用率も低い。

## 4. 具体的な提案

日本のフードバンクにある課題を踏まえ、ここで私が提案したいのは、自動販売機のように街角に設置する「セルフサービスフードバンク」である。

セルフサービスフードバンクは自動販売機に似た機械である。図3はセルフサービスフードバンクのイメージを示す。自動販売機と違うのは、出口のほかに、入れ口もついている。また、陳列するのは商品ではなく、寄付された食品である。

図3　セルフサービスフードバンクのイメージ図



寄付される食品は毎日変わるため、陳列する食品の種類は一定ではない。1つ1つの食品の下に食品情報を記録する電子ディスプレーとボタンがついている。セルフサービスフードバンクの働きには、①食品寄付―②食品情報の登録―③食品の選択―④食品を受け取るという4つの部分によって構成される。

①食品寄付

街角にあるコンビニ・スーパー・飲食店で売れ残った食品や、個人の家庭で余った食品などは、セルフサービスフードバンクに寄付できる。セルフサービスフードバンクの入れ口に食品を1つずつ入れると、食品の寄付が終わる。

②食品情報の登録

食品が寄付されると、AIによって自動的に食品をスキャンし、食品の種類・消費期限などの情報を獲得できる。寄付される時点で期限を過ぎたものを返却することで、安全を確保する。食品のスキャンが終わると、その食品はセルフサービスフードバンク内部の透明な陳列場まで搬送される。食品の下部にある電子ディスプレーに獲得した食品情報を示す。誰にも受け取れられないまま、セルフサービスフードバンクのなかで期限が切れた食品は、陳列場から自動的に撤去される。

③食品の選択

食べ物に困っている人たちは、自動販売機で買い物するように、セルフサービスフードバンクに陳列している食品の様子と電子ディスプレーにある食品情報を読み取り、自分のニーズに合わせて食品を選択することができる。特定の権限を設定することや、人ごとに選択できる食品の数を限定するなどの工夫で、セルフサービスフードバンクにある食品を公平に分配できるようにする。

④食品を受け取る

自動販売機で買い物するように、欲しい食品のボタンを押し、出口から食品を取って受け取りを完了する。

例を挙げてセルフサービスフードバンクの具体的な使い方を説明する。例えば、家庭に余ったお米1袋をセルフサービスフードバンクに寄付したいとき、まずはお米を近くのセルフサービスフードバンクまで持っていく。街角に設置しているので、近くのコンビニに行くぐらいの距離で着ける。着いたら、お米を入れ口からセルフサービスフードバンクに寄付する。入れたお米の情報は自動的に読み取られる。そして、お米はセルフサービスフードバンク内部の透明な陳列場まで搬送されて外から見えるようになる。お米の下にある電子ディスプレーに「種類：お米；寄付時間：x年x月x日；精米時期：x年x月x旬」のような情報が示される。お米に困っている人は、お米の情報を読んでボタンを押すことで、セルフサービスフードバンクからお米を受け取ることができる。

## 5. 未来への展望

自動販売機のように街角に設置する「セルフサービスフードバンク」が普及すると、以下の効果が得られると期待できる。

まず、セルフサービスフードバンクは自動販売機のように設置するので、店舗のような場所は不要となる。操作方法は自動販売機に似ているので、高齢者や子どもでも簡単に使える。そのため、多くの利用が予想される。

また、セルフサービスフードバンクを街角に設置することで、食品を寄付することや受領することへの物理的・心理的ハードルが下がる。食品がフードバンクに届くまでの物流コストと、食品がフードバンクから受贈者の手元に届くまでの物流コストを著しく削減することができる。

そして、コンビニ・スーパーなどの事業者に限らず、個人経営の食品製造者や地域の家庭などでも余った食品をセルフサービスフードバンクに寄付することができる。誰でも、いつでも寄付できるので、それぞれの地域で余った食品をより効率的に利用することができる。

最後に、セルフサービスで食品の寄付・登録・受け取りを行うので、セルフサービスフードバンクの運営にかかる人力はほとんどなく、人力不足の問題の解決も期待される。

## 6. まとめ

以上のように、本稿では、自動販売機のように街角に設置する「セルフサービスフードバンク」を提案した。将来、食品ロスを大幅に削減するだけでなく、食べ物に困っている人たちを支援し、より安心な生活を提供できると期待される。

参考文献


- 農林水産省「食品ロスとは」
https://www.maff.go.jp/j/shokusan/recycle/syoku_loss/161227_4.html
- 農林水産省「フードバンク」
https://www.maff.go.jp/j/shokusan/recycle/syoku_loss/foodbank.html
- 農林水産省「平成31年度持続可能な循環資源活用総合対策事業 フードバンク実態調査事業 報告書（公益財団法人 流通経済研究所）」令和2年3月
https://www.maff.go.jp/j/shokusan/recycle/syoku_loss/attach/pdf/foodbank-22.pdf
- 小林富雄「フードバンク活動における食品ロスの再分配と流通機能：セカンドハーベスト名古屋のケーススタディと欧米韓との比較分析」『農業市場研究』2012年21巻1号 p. 35-41
https://doi.org/10.18921/amsj.21.1_35
- セカンドハーベスト・ジャパン　ホームページ
http://2hj.org/
- YAHOO JAPANニュース「食品ロスと貧困を救う『フードバンク』は資金不足 持続可能なあり方とは」2018年2月28日
https://news.yahoo.co.jp/byline/iderumi/20180228-00081872
- TABITHA'S WAY LOCAL FOOD PANTRY ホームページ
https://tabithasway.org/


［受賞者インタビュー］

## 自分のアイデアを論文にまとめ上げて達成感があった。

**――コンテストに応募した理由、きっかけは？**

教務係のところでポスターを見て、コンテストの情報を知りました。サステナビリティにずっと関心を持っているし、賞金も魅力的なので、応募しようと思いました。論文を書く練習もしたかったです。

**――この論文を書き上げるまでに、どのくらいの時間がかかりましたか？**

1カ月。

**――この論文を書く上で苦労したことはありますか？**

一番苦労したのは、アイデアでした。いろいろな案を考えましたが、最後は一番提案したい「セルフサービスフードバンク」をテーマにしました。その後は、分かりやすいように図を作ることに苦労しました。

**――この論文を書いたことで良かったことはありますか？**

自分のただの一つのアイデアを実現するために、いろいろな調査をしたり、具体的な対策を考えたりして、最後に論文にまとめることは、とても達成感がありました。

留学生特別賞［大学生の部］

# 留学生から見る老舗旅館に対する改善策の提案及び観光まちづくり

高崎経済大学　地域政策学部３年
尹 思源　いん しげん（写真右）
高崎経済大学　地域政策学部３年
金 秀玟　きむ すみん（写真左）

［要約］
私たちはインターンシップでの経験を通して、観光資源の乏しさと立地条件の悪さによって発生する繁忙期と閑散期の格差と住民及び運営側の労働生産性の低さという課題を見つけた。私たちはこのような課題を解決するため、紀南体験巡りと従業員の労働生産性を向上させる３つの対応策を提案する。紀南体験巡りは30代子連れの家族をターゲットとする体験型ツアーのことである。労働生産性を向上させる３つの対応策はアイデア・コンテスト、従業員の自由度の向上、顧客による従業員に対するフィードバックのことである。このようなツアーと仕組みを導入することで、龍神村の宿泊業は収益が増加し、龍神村を訪れる観光客はサステナブルな観光を楽しむことができるようになる。そして、このようなサステナブルな観光を通じて、地域ブランドの価値が高まり、結果的には地域活性化にもつながる。私たちは衰退しつつある地域をサステナブルな観光を通じて活性化することで、サステナブルな社会をつくることができると考える。

## 1. はじめに

日本では少子高齢化による人口減少が大きな問題になっており、老年人口が急速に増加する一方、生産年齢人口は年々減少している。また、地方財政力の疲弊によって様々な問題が引き起こされている。総務省の調査によると、過疎地域には人口流出により、観光客・住民の移動困難、移住・交通の停滞などの問題があるという(注1)。人口減少に歯止めをかけるとともに、地域活性化の推進は急務だと言えるだろう。

一方、地域活性化において重要な役割を担っている観光・宿泊業界には、客室稼働率が低い、労働生産性が低い、賃金水準が低いなどの課題が挙げられる。また2020年から新型コロナが流行し始め、観光、宿泊業界とも大きな打撃を受けた。観光庁の調査によると、2020年の延べ宿泊数は３億3,165万人泊（前年比－44.3%）で、外国人延べ宿泊者数は2,035万人泊（前年比－82.4%）であった。全体の客室稼働率は34.3%（前年比－28.4%）に減り、旅館の客室稼働率はわずか25%（前年比－14.6%）に過ぎないという(注2)。

以上のように、観光・宿泊業界はいかに問題を解決し、地域活性化を促進させるかが急務と言える。本論文では、私たちが３週間インターンシップに参加していた老舗旅館「季楽里龍神」を取り上げ、問題点と現状を分析したうえでアンケート調査を通し、それらの問題点に対する対策を提案し、さらに地域に与える効果を検討したい。

## 2. 和歌山田辺市龍神村の現状と課題

### ①龍神村と季楽里旅館の現状

田辺市龍神村は和歌山県の中部に位置し、人口は1955年の8,458人をピークとし、その後は減少傾向に転じ、2020年3月では約3,000人となっている(注3)。他の中山間地域の例にもれず、高齢化、過疎化、地域コミュニティーの維持・存続が危ぶまれる状況である。ここ数年、地域の主産業である農林業、観光業が低迷している背景は、温泉以外の観光資源に乏しいこと、「高野～熊野」の世界遺産登録に伴い参詣道として車両の通行は増加したものの、大半は当地域に立ち寄らず通過することが要因として挙げられる(注3)。

季楽里龍神は、「日本三美人の湯」として有名な龍神温泉を擁する旅館である。全室から大自然を眺望することができ、和室・洋室を含め、館内すべて地元紀州龍神材を使用してい

るため、落ち着く雰囲気を味わうこともできる。また、地元の新鮮な食材にこだわり、食べ応えのある和・洋・中のバイキングや会席料理も備えている。しかし、世界遺産の高野山・熊野古道や南紀白浜といった和歌山県の観光スポットへの車での移動が便利な一方、公共交通機関でのアクセスが非常に不便である。季楽里龍神から最寄り駅である紀伊田辺駅までは車で約1時間、バスで約1時間半もかかり、本数も1日4本しかない。また、龍神温泉は極めて良い温泉資源を持っているにもかかわらず、プロモーションが不十分なことや温泉以外の観光資源がないこと、コロナの影響でインバウンドがほとんどなくなったこと等によって衰退しつつあるのが現状である。

**②龍神村の課題**

龍神村が抱えている課題は主に2つある。

1つ目は、繁忙期と閑散期の差が激しいことである。観光庁の宿泊旅行統計調査「宿泊施設タイプ別客室稼働率推移表」によると、旅館の客室稼働率が最も高いのは8月50.4%で、続いて11月41.9%、5月41.5%、3月39.8%、4月39.7%の順となっている(注2)。これらの時期に顧客が多い理由として、3月と4月のお花見、5月のゴールデンウイーク、8月のお盆、11月の紅葉が挙げられる。一方、旅館の客室稼働率が最も低い時は繁忙期の3分の1から2分の1に過ぎず、非常に深刻な状況に陥っている。

2つ目は、住民及び運営側の労働生産性が低いことである。観光庁によれば、観光まちづくりについて、文化、農林漁業、商工業など地域の関連事業者や住民等の多様な関係者の巻き込みや効果的なブランディングやプロモーションの導入などが不十分だという課題が挙げられるという(注4)。龍神村も同じ問題点が挙げられ、店は店のことしか考えず、従業員は売上を向上させることを考えずに最低限の「おもてなし」だけを提供している。そのため、全体の生産性が低いのは大きな課題となっている。

## 3. 課題に関する解決策の構想

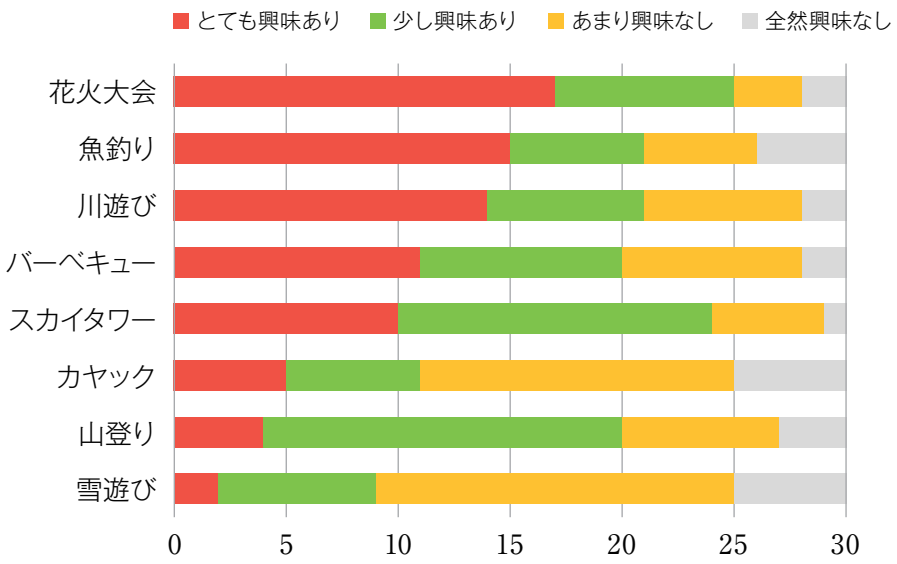
**①紀南体験巡り**

旅館やホテルでは最大収容人数が決まっているため、繁忙期には申込を断らざるを得ない状況が生じる一方、稼働率が低くなる曜日や季節が発生する(注5)。

こうした繁閑の差に対応するため、私たちは「紀南体験巡り」を提案したい。私たちは2021年8月21～22日の2日間にわたり、季楽里龍神を利用している宿泊客30人を対象にアンケート調査を行った。アンケート結果から、季楽里龍神を利用している顧客の年齢層が最も多いのは70代以上、続いて30代、40代の順であり、旅行形態では友人旅行と子連れの家族旅行が約7割を占めていることが分かった。したがって、季楽里龍神を主に利用している顧客層が、30代の子連れの家族旅行客と70代の友人旅行客であることが確認できた。

また、ツアーの種類による参加希望度に関するアンケート結果は、温泉めぐり、体験型ツアー、ガイド付きツアーの順で参加希望度が高かった。また、図1は龍神における温泉以外に期待しているイベントの統計を表したものである。図1から、龍神に訪れる観光客は温泉以外に花火大会、川遊び、魚釣り等を最も期待していることが分かった。アンケート結果をもとに、私たちは紀南体験巡りのペルソナを子供に自然を体験させながら家族と大切な思い出をつくりたい大阪在住の30代子連れの家族と設定し、主なイベントも、花火、魚釣り、川遊

図1　龍神に期待しているイベント（温泉以外）



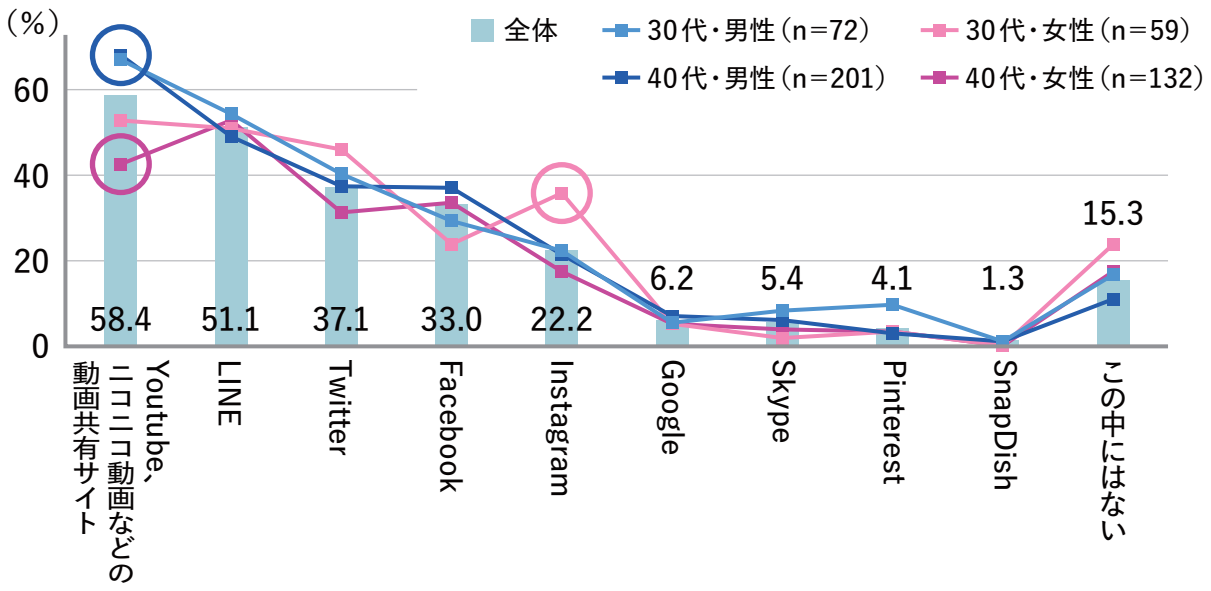

2021年8月21～22日「季楽里 龍神」の宿泊客30人に対するアンケート結果

図２　紀南体験巡りの概要

**スケジュール**

| | 時間 | 種別 | イベント |
|---|---|---|---|
| 1日目 | 12:00～15:00 | 移動 | 難波＆梅田→旅館 |
| | 15:00～16:00 | | チェックイン・休憩 |
| | 16:00～17:30 | 観光 | 護摩壇山スカイタワー（ガイド付き） |
| | 18:00～20:00 | 食事 | バーベキュー・温泉 |
| 2日目 | 7:00～9:00 | 食事 | 朝食 |
| | 9:00～11:00 | 体験 | 梅（夏）／みかん（冬）狩り・カブトムシ狩り体験 |
| | 11:30～14:00 | 食事 | 昼食 |
| | 14:00～16:00 | 体験 | 川遊び・魚釣り（夏）／紅葉・アドベンチャーワールド（冬） |
| | 16:00～18:00 | | 休憩 |
| | 18:00～21:00 | 食事・体験 | 夕食・梅酒飲み比べ・花火・温泉 |
| 3日目 | 7:00～9:00 | 食事 | 朝食 |
| | 9:00～10:00 | | チェックアウト |
| | 10:00～12:00 | 体験 | 梅酒（夏）／みかん（冬）ハンドメイド体験 |
| | 12:00～14:00 | 食事 | 昼食 |
| | 14:00～16:30 | 観光 | 熊野本宮大社（ガイド付き） |
| | 16:30～19:30 | 移動 | 熊野大社→難波＆梅田 |

図３　30代・40台が利用しているSNS　＊数値は「全体」を表示




出典）ドゥ・ハウス「30代・40代のSNS利用に関する調査結果」

びといった体験型イベントにした。

紀南体験巡りの具体的な計画は図2の通りである。紀南体験巡りは、温泉に対するニーズを満たしながら、自然体験もできるように考え出した。また、旅館等の従業員に紀南の観光情報を受講させ、従業員が地域への愛着を深めたうえでガイド役を務めさせ、観光客のガイドへのニーズも満たされると考えられる。2日目と3日目の昼食は、紀南体験巡りと連携している町の店を利用することで、地域活性化も図れるだろう。

紀南体験巡りのアプローチ方法は、旅行サイトだけでなく、インスタグラムを通じた広報にも力を入れることが考えられる。図3は、2019年に株式会社ドゥ・ハウスが発表した「30代・40代のSNS利用に関する調査結果」である。この調査結果から、30代女性の場合、他の年齢層に比べてインスタグラムの使用率が非常に高いことが分かった。そのため、30代子連れの家族をターゲットとする紀南体験巡りのアプローチ方法として、インスタグラムの積極的な活用が効果的だと言えるだろう。

**②従業員の労働生産性の向上**

ホテルや旅館の場合、サービスの質は人に大きく依存するため、人件費が占める割合は非常に高い。したがって、人件費を減らすことは宿泊業を運営する上で非常に重要な課題であるが、無理に人件費を削減しようとすればかえって逆効果になることもある。日本宿泊業支援協会によると、若年層は自動発券システムや無人フロントでも気にしないという声があるのに対し、年配者は宿泊施設で対面式のサービスに安心や快適さを感じる人が多いという(注6)。したがって、利用年齢層が比較的に高い龍神では、従業員を減らすことよりは従業員の労働生産性を高めた方がより効果的だと考えられる。従業員の労働生産性を高めるために私たちが提案したいことは3つある。

1つ目は、従業員を対象に行うアイデア・コンテストである。季楽里龍神では、朝食メニューの構成やレストランの空席を知らせる札など従業員のアイデアからできた仕組みが多くあるため、現場で直接顧客と接しながらサービスを提供する従業員しか見えない問題点があるだろう。したがって、四半期ごとにホテルや旅館の改善案について社内アンケートを実施し、実際に採用されたアイデアを提案した従業員に一定のボーナスなどを提供することで、従業員の労働生産性が高められるのではないか。

2つ目は、従業員の自由度を向上させることである。イリノイ大学が発表したScienceDailyによると、頻繁ながらも短い休みが従業員の集中力と幸福度、生産性を向上させるという(注7)。したがって、従業員の休憩室を整備し、従業員同士が言葉を交わしやすい雰囲気を作ることを通して、職員満足度と労働生産性の向上が考えられる。

3つ目は、顧客による従業員に対するフィードバックである。出口に従業員の名前と顔写真を載せたパネルを設置し、顧客に最も満足する従業員へ投票してもらうよう誘導する。そして、月間得票率が最も高い従業員にボーナスを支給するなどの奨励を与える。このような制度により、従業員が顧客満足度を向上させるため自ら努力することになり、リピーターの増加にもつながると推測される。

## 4. 期待できる効果

以上のように、紀南体験巡りツアーと従業員の労働生産性を向上させる仕組みづくりにより、期待できる効果が3つ挙げられる。

1つ目は、旅館側では従業員の労働生産性の向上と売上の増加が考えられる。従業員のおもてなし・思いやり、アイデアによる給料や奨励が発生すれば、労働生産性を向上させやすくなり、お客様のニーズに対する洞察力、情報収集力、実行力といったホスピタリティ精神が日常の何気ないことから養えると考える。また、ホスピタリティ精神に則った仕事は気持ちよく周りとの関係を築き、満足度が高いサービスを生み出し、結果として顧客満足度と従業員満足度とも向上され、サービスの提供側にとっても利益の増加に結びつくことが考えられる。

2つ目は、観光客側では紀南の魅力を発見しながら様々な体験活動を通し、家族との大切な思い出作りやエコツーリズム、サステイナブルツーリズムなど環境に優しい観光ができることである。紀南体験巡りツアーは体験型観光を通し、緑豊かな農山漁村地域で自然・文化・人との交流等を楽しみながら「ゆとりある休暇」を過ごす滞在型の余暇活動である。地域の文化や自然環境に配慮し、本物を体験し味わうことを通し、観光地の住民と観光客が相互に潤うことが考えられる。地域の文化及び自然資源への配慮を前提としたサステイナブルツーリズムへの取り組みは、地域への経済効果のほか、良好な環境及び文化資源への理解促進と保全をもたらすことも期待できる(注8)。

3つ目は、龍神村における観光まちづくりの競争力の向上である。和歌山県の他地域との連携により、お客様にとって魅力的な選択肢が多くなる中で、お客様に選択される「龍神ならではのおもてなし」スタイルを確立することが重要になる(注9)。そのため、龍神村を中心に熊野古道や白浜など知名度は高い観光地を含め、さらに川遊び、魚釣りといった農林漁業などと連携し、広範囲・多産業を組み込んだ観光ツアーを作ることが独自価値の提供につながる。また、地域内の異業種が持つノウハウや技術を有効に活用し、付加価値の高い商品作り、サービス提供により、観光業にかかわらず、地域農家の所得向上、高齢者世帯の副収入及び生きがい対策につなげ、地域全体の活性化が図れるだろう。

## 5. おわりに

本稿では、和歌山県の旅館「季楽里龍神」でのインターンシップの経験をもとに、留学生から見る老舗旅館に関する改善策及び観光まちづくりの提案について考えた。私たちは、龍神村と宿泊業が抱えている繁忙期と閑散期の格差と従業員及び運営側の労働生産性の低さという課題を解決するため、紀南体験巡りと従業員及び運営側の労働生産性を向上させる対応策を提案した。このようなツアーと仕組みを導入することで、龍神村の収益が増加し、龍神村を訪れる観光客もサステナブルな観光を楽しむことができるようになる。そして、このようなサステナブルな観光を通して、地域ブランドの価値が高まり、結果的には地域活性化にもつながる。私たちは、サステナブルな社会をつくるために衰退しつつある地域を持続可能な形で活性化することが重要であると考える。そのため、各地域に合わせた取り組みを推進し、常に共存共栄を心がけていく必要がある。

文中注

注1）総務省「地域・地方の現状と課題」令和元年6月
https://www.soumu.go.jp/main_content/000629037.pdf
（最終閲覧日2021年8月18日）

注2）国土交通省観光庁「宿泊旅行統計調査（令和2年・年間値（確定値））」令和3年6月30日
https://www.mlit.go.jp/kankocho/content/001413644.pdf
（最終閲覧日2021年8月18日）

注3）田辺市役所「田辺市住民基本台帳人口速報」令和2年3月31日現在
http://www.city.tanabe.lg.jp/kikaku/toukei/files/2020_03_31.pdf
（最終閲覧日2021年8月20日）

注4）国土交通省観光庁 観光産業課「観光や宿泊業を取り巻く現状及び課題等について」平成31年1月28日
https://www1.mlit.go.jp:8088/common/001271444.pdf
（最終閲覧日2021年8月18日）

注5）独立行政法人 中小企業基盤整備機構 経営支援情報センター「中小旅館業の経営実態調査」、『中小機構調査研究報告書』第7巻 第2号（通巻33号）2017年3月
https://www.smrj.go.jp/doc/research_case/h28_ryokan_full.pdf
（最終閲覧日2021年8月18日）

注6）日本宿泊業支援協会「おもてなしのためには必要不可欠!?『人件費』を抑えるために考えるべきこと」2016年10月17日
https://hotelsupport.jp/costcut/016/

注7）University of Illinois at Urbana-Champaign. "Brief diversions vastly improve focus, researchers find." ScienceDaily, 8 February 2011.
www.sciencedaily.com/releases/2011/02/110208131529.htm

注8）NPO法人日本エコツーリズムセンター「文化と自然を守りながら地域が潤う、持続可能な観光地域づくり――熊野をモデルとし、国際基準の導入について考える」2015年1月30日～2月1日　サステナブル・ツーリズム国際認証 熊野フォーラム
http://www.ecotourism-center.jp/article.php/forum150130
（最終閲覧日2021年8月21日）

注9）堀田正子「地域づくり協議会 みらい龍神の商品開発の現状と課題解決の結果について～和歌山県田辺市・みらい龍神の取組み～」『Food Marketing Reserch & Information Center コーディネーター活動支援プログラム結果報告書』
http://www.fmric.or.jp/facobank/support/2010/07ryujin.pdf
（最終閲覧日2021年8月20日）

参考文献


・株式会社ドゥ・ハウス「30代・40代のSNS利用に関する調査結果」2019年3月26日
https://www.dohouse.co.jp/datacolle/rs20190326/

・独立行政法人 中小企業基盤整備機構 経営支援情報センター「中小旅館業の経営実態調査」『中小機構調査研究報告書』第7巻 第2号（通巻33号）2017年3月
https://www.smrj.go.jp/doc/research_case/h28_ryokan_full.pdf


［受賞者インタビュー］

## アンケート作りやツアーの企画が学びとなり、自分の考えを伝えることに勇気が持てるようになった。

**――コンテストに応募した理由、きっかけは？**

尹）高崎経済大学地域政策学部観光政策学科の井門先生（ゼミの先生）が、このコンテストを教えてくれました。インターネットで調べるととても意義あるコンテストであったため、参加しました。

金）ただ働くためにインターンシップに行くのではなく、今まで大学で学んだことを活かす機会として活用するため、より明確な目標設定ができるNRI学生小論文コンテストに応募しました。

**――この論文を書き上げるまでに、どのくらいの時間がかかりましたか？**

4カ月。

**――この論文を書く上で苦労したことはありますか？**

尹）苦労したのは、ツアーを作ることだったと思います。私たちの小論文の最も重要な部分は、ツアーのスケジュールでした。2人ともツアーを作ったことがなく、かなりたくさん調べた上で、和歌山の観光スポットを分析しながら作ることができたと思います。

金）論文に活用するため、アンケートを作成したことです。設問文が適切な表現か、所要時間が長くはないか、目的に沿った質問なのか等に気を配りながら、回答者が疲れないようなアンケートを作成することに苦労しました。

**――この論文を書いたことで良かったことはありますか？**

尹）この論文を書くことで、初めて現場でアンケート調査を行い、初めてツアーを作りました。ツアーを作るために様々な資料を入手し、和歌山への愛着を持ちました。さらに、約5,000字で書かれた小論文を6分以内でプレゼンテーションするのはかなり難しかったです。どの部分を説明し、どの部分を省略するかかなり迷いましたが、まあまあできました。

金）街頭調査とツアーの企画をする上で必要な知識や技術を身に着けることができたことです。そして、私たちが書いた論文の価値を認めてもらった経験を通して、自分の考えを伝えることに勇気を持つようになりました。

NRI学生小論文コンテスト2021

# 高校生の部

受賞論文

大賞［高校生の部］

# ～バングラデシュから始まるエシカルファッションの時代～
# 縫製工房Clothes Mom

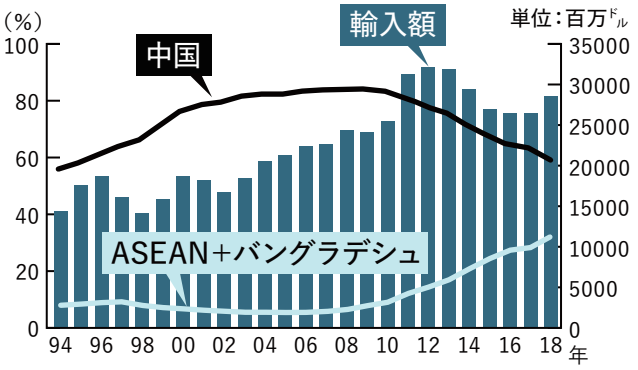
函館白百合学園高等学校　2年
平松 明華　ひらまつ はるか

［要約］
衣服は人間の生活の柱で、素晴らしい文化だ。しかし、その衣服を生産する人々は、劣悪な労働環境の下で犠牲になっている。衣服を生産する過程で誰も犠牲にならない未来にするために、私はエシカルな縫製工房Clothes Momの設立を提案したい。バングラデシュの女性たちによる、人間にも地球にも優しいエシカルな生産様式で、世界中にエシカルファッションを普及していくのが私の描く未来だ。

衣食住という熟語があるように、衣服は私たちの生活に欠かせないものだ。衣服の起源は、体を暑さや寒さから守る「気候適応説」や、裸でいることの恥ずかしさをなくす「羞恥説」など様々な説があるが、長い年月を経て、衣服の役割は変化し続けていると思う。身を守るために布をまとっていた原始時代から、身分や階層による差異を示すようになった中世、そして近代化が進み、身分に関係なく好きな衣服を選び、自由にお洒落を楽しめる時代になった。それは大量生産、大量廃棄の始まりだった。今や衣服は多くのアパレル企業で、驚くほど安値で販売されている。お洒落で流行にあった衣服を安く手に入れられる。一見便利でよいことのように思われるが、『はじめてのエシカル』（末吉里花 著）という書籍が、衣服の安さの裏側にある残酷な事実を教えてくれた。

2013年4月24日、バングラデシュでラナプラザというビルの崩落事故が起きた（図2）。違法に建築された8階建てのビルには縫製工場が入っており、3,000人以上の死傷者が出た。その中の多くは、縫製工場の従業員の女性だった。ラナプラザでは、主に欧米資本の大手企業の洋服を作るために、10

図1　日本の衣類輸入額と国・地域別シェア




バングラデシュを含むアジア諸国の衣服輸出量は中国より多い
出典）繊研新聞社HP　https://senken.co.jp/posts/latest-trading-3

図2　ラナプラザ崩落事故

ラナ・プラザ崩落事故とは？
ラナ・プラザ崩落事故（ダッカ近郊ビル崩落事故）は、2013年4月24日にバングラデシュの首都ダッカから北西約20kmにあるシャバール（サバール）で、8階建ての商業ビル「ラナ・プラザ」が崩落した事故を指す。死者1,127人、行方不明者約500人、負傷者2,500人以上が出たこの事故は、ファッション史上最悪の事故とも呼ばれている。

引用元）IDEAS FOR GOOD
https://ideasforgood.jp/glossary/rana-plaza-collapse/

代から20代の女性たちが1日14時間以上働いていたという。月給は日本円で5,000円。バングラデシュの平均月収は8万円だ。従業員の中には妊婦や子供がいる人もいる。職を失うわけにもいかず、ビルに倒壊の可能性があると知っても、彼女たちは出社し続けた。そして事故が起きた。

この事故はファッション業界に大きな動きを与えた。バングラデシュの他に、中国、ベトナム、インドなど世界各地の縫製工場の労働環境が劣悪であることが明るみになった。従業員の待遇のみならず、コットン栽培に使われている薬品が人体に危害を及ぼすことが判明した。一部の人間だけの利益のために大量生産、大量廃棄を繰り返す「近代」の生産様式から脱却し、労働者や衣服の素材のことも配慮し、地球の持続可能性に重点を置いた「現代」の生産様式へ、革命を起こすべきだという声が多く上がっている。

そんな時代背景も踏まえ、私が提案したいのは、バングラデシュにClothes Mom(クローズ マム)という縫製工房を建てることだ。Clothes Momの由来は、工房で働く女性を「衣服の母」と表現したのと、「働く女性たちに寄り添う」(close)を掛けている。名前の通り、雇用条件は15歳以上60歳未満の女性であることと、現在の収入や環境では安定した生活が営めないことのみだ。現在、このようなエシカルな企業は多いが、Clothes Momは一味違う。その理由を、① 会社の仕組み、② 生産する衣服の素材、③ 衣服のデザインの3つの観点から説明したい。

**①会社の仕組み**

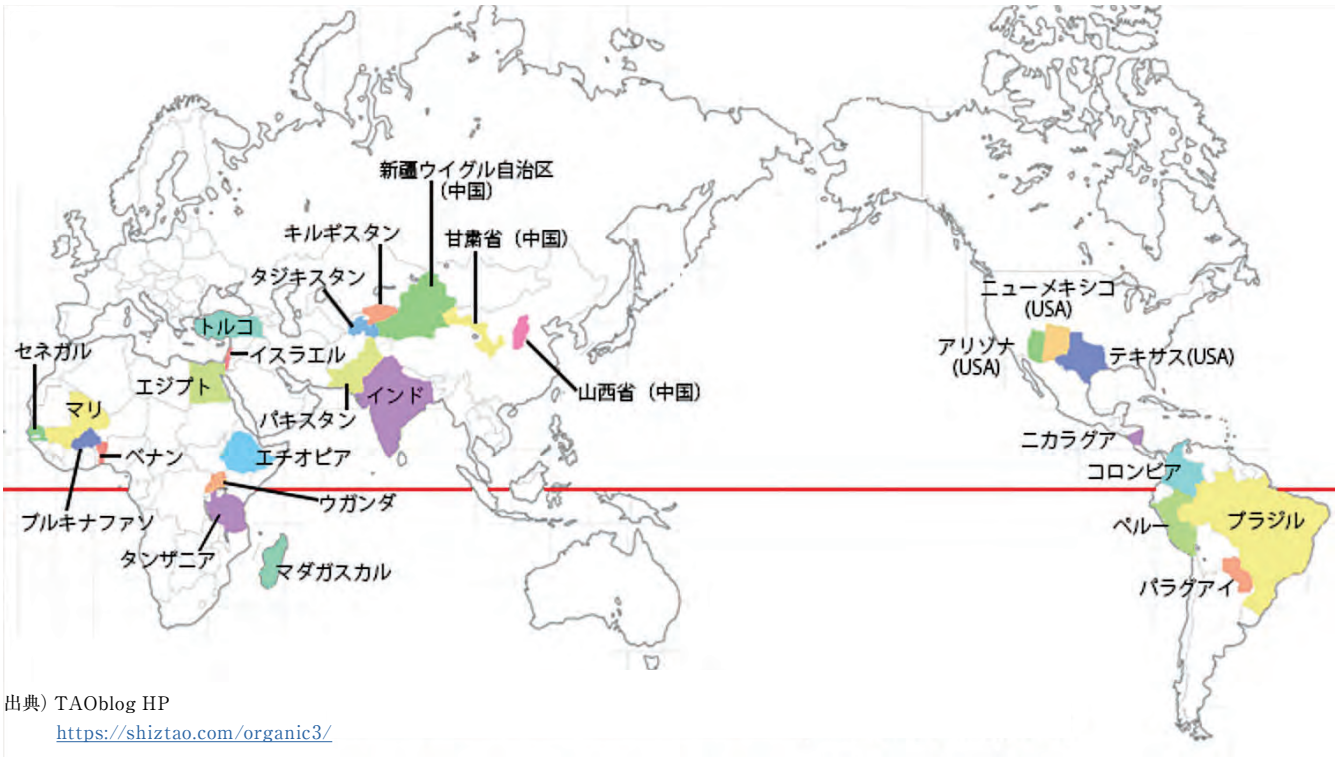
Clothes Momの本部は、首都ダッカに置く。本部には最初の工場と、青年海外協力隊から経営について指南を受けた取締役用の会社、職業訓練施設、そして保育園が併設されている。この本部から、バングラデシュ内の8管区内に1社ずつ、国内計8社の設立を目指す。国内の各要所に工房があれば、出稼ぎに行かなくてもよいのではないか。それと、現地の生産を回していくのに不可欠なのは、青年海外協力隊だ。彼らが従業員たちの見本となり、会社の経営を指南するのだ。Clothes Momは、労働時間は休憩を入れて6時間以内、週休2日制、更に生理休暇、出産休暇、育児休暇の適用を徹底したい。また、病気などで働きに出られない場合でも、青年海外協力隊の社員によるオンラインでの面接で「非常勤社員」になれる。「非常勤社員」には本部から裁縫セットが支給され、ボタンをつけたり刺繍を入れたりといった、自宅や病院でもできる仕事が与えられる。それらの実現には、公正な立場で会社を動かす第三者が、現地では必要となるだろう。

最も注目してほしい点は、保育園の併設である。若い女性の従業員が育児の心配をせずに働くことができる。保育園は従業員の子供以外でも通園できる。更に、付加的なものとして、遊具を発電可能なものにする。なぜならバングラデシュは電力の供給が不十分であるからだ。例えばグローブジャングル。子供たちがそれを回して遊べば発電ができる。そして工房や保育園の屋根にソーラーパネルをつける。電気を工房のミシンなどを動かすのに使えば、エシカルな労働の仕組みも実現できるだろう。

**② 生産する衣服の素材**

バングラデシュは中国に次いで世界第2位の衣服輸出国だが、コットン栽培は盛んではない。無農薬で非常に注目を集

図3　オーガニックコットン生産国




出典）TAOblog HP
https://shiztao.com/organic3/

めているオーガニックコットンを使用したいと考える。しかし、畑は3年以上農薬を使用していないものでなくてはならず、更に多くの水を使うので、現実的には難しい。他国から輸入するにしても、$CO_2$の排出など様々な課題がある。そこで着目したいのは、隣国であるインドの存在だ。インドのオーガニックコットンの生産量は、世界の50%以上を占める（図3）。古くから綿花の栽培が盛んだったインドに、オーガニックコットンを供給してもらうのだ。運搬はClothes Mom本部の青年海外協力隊が担い、PHVで運ぶ。輸入することに変わりはないが、輸入国をインド一択にすれば、$CO_2$の排出量は削減できるのではないか。どこまでも環境に優しい素材と仕組みを考えて、このように思い至った。

**③衣服のデザイン**

Clothes Momは、世界各国の全ての性別、人種の人にエシカルな衣服を提供する工房である。例えば日本では、ファッションモデルなどインフルエンサーの服装を見て、「これ良い！」と人から人へ流行が生まれる。少数派になりたくないという精神から、大衆規模で衣服の好みが常に変化する。そのせいで、サイズやほつれなど不具合が理由ではなく、「飽きた」「流行ではない」という理由で大量の衣服が捨てられてしまう。

それを防ぐために、Clothes Momは世界各国の「ニーズ」をよく理解しなければならない。気候、肌や髪の色、各国の文化や好まれるデザインに合わせ、体のサイズや流行が変化しても着回せるような、フリーサイズの衣服を作りたい。簡単に言えば、国や地域の特色に合わせた衣服を作り、国や地域ごとに売る、という具合だ。

そして最大の目標は、Clothes Momの衣服にフェアトレード認証ラベルを付けることだ。Clothes Momの従業員によって作られた衣服は、彼女たちの労働に見合った適正価格で販売されなければならない。本部ではPeople Treeを始めとするエシカルな企業と連携を取り、先進国から発展途上国まで、少しずつClothes Momの衣服を流通させたい。

私たち人間が作り出した衣服という素晴らしい文化が、今同じ人間を苦しめてしまっている。学校はそれを教えてはくれない。Clothes Momの目的は、エシカルファッションを世界中に広めること、衣服作りに携わる人々の苦痛をなくすことだ。今、幸福を感じているのは、簡単に安く手に入った服を大量に買っては捨て、を繰り返している先進国の人々だけだ。それが30年、50年後、衣服の生産に関わる人々も幸福を感じることができるようになる。バングラデシュの「衣服の母」たちが紡ぐ「幸福の衣服」を、誰もが身に着けることが、私が描く未来予想図である。

参考文献


- 末吉理花『はじめてのエシカル――人、自然、未来にやさしい暮らしかた』山川出版社、2016年
- 実教出版『ニュービジュアル家庭科2021』2021年
- 繊研新聞社HP「最新 通商事情③ 繊維業のFTA活用に変化の兆し」2019年11月11日 https://senken.co.jp/posts/latest-trading-3
- IDEAS FOR GOOD https://ideasforgood.jp/glossary/rana-plaza-collapse/
- TAOblog HP「オーガニックコットンの生産量・生産国」2019年1月23日 https://shiztao.com/organic3/


［受賞者インタビュー］

**このテーマを真剣に考えたことと、受賞して東京に来たことは、これまでで一番貴重な経験。**

**――コンテストに応募した理由、きっかけは？**

学校で配布される『Highschool Times』にコンテストの広告が載っていました。ちょうど“持続可能性”に興味を持っていたので、応募しようと決めました。

**――この論文を書き上げるまでに、どのくらいの時間がかかりましたか？**

2カ月ほどです。

**――この論文を書く上で苦労したことはありますか？**

テーマは決めてもアイデアが思い浮かばなかったり、設定されている字数に届かなくて悩みました。論文を書きながら知識を増やしていた感じです。

**――この論文を書いたことで良かったことはありますか？**

衣服をめぐる問題について真剣に考えられたことと、やっぱり受賞できて初めて東京に来られたことです。これまでの人生で一番貴重な経験になりました。

優秀賞［高校生の部］

# 日本を第二の故郷に
## ～未来の人材にクラウドファンディング～

本庄東高等学校　2年
**篠原 瑞希**　しのはら みずき

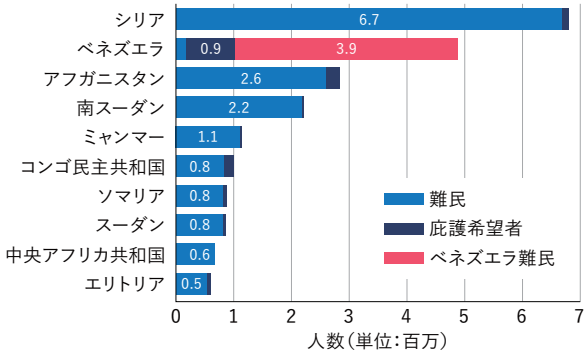
［要約］
現在、大切な故郷を捨てて難民になった人は世界で約8,000万人以上いる。しかし、日本の難民認定率は1%を満たさず、その数は47人である。1人でも多くの難民の命や未来を救うためには、彼らを保護し、自立するまで見届けられる環境を作ることが大切である。「未来の人材にクラウドファンディング」をすることで成り立つ難民受け入れ施設「SMILE FACTORY」で、彼らが過ごしていく中で笑顔を取り戻し、自分の輝ける場所を見つけられることを願っている。

2021年8月中旬、私はニュースで流れた映像を見て衝撃を受けた。流れていたのは中東の国の映像だった。自分の生まれ育った国を捨てて国外に脱出しようとする人々が空港の滑走路にあふれ、他国の飛行機にしがみついて助けを求めている。愛する母国を捨て、国外に逃げたいという人々の気持ちはどんなものだろうか。そしてその光景を、食卓で温かい食事を取りながら家族と団らんし、映像を見ている私。このような光景が世界からなくなるようにするにはどうしたら良いか、考えてみた。

## 1. 世界の難民の現状

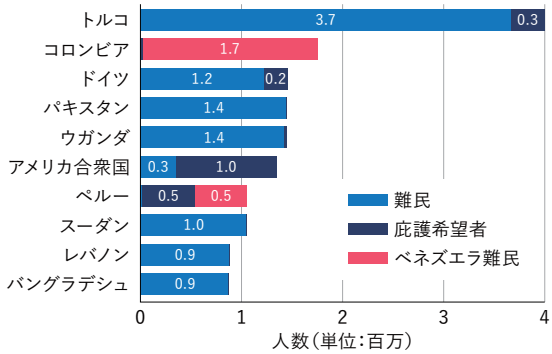
2020年末時点で、戦争や迫害により故郷を追われた難民や国内避難民の数は8,240万人と、前年度より290万人増加し、過去最多の人数となった。新型コロナウイルスの影響で移動が制限される中でも、内戦や国内の混乱などにより増え続けている。図1を見ると、シリアからミャンマーまでの上位5か国だけで、世界の全難民の半分以上を占めていることが分かる。原因は民主化運動などによる国内の政情不安や内戦の長期化など様々だが、ここでは安全な生活を送ることができないと判断した人々が国外に脱出している。

図1　国外へ逃れた難民の出身国上位10か国（2020）




出典）国連UNHCR協会「難民の出身国・受入国」
https://www.japanforunhcr.org/refugee-facts/origins

図2　国外へ逃れた難民の受入国上位10か国




出典）国連UNHCR協会「難民の出身国・受入国」
https://www.japanforunhcr.org/refugee-facts/origins

しかし、この多くの難民はいったいどの国で受け入れられているのだろうか。難民の多くは発展途上国へ避難する。中でも、図2を見ると難民の出身国1位であるシリアの近隣国トルコが最大の難民受入国であることが分かる。それに次いで、難民の出身国2位であるベネズエラの隣国コロンビアが2位となった。多くの難民がトルコ・コロンビアのように近隣諸国で受け入れられており、近隣国の負担の増大も大きな問題になっている。

## 2. 日本の難民認定率

このように、多くの難民を受け入れている国が世界には多くある。では、日本はいったいどれだけの難民を受け入れているのだろうか。2020年の日本での難民申請者は3,936人で、そのうち認定された人は47人であった。認定率は0.5%と、1%を切る結果となった。これは図3からも読み取れるように、世界各国と比べても非常に低い認定率である。どうして日本はこんなにも認定率が低いのだろうか。それには2つの理由があると言われている。

1つ目は、積極的に難民を受け入れようとする意思がないことである。難民の受け入れによって生じる文化や価値観の違いや国民から反対される等の問題があり、いまだ難民問題に消極的になってしまっているのだ。世界には難民が助けを求める権利がある国や難民を助けることの大切さが社会的に認識されている国など、難民問題に積極的な国が数多くある。これらを踏まえて考えてみると、日本の消極的な姿勢は国民の難民問題への関心度の低さの表れとも言えるだろう。

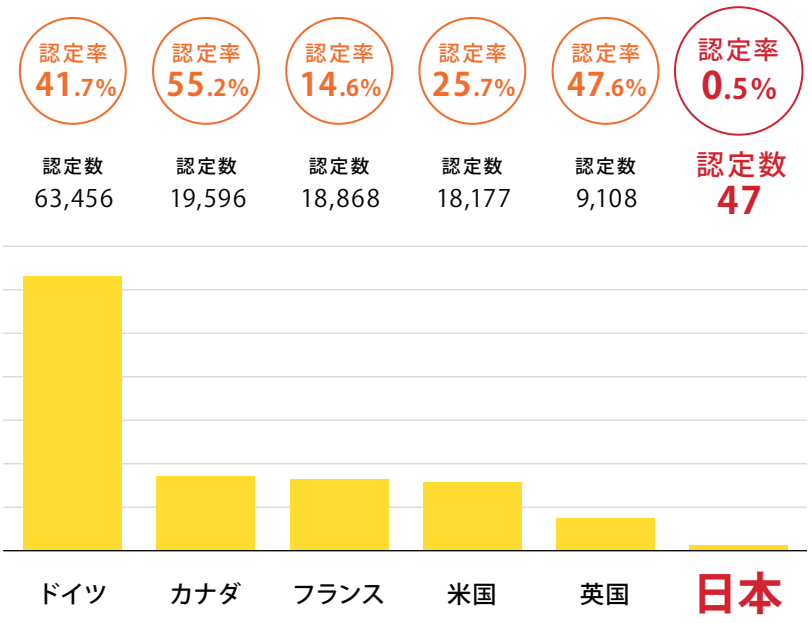
2つ目は、難民認定の実務は法務省出入国在留管理庁（入管）が行い、難民を「保護」するのではなく「管理」するという視点が強い、という難民認定制度そのものの問題である。現在の制度では、空港で「難民として受け入れてほしい」と訴えたとしても、収容されてしまったり、難民不認定になった場合は国に強制的に送還されたりするといった事態が起きている。もちろん入国のチェックなどは治安を守るために必要なことであるが、本来、チェック後は入管ではなく別の独立した機関が難民の審査を行うべきなのだ。また、認定だけでなく自立までサポートする機関も作る必要があるだろう。

## 3.「SMILE FACTORY」

ここまで話してきた難民の現状や日本の難民政策の問題点などを踏まえて、私が提案するのは難民受け入れ施設「SMILE FACTORY」の設立である。この施設は、一見単なる受け入れ施設だが、実は3つの大きな特徴を持っている。

1つ目は、衣食住を無償で提供する代わりに、難民の方々にボランティアとして学校や英会話教室、大学などに出向き、母国語を教える先生になってもらうという制度があるということだ。近年、日本ではグローバル化が進み、様々な言語を学ぶ人が増えてきた。にもかかわらず、教師の数が少なく、なかなかネイティブの先生とコミュニケーションをとる機会がないのが現状である。そこで、難民として「SMILE FACTORY」にいる方々に、ボランティアのネイティブティーチャーという立

図表3　2020年の難民認定率の比較




出典）UNHCRRefugeeDataFinder,法務省発表資料に基づき認定NPO法人難民支援協会が作成した資料
https://www.refugee.or.jp/refugee/japan_recog/

場で学生や資格を取りたい大人に無償で授業をしてもらうのだ。この制度を使えば、教えてもらう側は授業料や高い会員料金を払わずにネイティブの人と触れ合うことができ、教える側はボランティアであるためお給料は出ないが、衣食住は保障され、かつ多くの日本人と関わりを持つことができる。まさに誰にとっても得しかない制度である。

2つ目は、この施設を都心に作るのではなく地方に作る、ということだ。地方に作ることによって、その地域の活性化を図ることが狙いである。確かに、都心の方が何かと便利なことは間違いない。だが、都心に出てしまうとインターネットなどでしか会話をしなくなり、人と目を見て話す機会が減るのではないか。日本に来てすぐに都心に出るのではなく、地方で農家の手伝いをしたり行事に参加したりすることで多くの日本人と目を見て日本語を使って話し、コミュニケーションを取りながら少しずつ日本という国の文化を知っていくことが大切なのである。また、多くの違う文化を持った外国の方と関わることは、地域に住んでいる人にとっても新鮮なことであり、地域にも生き生きとした雰囲気を取り戻すことが出来ると思う。

3つ目は、施設の運営費をクラウドファンディングで集めているということだ。だが、ここでは従来の「不特定多数の人々からインターネットを介して資金を調達する」という方法ではなく、「優秀な人材を求めている企業に、施設にいる難民の方々の未来を見込んで投資してもらう」という方法で資金を調達していく。まず、施設にいる難民の方々には、日常生活などで使う日本語を学んでもらうのと同時に、自分の興味があるものについて研究したり勉強したりしてもらう。例えば、数学が好きならとことん数学について研究する、釣りに興味があるなら漁港に出向いて実際に仕事を見てみる、など自分の興味があることなら何でも良い。そして、ある程度の日本語が話せて日常生活に支障をきたさなくなった時には施設を出て、自分が研究・勉強していたこととマッチしているクラウドファンディング参加企業に就職し、社会人として自立するのだ。こうすれば、企業側は施設に投資する見返りとして自社の方向性やコンセプトなどとマッチしている人材を獲得することができ、業績アップも期待できる。また、難民の方々も、低賃金で不当な扱いを受けている外国人労働者が多い中で、ここでは日本語の学習と同時進行で自分の個性や才能を開花させることができ、企業で正社員として採用してもらい、社会人として生きていくことができる。「未来の人材にクラウドファンディング」、これこそがこの施設の最大の特徴である。

## 4. 日本を第二の故郷に

難民を受け入れることは彼らの命を救うことができる、とても価値のあることだと思う。そして彼らの未来に投資をすることで自国の発展にもつながっていく。大切な故郷を失った人々が「SMILE FACTORY」で多くの日本人と接して笑顔を取り戻し、自分の才能を開花させてほしい。そしていつか、「日本に来てよかった。日本は第二の故郷だ」と思ってくれる日が来ることを心から願っている。

参考文献


- 国連UNHCR協会「難民の出身国・受入国」
  https://www.japanforunhcr.org/refugee-facts/origins
- 認定NPO法人 難民支援協会「難民を知る 日本の難民認定はなぜ少ないか?――制度面の課題から」
  https://www.refugee.or.jp/refugee/japan_recog/
- 株式会社CAMPFIRE「クラウドファンディングとは?」
  https://camp-fire.jp/crowdfunding


[受賞者インタビュー]

**難民について様々な知識を得ることができ、勉強になった。**

**――コンテストに応募した理由、きっかけは?**

夏休みの宿題として配られました。論文を書く上で調べ学習をしている内に、色々な案が浮かんできて、とても楽しかったです。

**――この論文を書き上げるまでに、どのくらいの時間がかかりましたか?**

1カ月程度。

**――この論文を書く上で苦労したことはありますか?**

身近なところに難民の方々がおらず、実情や現在の暮らし、母国での暮らしについて詳しく知ることができなかったことです。インターネットでは実際の心情などを知ることができず、大変でした。

**――この論文を書いたことで良かったことはありますか?**

「難民」について調べると同時に、海外の社会保障制度や支援体制について知れたことです。日本ではできていないことも、海外だとできることが分かり、論文を書く上でも参考になりました。

優秀賞［高校生の部］

# 世界の女性をつなぐ「Soap-Loopプロジェクト」
## ―SRHRの実現へ―

埼玉県立浦和第一女子高等学校　2年
原　まりこ　はら まりこ

［要約］
日本の性教育は諸外国と比べて大きく遅れ、子供の教育を受ける権利が守られていない状況である。性についての不安を話したり、助けを求めたりすることも難しい。この状況を変えるためには、性についての話題をタブーとする社会の意識から変えることが必要だ。そこで、途上国の女性、日本の貧困家庭の女性も巻き込んだ、Soap-Loopプロジェクトを提案する。性について安心して話せるコミュニティを作るのと同時に、世界のSRHRを実現するプロジェクトだ。

「あなたの家では、生理用品を隠さずに置いている？」これは、ある対談で、社会学者の上野千鶴子さんから投げかけられた質問だ。これが、私にある気づきをもたらした。私は以前から、初潮教育を女子だけに行う、といった日本の性教育の遅れに問題を感じていた。しかし、これは学校教育だけにとどまる問題ではないのだ。なぜ、生理用品をトイレットペーパーと同じように、むき出しで置いてはいけないのだろうか。そこに、月経を恥ずべきものとする意識があるのだとしたら、それは初潮教育を男子の目を避けて行うことと同じ意味を持つ。家庭では男性の目から生理用品を隠す一方で、初潮教育を男女一緒に行うことを学校に要求することは矛盾している。私は、性教育を変えるためには、私たち一人ひとりの生活での意識も変えなければいけない、と考えるようになった。

性に関することを隠すべきだとする社会が生んでいるのは、教育の問題だけではない。中学生の時、学校で急に生理痛に襲われた。授業を受け続けることができないほどの痛みだったが、友達に、しかも男子のいる前で、生理痛だと言うことは憚られ、友達の助けを求めることはできなかった。病気があれば、周りの人に話して理解してもらい、協力を得る。そんな当たり前のことが、性に関することになるとできないのだ。月経のことを隠さなくても良い、性のことをもっと気軽に話せる社会だったら、私のように一人で苦しむ人はいなくなるのではないか。こうして私は、誰もが生きやすい社会にするためには、性について気軽に話せる社会であることが必要だ、と考えるようになった。

日本以外の多くの先進国は、中学校までに性交や中絶、避妊についての知識を習う。中には、思春期の前から性教育を始める国もある。対して日本では、中学校の学習指導要領で、性交や中絶については教えず、性感染症を教えるときは「性交」を「性的接触」と言い換えることまで定められている。避妊や避妊具の使い方について教えられることもない。日本と欧米の文化の違いだ、と片付ける人もいるかもしれない。しかし、これは「文化の違い」で済ませられるものではない。なぜなら、日本の性教育の遅れは、私たちの人権が守られていない、という問題だからだ。1994年に提唱された、セクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス／ライツ（SRHR）に、性や生殖のことなど、自分の身体と人生に関する全てのことを、女性自身が選択し決定することは、女性の人権であり、守られなければいけないと明記されている。その後「性の権利宣言」も出され、性の学習は権利とされた。明らかに、日本では生徒の学ぶ権利が守られておらず、改革が必要なのだ。

そして私は、日本でSRHRを実現するためにまず必要なことは、教育や法の変革ではなく、性について話しても良いことが保証された、「場」を設けることだと考える。なぜなら、日本では、教育から変えようとする試みは、社会の反対によって実現を断念してきたからだ。例えば、足立区の中学校で、性交や避妊について考える授業を行ったところ、政治家とつながりを持つ東京都教育委員会が、指導要領から逸脱しているとして指導を入れた。教育が変わることはもちろん必要だ。

しかし、そのためにはある程度の社会の意識の変化が求められる。

性について自由に話せる場を設けることが必要だ、と考えるのは、私の経験からもきている。私は、上野千鶴子さんとの対談を受けて、先生と協力し「カタリバ」をつくった。どんなことでも、自分が思っていることや悩みを語ろう、という集まりだ。そこでの話題は自由だが、いつも話は自然とLGBTQや月経など、性に関することになった。皆、性について憚らずに話せる場を求めていたのだ。また、アンケート調査からも、性について語るのがタブーだと考えている人は少数派であることがわかる。個人の意識は変わっている。次に求められているのは、性について話せる場を作ることだ。

そこで私が提案するのが、「Soap-Loopプロジェクト」だ。これは、今まで取り上げてきた私たち若者だけでなく、世界の途上国の女性、日本の貧困家庭の女性も巻き込んだ活動だ。学生グループが手作りしたオリーブ石けんを、貧困家庭を中心に販売し、その売上金をNGOに寄付する。このプロジェクトの特徴は、教育や法の制度から変えるのではなく、個人の生活から社会を変えることを目指している点、そして、3つの立場の女性が1つのLoopになる点だ。

このプロジェクトは3段階ある。まず、私たち性について話せる場を求める若者が集まり、オリーブ石けんを作る。これが、性のことを話せるコミュニティーとなる。ここで私たちは生活の中で考えたことや不安などを話し、信頼できる情報を得ると同時に、性のことを自由に話す空気を体感することができる。オリーブ石鹸を選んだ理由に、特別な技術や道具が必要なく、高校生でも作りやすいということがある。また、1カ月程度石鹸を寝かせる時間が必要なため、1回限りの参加で終わりにくい。石けんは健康に関するものであり、このプロジェクトのイメージにも一致する。

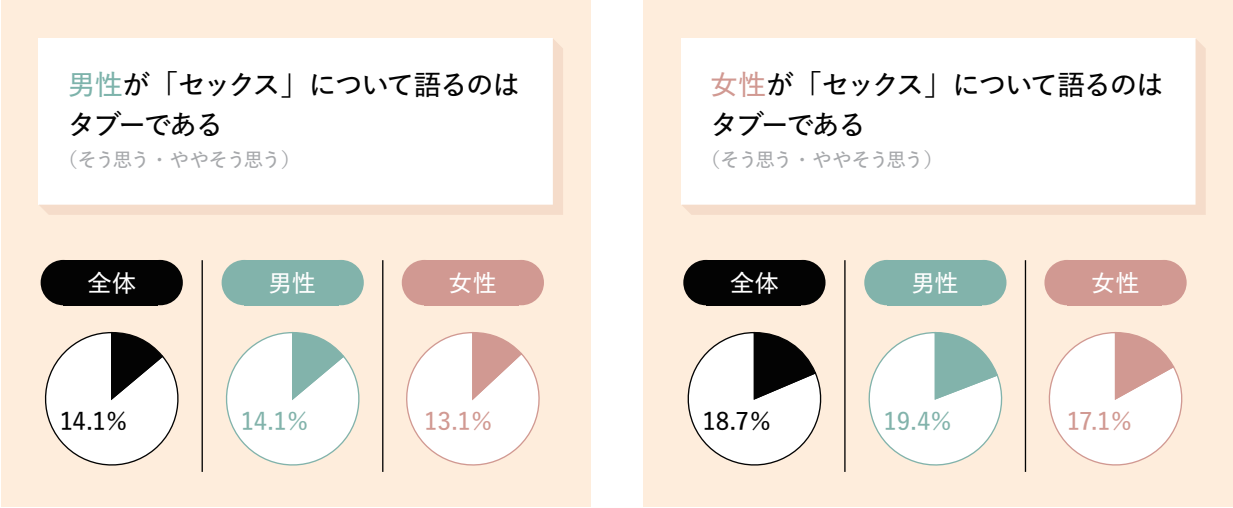
次に、石けんを貧困家庭に安価で販売する。石けんは生活必需品だが、安価な市販の石けんはアレルギー反応が出やすく、支援が必要だと考えた。貧困家庭にとってこれを購入することは「支援する」側にもなることを意味するので、普通の支援物資よりも購入しやすい。

最後に、石けんの売り上げを発展途上国で女性の健康を守る活動をするNGOに寄付をする。発展途上国では、女性の死因の上位を性感染症や出産時の事故が占める。SRHRもはじめは、この状況への問題意識から始まった。SRHRの原点である発展途上国の問題の改善に貢献することは、この活動に大きな意味をもたらしてくれるだろう。

私がここで重視したのは、「語り場」を社会的に認められたものにすることだ。ただ集まるだけでは、日本社会からは排除されてしまうだろう。また、私が作った「カタリバ」では、その内容を外では話さないことをルールにしていたため、認知度を高められなかったという反省もあった。そこで、社会的にすでに認められている途上国の支援と結びつけることで、語り場自体も認められやすく、活動の発信もしやすくなる、と考えた。

まだ課題もある。このプロジェクトは、「世界の女性を結びつける」をコンセプトにした、女性中心のものだ。しかし、性について気軽に話せる社会にするためには、男女関係なく、また、LGBTQの方も排除することなく取り組むことが不可欠だ。どうしたら男性が参加しやすくなるかについて、さらに考える必要がある。しかし、このプロジェクトを通して、性に関して孤独や困難を感じる全ての人がLoopになれば、SRHRの実現は遠くない。性は、人間の人生に直接関わる話題だ。コーヒーを片手に避妊具について話している姿が日本でも普通の光景になって、誰もが生きやすい社会になることを願っている。

図1　日本の若者のSRHR意識調査結果

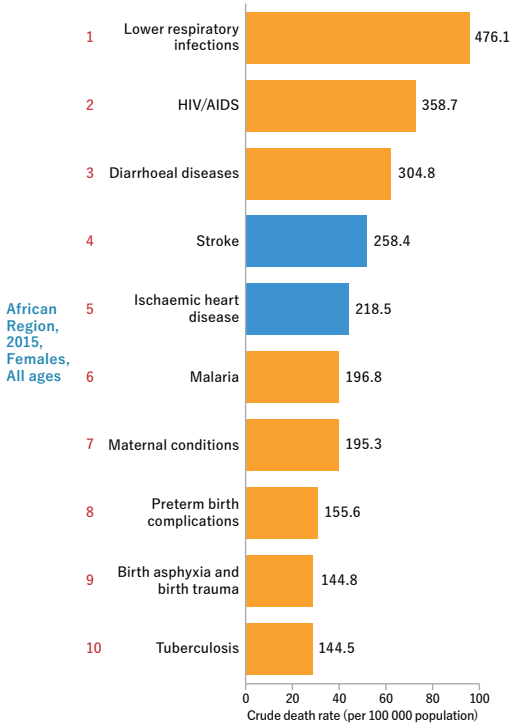



出典）I LADY.（https://ilady.world）掲載
国際協力NGOジョイセフ インターネット調査「性と恋愛2019 ―日本の若者のSRHR 意識調査―」
2019/7/19 ～20 実施、18～29 歳の日本の若者1000人対象

図２　石けんの作成手順

出典）前田京子著『オリーブ石けん、マルセイユ石けんを作る』

図３　アフリカにおける女性の死因




出典）World Health Organization database
https://www.who.int

参考文献


- 上野千鶴子『女の子はどう生きるか―教えて、上野先生！』岩波ジュニア新書、2021年
- 前田京子『オリーブ石けん、マルセイユ石けんを作る』飛鳥新社、2001年
- 橋本紀子、池谷壽夫、田代美江子『教科書にみる世界の性教育』かもがわ出版、2018年
- 国際協力NGOジョイセフ（JOICFP）「SRHRとは」https://www.joicfp.or.jp/jpn/know/about_srhr/
- I LADY. https://ilady.world


［受賞者インタビュー］

## 「自分が本当に伝えたいことは何か」を考え、コンセプトを明確にした。

**――コンテストに応募した理由、きっかけは？**

夏休みを利用して何か小論文を書きたいと思い、インターネットで探しました。「大胆なアイデアを求める」というコンセプトが気に入り、応募しました。

**――この論文を書き上げるまでに、どのくらいの時間がかかりましたか？**

論文自体は２週間くらいです。対談をきっかけに、３カ月ほど前からその分野の勉強はしていました。

**――この論文を書く上で苦労したことはありますか？**

色々な方向に広がってしまうアイデアを決められた字数におさめるのが大変でした。しかし、自分が本当に伝えたいことは何かを考え、コンセプトをはっきりすることができました。

**――この論文を書いたことで良かったことはありますか？**

自分が普段ぼんやり思っていたことを人に伝える機会を持つことができ、嬉しかったです。論文を書く中で、さらに見識を深めることができました。

特別審査委員賞［高校生の部］

# 自然災害から笑顔を守る 復旧・復興の新しいカタチ

広尾学園高等学校　1年
生方 智絵　うぶかた ちえ

［要約］
日本は毎年のように襲う自然災害と向き合い続けていかなければならない。しかし自然災害によって受ける被害は、努力しても避けられないものがある。また、今後の大きなリスクとも闘わなければならない。そこで復旧・復興の新しいカタチを再考したい。私は災害ボランティアアプリ「サポいる」を提案する。「サポいる」を使って復旧・復興支援を普及させ、皆で住み続けられる街をつくり、自然災害から笑顔を守ることができると考える。

## はじめに

今日、日本では自然災害が後を絶たない。今後30年間で南海トラフ地震や首都直下地震が発生する可能性がある中で、世界の都市圏ごとの災害に対する総合的なリスクは、東京・横浜圏が最も高いと評価された（図1）。

そこで、復旧・復興のカタチについて再考してみるのはどうだろう。

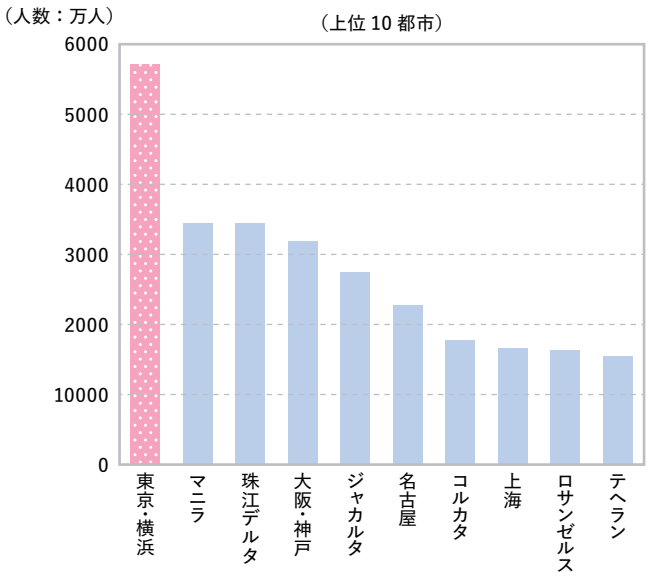
自然災害が私達の日常を大きく変えうる力を持っていることは言うまでもない。もちろん、人的被害や建物の崩壊などを最小限に抑えるための取り組みや研究は、活発に行われている。しかし、どれだけ努力しても避けられない被害をもたらすのが自然災害である。特に、日本は地震・火山活動が活発な環太平洋帯に位置し、気象条件、地勢条件からも豪雨や台風の被害を受けやすく、自然災害と向き合い続けねばならない。自然災害における復旧・復興が今後、より重要となるのは明らかだ。また昨今の新型コロナウイルスの影響により、被災地外から人手を集めることが困難である中で、被災者へのサポートも重要となる。

未来に大きなリスクがある中で、次の世代へと住み続けられる街をつくるためには、円滑な復旧・復興支援をできる人材が不可欠ではないだろうか。そこで私は復旧・復興を民間による災害ボランティアの面から考え、私達にできることを考察したい。

## 復旧・復興の現状課題

復旧・復興と聞くと何が思い浮かぶだろう。私は真っ先に災害ボランティアが思い浮かんだ。活動は災害廃棄物の処理や

図1　洪水・嵐・高潮・地震・津波により影響を受ける可能性がある都市圏

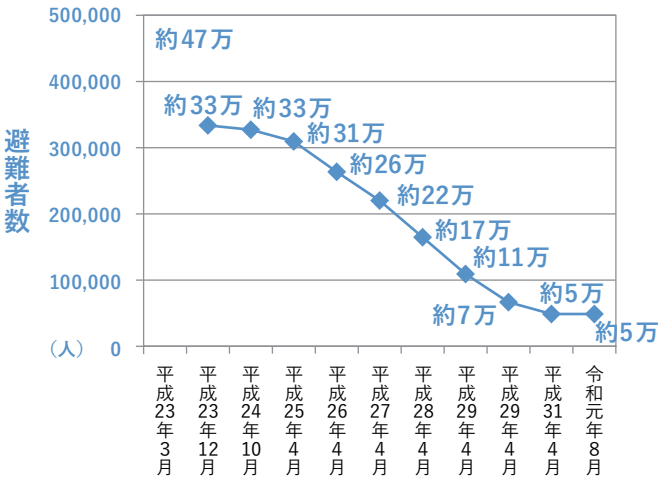



出典）国土交通省「国土交通白書2020」
https://www.mlit.go.jp/hakusyo/mlit/r01/hakusho/r02/html/n1311000.html

家屋の片付け、炊き出し等の直接的な復興支援から、被災者の話し相手やコミュニティづくり、まちづくり活動支援までと幅広い。また、東日本大震災の復興活動は、10年が経つ今日でも懸命に取り組まれていることから学べるように、復興には長い時間が必要となる。東日本大震災の避難者数（図2）は、最大約47万人から令和元年には約5万人に減少し、ボランティアを募集する災害ボランティアセンターも徐々に縮小、閉所している。しかし、まだ被災者のニーズは存在し、できることはあると考える支援者も少なくない。被災地への持続的な支援が必要であり、支援しやすい形をつくることが求められる。

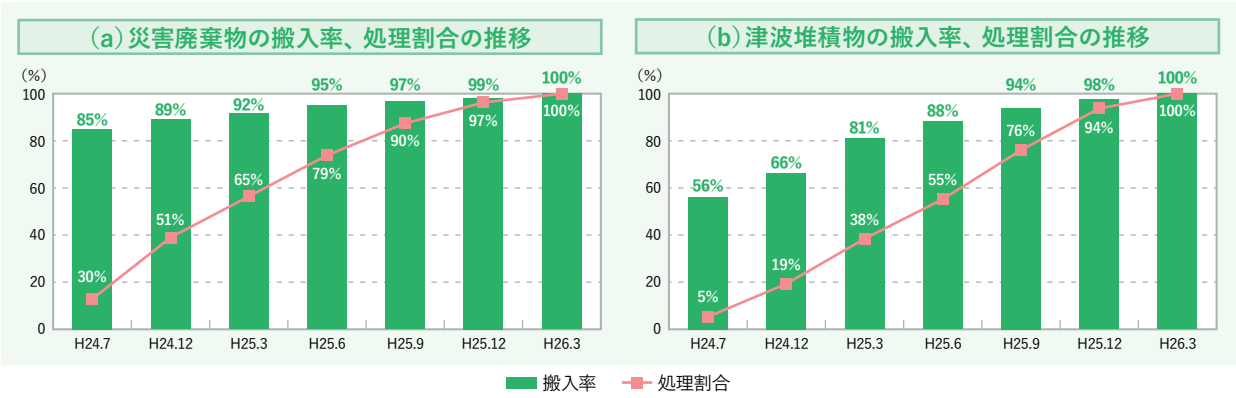
また、住宅や街の復旧は、復興のためにいち早く求められる。直接復興の担い手となり、次世代へと街をつないでいく地域住民にとって、住居や街は最も重要な存在であるはずだ。私は、住宅や街の復旧の最初の段階となる、家屋の片付けや災害廃棄物処理等をする活動に着目した。

図２　東日本大震災の避難者数の推移



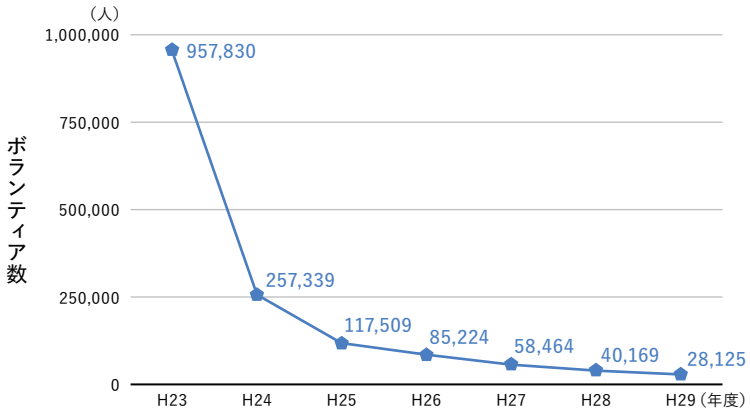

出典）復興庁「東日本大震災からの復興の状況と取組」2019年8月
https://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat7/sub-cat7-2-1/201908_Pamphlet_fukko-jokyo-torikumi.pdf

図３　12道県での災害廃棄物、津波堆積物の搬入率、処理割合の推移




出典）環境省「平成26年版 図で見る環境白書　循環型社会白書／生物多様性白書」
＊12道県は北海道、青森県、岩手県、宮城県、茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、静岡県、長野県
https://www.env.go.jp/policy/hakusyo/zu/h26/html/hj14010201.html

図４　東日本大震災におけるボランティア数の推移




資料）全社協 被災地支援・災害ボランティア情報
「東日本大震災 岩手県・宮城県・福島県のボランティア活動者数」より筆者作成
＊災害ボランティアセンター（VC）を通して活動した災害ボランティアの人数
https://www.saigaivc.com/

まず、東日本大震災においての災害廃棄物及び津波堆積物の処理（図3）とボランティア数の推移（図4）のデータを使って考えたい。災害廃棄物及び津波蓄積物の搬入と処理は、目標としていた平成26年3月までに完了している。一方で、災害ボランティアセンターを通して活動をしたボランティア数の推移は、震災発生時の平成23年には約95万8千人であったが、翌年の平成24年には約25万7千人と大幅に減少していることがわかる。震災が発生した年に比べて被災地のニーズが減り、ボランティア数もそれに合わせて減ったのかもしれない。しかし、処理率を見ると、ボランティア数の減った平成24年はまだ搬入率が処理率に追いついていない状態で、多くのボランティアが必要であったはずだ。私はこの原因を、長期間の復旧・復興活動に対応するほどの人手がなかったためだと考えた。実際に、平成23年にボランティアに参加した総数は約431万7千人と、平成18年の約132万人と比べるとおよそ3倍ではあるが、東日本大震災の規模と比較すると少ないと考えられる。そこで、大きなリスクに備えてボランティアを普及させ、円滑に復旧・復興を行うことができるようにすることが課題となる。

また、災害ボランティアが災害廃棄物の処理に関して困ったことを回答したアンケート調査（表1）では、「どこまで分別すればよいか分からなかった」「集積所と仮置場の違いが分からなかった」「どこに土砂を流せばよいか分からなかった」等が上位を占めた。迅速に復旧を進めるために、効率的かつ正確な災害廃棄物処理ができる仕組みが必要である。

考えた現状課題をまとめると、被災者への持続的な支援、効率的かつ情報漏れのない災害廃棄物処理等の復旧活動、災害ボランティア自体の普及である。

## 未来への提案

そこで私は災害ボランティアアプリ「サポいる」を提案する。これは私が少しでも多くの人がボランティア活動に参加しやすくするために考えたアプリで、「サポいる」には「被災地をサポートし皆をすまいる（笑顔）に」という意味を込めた。アプリ内には「応援しよう」と「復旧しよう」の2つの項目を設ける。

まず「応援しよう」は、近くの地域など範囲を限定的にし、復旧から復興まで長期間の活用を目的とする。内容は、主に被災者の活力を取り戻すための交流機会づくりや被災者への寄り添い、相談相手などの被災者ニーズへの対応である。アプリを起動すると位置情報から自分と近い被災地のニーズが確認でき、参加する場合被災地と直接連絡のできる機能をつける。被災地でのニーズが減少すると災害ボランティアセンター等の団体が縮小、閉所するケースがある中でも、持続的な支援が可能になる。また、近くの地域と範囲を限定させれば、迅速な対応はもちろん、地域同士のコミュニティ強化にもつながり、より活発な復興が実現できると考えた。また、被災地と参加者を直接つなぐことで事前にボランティア内容を把握することができ、経験がなくてもある程度の対応が可能であると考えた。

次に「復旧しよう」は、災害応急対応期から復旧期間中に活用する。内容は家屋の片付けや災害廃棄物等の処理等の直接的な復興支援である。被災地でのボランティア参加者の混乱を防ぎ、円滑に活動を行えるようにすることが目的だ。現在、ボランティアは災害ボランティアセンター等の団体が被災者のニーズを把握し、それに合わせたボランティア数の調整、被災地での事前説明が行われた上で派遣される。この仕組みをアプリで簡略化して行いたい。また、アプリ内に被災地をマップ形式で確認できる機能やGPS機能をつけ、復旧活動の効率化を図る。具体的には、被災地の範囲マップから自分の担当する場所と業務内容が事前に災害ボランティアセンターから指定される。マップ表示にする利点として、被災地の土地勘がない被災地外から集まるボランティアが活動しやすくなることや、危険地域には予め注意マークを出すことで災害ボランティア参加者の安全を守ることができる。また、災害ボランティアセンターはGPS機能によって人の密集度を把握でき、適切な活動指示が出せ、復旧活動全体の効率化へつながり、コロナ禍においても多くのボランティアを必要とする災害緊急対応期に密を避けて分散させることへの対策にもなる。身近に

表1　災害廃棄物の分別・排出等に関して困ったこと

| 順位 | 災害廃棄物の分別・排出等に関して困ったこと | 回答率 |
|---|---|---|
| 1位 | 災害時にどこまで分別すればよいか分からなかった | 83.7% |
| 2位 | 集積所と仮置場の違い（用語の定義）がよく分からなかった | 53.5% |
| 3位 | どこに土砂を出せばよいか分からなかった | 47.5% |

＊令和2年1月 災害ボランティア経験者へのアンケート結果
全国災害ボランティア支援団体ネットワーク（JVOAD）を通して、災害ボランティア個人が回答
（回答者の約70%は災害ボランティア経験5回以上の経験豊富な災害ボランティア）

出典）環境省「地域間協調ワーキンググループの検討」
https://www.env.go.jp/recycle/waste/disaster/earthquake/committee2/r1-02/R1_2_05_chiikiWG.pdf

使用できるアプリを使いボランティアに参加するまでを簡略化することで、災害ボランティア活動が普及すると考えた。

しかし、この仕組みだけでは普及するのに十分ではなく、アプリを実際に活用するにはまだ課題が多い。被災地の範囲が大きければ情報が溢れ、連携がうまく取れない可能性や、そもそもアプリの利用率をどう上げるか、などがある。日本のボランティアは無償性・無給性の原則があるため、ギブアンドテイクの形を取ることができない。しかし、ボランティア活動を通して学ぶことは多く、復旧・復興支援を体験し未来に必要となる「学び」を貰えるという認識になるように、今後も被災地にできる活動について考えていきたい。

参考文献


- 国土交通省「国土交通白書2020」第1部 社会と暮らしのデザイン改革～国土交通省20年目の挑戦～ 第3章今後の国土交通行政が向き合うべき課題と方向性 1.将来予測に基づく課題
https://www.mlit.go.jp/hakusyo/mlit/r01/hakusho/r02/html/n1311000.html
- 国土交通省「国土交通白書2011」第1章 未曾有の大震災と国土交通省の総力対応 第2節 国土交通省の総力対応　5.被災地の復興に向けた課題
https://www.mlit.go.jp/hakusyo/mlit/h22/hakusho/h23/html/k1125000.html
- 独立行政法人 国立病院機構「東日本大震災におけるNHOの支援活動の記録」東日本大震災の概要及び被害発生状況
https://nho.hosp.go.jp/files/000050171.pdf
- 復興庁「東日本大震災からの復興の状況と取組」2019年8月
https://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat7/sub-cat7-2-1/201908_Pamphlet_fukko-jokyo-torikumi.pdf
- 環境省「平成26年版 図で見る環境白書 循環型社会白書／生物多様性白書」第2章 被災地の回復と未来への取組
https://www.env.go.jp/policy/hakusyo/zu/h26/html/hj14010201.html
- 環境省 環境再生・資源循環局 災害廃棄物対策室「地域間協調ワーキンググループの検討」令和2年3月3日
https://www.env.go.jp/recycle/waste/disaster/earthquake/committee2/r1-02/R1_2_05_chiikiWG.pdf
- 環境省 災害廃棄物対策指針 技術資料・参考資料「技術資料12　被災地でのボランティア参加と受入れ」
http://kouikishori.env.go.jp/guidance/download/pdf/043_gi12.pdf
- 総務省 報道資料「統計トピックスNo.67 災害ボランティア活動の状況」平成25年1月14日
https://www.stat.go.jp/data/topics/pdf/topics67.pdf
- 内閣府 防災情報のページ　広報誌『ぼうさい』平成22年度1月号（第61号）
http://www.bousai.go.jp/kohou/kouhoubousai/h22/01/special_01.html
- 全社協 被災地支援・災害ボランティア情報「東日本大震災 岩手県・宮城県・福島県のボランティア活動者数」
https://www.saigaivc.com/
- 産経新聞「東日本大震災6年 年々減少するボランティア『私たちにやれることはある』群馬」2017年3月9日
https://www.sankei.com/article/20170309-MKHVLYC5LVJILBEPGG4GSMJT5I/
- 東京ボランティア市民活動センター「ボラ市民ウエブ」「ボランティア・NPOを知る――ボランティア活動、4つの原則」
https://www.tvac.or.jp/shiru/hajime/gensoku.html


［受賞者インタビュー］

## 論文を書く過程で新たな知識を得ることができた。

**――コンテストに応募した理由、きっかけは？**
学校の夏期課題です。

**――この論文を書き上げるまでに、どのくらいの時間がかかりましたか？**
２週間程度かかりました。

**――この論文を書く上で苦労したことはありますか？**
ボランティアの現状課題について考える時に、参考となる資料を探してそれを自分の言葉でまとめることや、規定の字数内に収めることです。

**――この論文を書いたことで良かったことはありますか？**
自分のアイデアをどうやったら人に伝わりやすいかを考えることや、資料集めの際に今まで知らなかった問題について知ることができたことです。

特別審査委員賞［高校生の部］

# 人間、う〇ちくれるってよ　by 分解者

岐阜県立岐阜高等学校　2年

深尾 優子　ふかお ゆうこ

［要約］

この論文では、屋外排泄による問題点を取り上げ、解説する。そして、現在の各種団体の取り組みと課題点を紹介し、なかなか現地の人にトイレが使用されないという実態を明らかにする。私は、その代替案として、微生物などの分解者を糞尿処理に利用したトイレを提案する。このトイレは、設置する地域の生態系を壊さず、簡単に設置でき、また水供給システムも電力も不要であるため、場所を問わず快適に使用できると主張する。

ここでは、開発途上国におけるトイレのない現状と問題点をあげ、その解決策のひとつとして、課題地域の生態系に根差したトイレの開発を提案する。

6億7,300万人の人がトイレのない生活を送っている、という事実がある。ここでいう「トイレのない」というのは、完全な屋外で用を足す屋外排泄を意味する。そしてその屋外排泄により、衛生上の問題、人権問題、環境汚染という3つの問題が生じている。

まず、衛生上の問題について述べる。屋外排泄は、屋内排泄と比較して、排泄物の雑菌が繁殖しやすく、国際連合児童基金（UNICEF）によれば、屋外排泄を原因とする下痢性疾患により、1日に全世界で約800人の子どもが亡くなっている。子どもは免疫システムが大人よりも弱く、また屋外排泄を行う地域は医療システムが脆弱なため、いかに病気を未然に防ぐかが肝心だ。トイレの種類は、水洗トイレと汲み取りトイレがあり、どちらも排泄物が人体に触れにくいよう工夫されている。よって、開発途上国にトイレを設置することで、雑菌由来の病気に罹る人が減少すると考える。

次に、人権問題についてであるが、排泄中に野生動物に襲われる、女性であればレイプ被害にあう、といった被害が報告されている。このような被害を避けるため、排泄を限界まで我慢する人が多く、健康被害の原因となっている。また、自宅から屋外排泄場まで行く間に心無い言葉をかけられる、排泄中の様子が外から見られる、といった事例が存在する。これは、性別を問わず、またLGBTQ(注1)の人々にとっても大きなストレスであろうと思われる。

最後に、屋外排泄は環境汚染と密接に関係している。屋外排泄は、バクテリアの増殖を促進し、土壌や川、海などの自然環境を汚染し、そこで育つ農作物、畜産物、水産物に直接影響を及ぼす。これらの汚染された食物は、屋外排泄を行う地域の人々の健康被害の原因になっている。

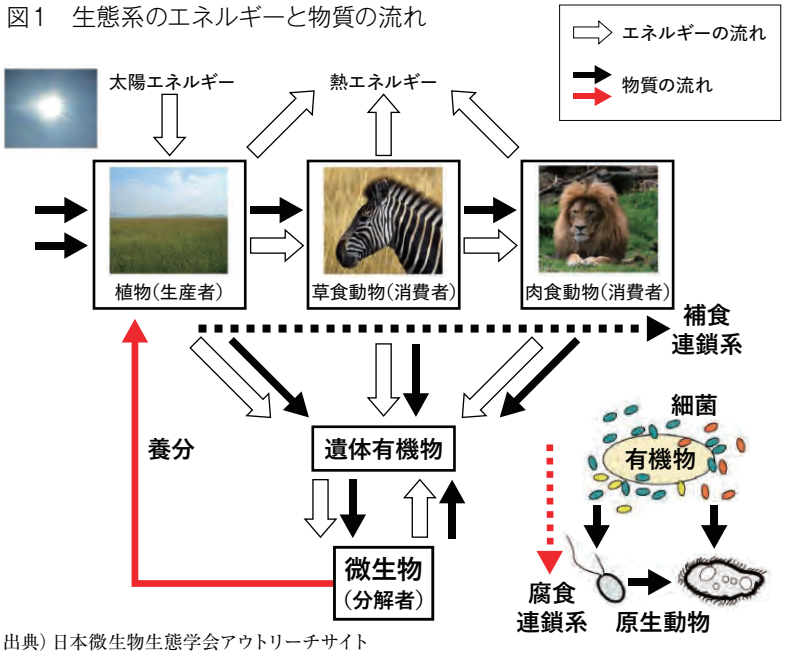
以上の問題を重く見て、WHO（世界保健機関）は2015年から、屋外排泄の現状改善を“Clean Water and Sanitation”として、SDGs(注2)の課題のひとつに掲げている。加えて、世界中の有志の企業や人権団体は、アフリカやアジアなどの屋外排泄が行われている地域を中心にトイレを設置する活動を行っている。しかし、トイレが設置されても、使用されていない実態が多いことが分かった。その原因は、掃除が行き届かないトイレが放つ悪臭や汚れにより、地域の人々がトイレ利用を敬遠することにある。この実態は、トイレが水供給システムの乏しい地域に設置された場合に多くみられる。このような現状を踏まえると、人に使用してもらうには、水供給システムに頼ることなくトイレを清潔に保つことが課題となる。

そこで、私は、地域の生態系に沿った分解者を利用するトイレを提案する。名付けて、“Decomposer Toilet”である。Decomposerは、日本語で分解者(注3)を指す。分解者は主に地中や地中付近で動物の糞尿や遺骸を食べ、その中に含まれる有機物を無機物に変えることで環境を維持している（図1）。屋外排泄が行われている地域は、水道設備など

のインフラが未発達な開発途上地域が多い。したがって、水供給に頼らない糞尿処理を前提とした糞尿処理が求められる。このような条件に合う処理として、分解者の働きのみで糞尿処理ができれば一番効率が良いと考える。糞尿処理に使用する分解者は、土地の生態系のかく乱を防ぐために可能な限り現地で調達する。砂漠などの分解者すら生息しないような厳しい環境では、分解者と同じ役割を果たす、人工的に開発された微生物（以下、人工分解者）を糞尿処理に用いる。

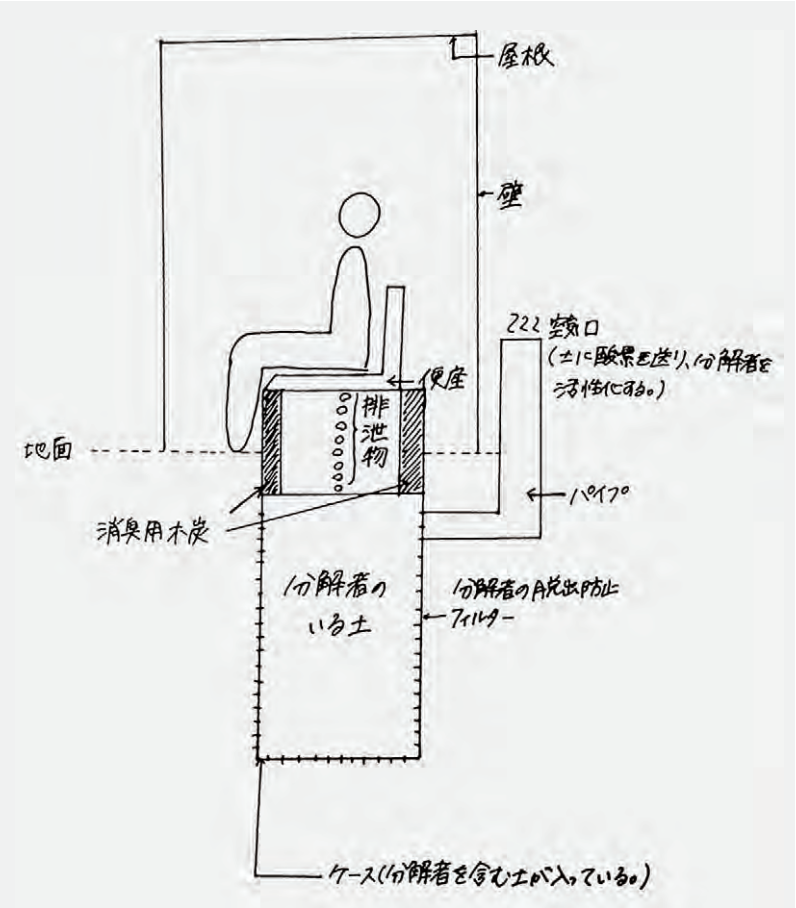
Decomposer Toiletが持続可能な世界を目指すという、SDGsの目標と合致するためには、分解者はその土地の生物でありつつも、増えすぎて生態系が乱れてはならない。このため、使用する仕組みは次のようになっている（図2）。まず、用意するものは、排泄物と分解者を入れるケース、ケースに空気（酸素）を送るパイプ、木炭、座りやすい穴の開いた便座である。次に作り方である。排泄場所を決め、ケースを入れるための穴を掘っておく。ケース上部側面に穴を開け、パイプをつなげる。ケースに土と分解者を入れ、ケース上部側面に木炭など消臭剤を貼っておく。座って排泄できるよう、ケースの上面に便座を置く。そしてトイレの周りにパーテンション等を建てる。以上である。人の排泄物は、排泄すると同時にケースに落ち、そこで分解者によって分解されていく。ケースに木炭を貼るこ

図1　生態系のエネルギーと物質の流れ




出典）日本微生物生態学会アウトリーチサイト
「びせいぶつってなに？　3. 微生物は地球のそうじやさん」
http://www.microbial-ecology.jp/or/microbial3.html

図2　Decomposer Toilet




筆者作成

とで悪臭問題は解決でき、また、座る面を便座にすることで掃除しやすく、衛生問題も解決できる。パイプを通してケースに酸素を送ることで、分解者を活性化することも可能だ。

このトイレの優れている点は、水供給システムが乏しい地域でも使えること、誰でも身の回りの材料で簡単に作ることができること、故障したり老朽化しても簡単に交換できることにある。電気も不要であり、火も使わない。誰でもどこでも安心して排泄ができる世の中の実現に貢献できる斬新かつサステナブルなトイレである。

一方で、このトイレには課題も残っている。それは先述したとおり、もともと分解者が生息しないような地域にこのトイレを設置するためには、新たに人工分解者を開発する必要があるため、今すぐに地球のどこででもこのトイレが使用できるわけではないことと、さらにネックなのは、人工分解者の開発が非常に困難であることだ。人工分解者は排泄物の処理能力は当然として、それ以上にトイレ設置地域の生態系のかく乱の要因にならないことが求められる。慎重な開発が求められる以上、現実的に考えると、このトイレが世界中のどこででも使えるようになるまでには相当の時間が必要なのだ。このことは直視すべき課題であり、検討の余地がある。

先に紹介したSDGsの課題のひとつである“Clean Water and Sanitation”には、実は続きがある。国連はこの目標を達成するためのいくつかの小さなタスクを設けており、その一つは「2030年までに屋外排泄をなくす」だ。あと8年半以内に、強いストレスや恐怖を感じながら屋外で排泄をする人が減るように、そして不衛生な屋外排泄による病気で亡くなる子どもが減るように、私たち人類は対応を迫られている。私はこれからも、世界中の人が屋内で排泄できる社会の実現のために、自分にできることを考えていきたいと思う。私の小さな提案が社会を変えるきっかけの一部になることを、願うばかりである。

文中注

注1) LGBTQは、女性同性愛者を意味するレズビアン（Lesbian）、男性同性愛者を意味するゲイ（Gay）、両性愛者を意味するバイセクシュアル（Bisexual）、自己の性自認が身体の性別と一致しないトランスジェンダー（Transgender）、自己の性自認を決めかねているという意識を持っているという意味のクエスチョニング（Questioning）の頭文字で合成された用語である。

注2) SDGsは、持続可能な社会を目指し、国連が定めた目標。17の目標と169の達成目標、232の指標から成る。

注3) 分解者とは、「生態系を構成する生物のうち、死体や排泄物などの有機物を無機物に分解する生物。通常は菌類や細菌類を指す」（広辞苑より引用）とあるが、ここでは虫や一部の環形動物も含めた、この機能を果たすものすべてを分解者と考える。

参考文献


- 独立行政法人国際協力機構（JICA）地球環境部 水資源グループ 水資源第二チーム課長 望戸昌観「水分野の途上国における課題」2017年10月12日 https://www.jica.go.jp/priv_partner/activities/sdgsbvs/kaihatsu/ku57pq00002azxod-att/171012_water.pdf
- 公益社団法人 日本シェアリングネイチャー協会『シェアリングネイチャーライフ』2017年6月発行　VOL.17「うんこはごちそう…「循環」と「分解者」を知る」 https://www.naturegame.or.jp/field-note/lifestyle/004457.html
- 塚本珪一『日本列島フン虫記』青土社、2003年
- 塚本珪一『フンころがしの生物多様性 自然学の風景』青土社、2010年
- 『ニューステージ生物図表』浜島書店、2020年
- 日本微生物生態学会アウトリーチサイト「びせいぶつってなに？」日本微生物生態学会教育研究部会 http://www.microbial-ecology.jp/or/index.html
- Clean Water and Sanitation-United Nations Sustainable Development GOALS https://www.un.org/en/
- Unicef for every child「Universal Access to Water, Sanitation and Hygiene――An investment opportunity for the private and public sectors」 https://www.unicef.org/documents/universal-access-water-sanitation-and-hygiene


［受賞者インタビュー］

## 自分の意見を分かりやすく、誤解を生まないように書く力を養うことができた。

**――コンテストに応募した理由、きっかけは？**

学校の夏季休業の課題で、小論文が課せられたからです。数多くのコンテストでNRIを選んだのは、応募方法が分かりやすかったからです。

**――この論文を書き上げるまでに、どのくらいの時間がかかりましたか？**

２週間、構想を含めて１カ月。

**――この論文を書く上で苦労したことはありますか？**

まず、考えをまとめる点が大変でした。また、順序立てて論理的に説明する点も苦労したので、家族や友達にも何度も読んでもらいました。

**――この論文を書いたことで良かったことはありますか？**

論文を書くこと自体が初めてでしたが、自分の意見を分かりやすく、誤解を生まないように書く力を養えた気がします。また、長い時間をかけてじっくり考えることも、いい経験になりました。

NRI学生小論文コンテスト2021

# 論文審査会

# 審査委員が集って議論を交わし、最終審査会に進む上位入賞論文を選びました

2021年11月18日、NRI東京本社の大会議室で論文審査会を実施しました。昨年度の論文審査会は新型コロナウイルス感染対策のためにオンライン開催でしたが、今回は感染の波の合間であったことから、感染対策を講じた上でのリアル開催がかないました。審査委員7人が熱い議論を交わし、上位入賞論文9作品（大学生の部4、高校生の部5）を選定しました。各賞については、2021年12月20日の最終審査会におけるプレゼンテーション審査を経て、決定します。

［論文審査会に至る経緯］

- 一次審査：NRIグループ社員延べ104名が論文を評価し、評価の高かった18論文（大学生の部8、高校生の部10）が二次審査へ。
- 二次審査：審査委員長でNRI研究理事の桑津浩太郎をはじめとする社内審査委員に加え、特別審査委員の池上彰さん、最相葉月さんを含む7人の審査委員それぞれが18論文を評価・採点。

［論文審査会　審査委員］

**審査委員長**

桑津 浩太郎　NRI研究理事

**特別審査委員**

池上 彰　ジャーナリスト、名城大学教授、東京工業大学特命教授

最相 葉月　ノンフィクションライター

**審査委員**

齊藤 義明　NRI未来創発センター 2030年研究室長

八代 夕紀子　NRIプラットフォームサービス開発部　グループマネージャー

小松 康弘　NRIコーポレートコミュニケーション部長

本田 健司　NRIサステナビリティ推進室長

# 論文審査会レポート

2021年11月18日に、NRI東京本社の大会議室にて論文審査会が行われました。
集まった7人の審査委員による議論の一部をレポートします。
なお、性別・学校名・学年などの応募者情報は全て伏せられたうえで、議論は行われています。

# 大学生の部

## 真摯に、ていねいに、「安全安心な社会」を提示

［論文審査会　対象論文］　＊文中での呼称

・**ひよっこドクターのほけんしつ ～Student Doctorたちによる地域住民の健康相談の場～**　＊「ひよっこドクター」
地域医療におけるかかりつけ医の不在、医学生が全人的に患者を診る視点の欠如、独居や老々介護による高齢者の孤独などの課題意識から、「誰でも気軽に医療を受けられ、体調のことを相談できる」安心安全な社会を目指し、全国共用試験に合格したStudent Doctorの資格を持つ医学生による「ひよっこドクターのほけんしつ」を提案。

・**新しい教育の形を世界へ**　＊「International Teacher」
南アジアの教員志望の学生が、オンラインで日本の小中高生に自国の文化、歴史、宗教、政治などについて英語で授業を行い、その経験を活かして自国の学校で教師になる「International Teacher制度」を提案。

・**セルフサービスフードバンク ～新しい食品リサイクルのかたち～**　＊「セルフサービスフードバンク」
まだ食べられるのに廃棄される食品への「もったいない」という思いを出発点に、廃棄されてしまう食品をリサイクルして食べ物に困っている人たちを支援する「セルフサービスフードバンク」を提案。

・**留学生から見る老舗旅館に対する改善策の提案及び観光まちづくり**　＊「老舗旅館」
老舗旅館でのインターンシップの経験を通して感じた、繁忙期と閑散期の差、運営側の労働生産性の低さという課題に対して、紀南体験巡りツアーと従業員の労働生産性を向上させる仕組みづくりを提案。

### 1作品が群を抜いて高評価を集め、留学生の作品も高評価に

**桑津**――最も評価が高かった作品は「ひよっこドクター」で、群を抜いていますね。審査委員のみなさん、それぞれの作品へのご感想・ご意見をお願いします。

審査委員長　桑津 浩太郎

#### 「ひよっこドクター」
――医師に必要な複眼的レンズを身につけるためのしくみが地域医療を支える

**池上**――医師不足を「全国共用試験」に合格した医学生を使ってカバーし、なおかつ医学生の視野を広げるという一石二鳥アイデアには感心しました。大学で医学部の学生に教える時、私は末期がんの患者への告知の実演などをしてもらっているのですが、医

# 大学生の部

学生には看取りや死についての教育が足りていません。医学生が忙しいことは承知していますが、高齢者や地域医療の実態を学ぶことはとても大事であると思い、高く評価しました。

**最相**――医師に必要な複眼的レンズを身につけるための試みが地域を支え、ひいては医療全体の底上げにもつながる、素晴らしい提案だと思いました。この筆者は新潟で住民と交流した中で地域医療の問題点を実感して、新潟での試みを意図していますが、全国的なスタンダードとなる可能性も感じられます。Student Doctor制度は医療行為の枠組みが明確ではなく、患者の同意も得られにくいようですが、病院やクリニックではなく「ほけんしつ」という位置付けなら患者の理解も得やすいのではないでしょうか。また、地域の高齢化にあって、おそらく彼らは人の死を目にすると思いますが、若い医学生のうちに死へのプロセスを経験するということは、その後、医師として活躍するにおいて非常に重要な土台となるだろうと思いました。

**桑津**――今後も長期に続く地域医療という問題に対して、できること、するべきことをわかりやすく表現しています。今回の作品の中では、バランスといい、内容といい、リアリティといい、質的に頭1つ抜けていた印象です。

**齊藤**――病気や健康について相談したい地域の高齢者と、人間や社会に対する理解を深める必要のある医学生とを組み合わせた「ひよっこドクターのほけんしつ」というしくみに、安心社会へのビジョンと一定の現実的実現性を感じ、検討に値する提案だと評価しました。一方で、「医学部4～6年生は国家試験を控えて時間的余裕がないのではないか」「高齢者の日常的な相談を受けていて、医者として成長できるのだろうか」などの疑問も残りました。

**小松**――自らが主体となって臨む提案で、「倍率」という言葉を使って目線を表現し、自分の周りの事象に終始せずに論理を展開できています。文体も簡潔で、医療に詳しくない人が読んでも理解できる構成、内容、表現になっています。Student Doctorに負荷がかかる仕組みであることに対して実効性の観点で不安は残りましたが、彼らの資質や信条に鑑みるに、何ら支障はないかもしれないと思います。

**八代**――医学生が少しでも多くの臨床経験を積むことで日本の医療レベルが進展し、高齢社会が抱える問題が解消に向かうのであれば、素晴らしい仕組みだと思いました。医師の卵は多忙だと思いますが、その当事者からのアイデアで、自分が高齢者になった時は若い先生にお世話になりたいと思いました。今後さらに5Gやデジタル活用が進めば、オンライン診療の精度も上がって、実現に向けたハードルはもっと低くなると思いました。

## 「International Teacher」
### ――南アジアと日本の双方にメリットがある、多様性を育む試み

**池上**――インターナショナルティーチャー制度は、ネットを使ったリモート授業が普通に行われるようになったコロナ禍だからこそと言うべきか、国境を越えて双方にメリットがある試みで、評価できると思います。日本の中学生・高校生が英語の授業が理解できるかなど、いろいろな課題は考えられますが、南アジアの学生が実際にオンラインで授

特別審査委員　池上 彰さん

特別審査委員　最相 葉月さん

**「ひよっこドクター」社内審査委員のコメント**

- 問題設定やその解決法に発想の豊かさがあり、読みながら「実際に実現されるといいな」と一番感じた小論文だった。
- 実体験を基にした提案だったこともあり、解決策が非常に具体的だった。サステナブル社会の実現という観点でも、医療から社会全体の問題を解決するものであり、医療にとどまらない内容だった。
- かかりつけ医がない／医者も少ないといった地方の外部課題、人と接する業種でありながら全人的な視点が欠如しがちという医者の卵の内部課題の解決案として、まさに安心安全なこれからの社会の形を示すいい提案だと思う。

審査委員　齊藤 義明

# 大学生の部

業をして、日本の子どもたちが授業を受けることによって、民族や宗教の違いなどの多様性を学べるのはとても大事なことなのではないかと思いました。

**小松**――海外とつないだオンライン授業というのは、似たような取り組みを見聞きした感もありますが、対象者や地域を具体化している点が良かったと思います。また、筆者はかなり内容を具体的にイメージして論文にまとめたのではないかと思われたことも、評価につながりました。コロナ禍でオンラインでのコミュニケーションが当たり前にできるようになったことは、この取組みの実現性を担保するとも思います。ただ、この取組みの運営費を南アジア諸国の国費に委ねるという点については、サステナブルの観点でもう少し検討できたのではないかと思います。

## 「セルフサービスフードバンク」
## ――フードロスの現場をよく知る中から生まれた具体的アイデア

**最相**――外国人も多いコンビニ店員さんからの提案に、感動的な思いを持ちました。しかもアメリカの本格的なフードバンクの体験もしていて、現場をよく知る中で、まだ食べられるのに廃棄される食品に対して「もったいない」という思いがあり、そういう食品を食べるのに苦労している人たちの手元に何としても届けたいという思いから生まれた提案だと思います。コンビニの横など、人の目の届くところに設置して安全性に配慮すれば実現できそうです。食品を寄付したい人はたくさんいるのに、どこに持って行ったらいいのかわからなかったことを考えると、こういうフードバンクが近くにあれば、いつでも誰でも支援者になれると思いました。

**本田**――国内のフードロスは大きな問題で、特にコンビニでのフードロス問題は注目されています。実際にセルフサービスフードバンクが現実的かどうかは疑問が残りますが、国内でフードバンクの普及を妨げている理由を分析して対策を考えているところを評価したいと思いました。

## 「老舗旅館」
## ――インターンシップの経験から生まれた、地方の優良な観光資源の活性化策

**最相**――地方の優良な観光資源をいかに活性化させるかという提案で、アンケート調査や具体的な旅のスケジュールなどアイデアも満載で、興味深く読みました。テーマ設定や課題解決への流れも非常に論理的で明瞭でわかりやすく、論文として読みやすいと思います。コロナ禍で観光業界が大きなダメージを受けている中で、留学生からこのようなアイデアが出てきたことにも意味があると思いました。

**桑津**――論文のクオリティが、これまでの留学生の作品に比較して一段高かったと思います。老舗旅館とか体験型ツアーといった日本ならではのものにうまく着目していて、視点や提案に他を圧倒するほどの独自性はありませんが、地に足のついた活動と分析力で、高く評価できると思いました。

**八代**――まず、留学生とは思えない日本語の文章力かつ完成度に、すごいと感心しました。顧客の年齢層の分布から30代子連れ家族客と70代友人旅行客に絞って対策を考えた点や、課題分析のくだりで旅館の運営に対して「従業員の労働生産性が低い」と明

### 「International Teacher」社内審査委員のコメント

- 教育を題材に、日本における問題と南アジアにおける問題の双方を解決し、その結果多様性を育むという解決策は非常にユニークで、具体的であった。「こういうことが実現できたらいいな」という希望を抱かせる内容で、継続してこの問題に取り組むことは非常に有益であると感じた。
- 教育実習のインターナショナル版としての枠組みは面白いと思う。日本の英語教育および現地の就業機会の醸成の観点で南アジアに絞った提案となっていたが、発展途上国の英語圏として拡大も期待できる提案だと思う。具体的な規模（人数）などの想定があると、より現実感が出てくると思う。

### 「セルフサービスフードバンク」社内審査委員のコメント

- 食料ロスについて考察ができており、助け合いが前提とされた案が展開されている。自分の実体験に基づいている部分が良かった。
- 自身の体験に基づきつつ、大胆な発想で解決の切り口を検討しており、良かったと思う。

審査委員　小松 康弘

### 「老舗旅館」社内審査委員のコメント

- 地域社会の発展という観点で、独自の調査に基づく提案であり、実現させてほしいと感じた。

記した上で、「従業員を減らすよりも生産性を高めたほうが効果的だ」と主張する点など、ロジカルな展開で非常に読みやすく、説得力もあります。

審査委員　八代 夕紀子

## 留学生の２作品を含め、４作品が最終審査へ

**桑津**――最終審査会に進める論文をどうするかについて議論したいと思います。「ひよっこドクター」については、群を抜いて高い評価を集めているので、最終審査に進めることに異論はないかと思いますが、いかがでしょうか。

**一同**――賛成です。

**桑津**――最相さんと池上さん、お二人とも比較的高く評価されているのは、「セルフサービスフードバンク」ですね。

審査委員　本田 健司

**最相**――池上さんがよろしければ、「セルフサービスフードバンク」は最終審査に進めてはいかがでしょうか。

**池上**――そうですね。リスク対策が課題だと思っていたのですが、コンビニの横において監視カメラを設置するなどの対策をすればリスク問題は解決すると思います。

**桑津**――では、「セルフサービスフードバンク」も最終審査に進めることとします。「老舗旅館」についても、留学生とは思えないほどの日本語の文章力と完成度で、「ひよっこドクター」に次いで高い評価を集めているので、同様に最終審査に進めても良いかと思いますが、いかがでしょうか。池上さんは、この作品はどのように思われましたか。

**池上**――経営の傾いた老舗旅館を次々に買収して経営を立て直している会社の手法と似ていると感じたのですが、その一方で、留学生が自分たちのインターンシップの実体験から編み出したアイデアであれば素晴らしいなと思いますので、最終審査に進めることに異論はありません。

**最相**――いつも評価の際の点数のつけ方に迷うのですが、総合点における１点、２点の差というのは、あまり大きな意味をなさないと思うのです。「International Teacher」は比較的高評価の方が多かったので、これも最終審査対象論文にしても良いのではないでしょうか。

**齊藤**――私は、日本の子どもたちに南アジアの学生がオンライン授業をすると、先生になる資質がなぜ身に付くのか、日本の子どもたちが宗教や文化、歴史について英語で聞いて理解できるのかなど、実現性の面で引っかかりました。

**小松**――われわれの世代がこういうアイデアを聞くと「受け入れられない」と考えるものですが、子どもは思っている以上に順応性があって、すんなり受け入れるかもしれません。

**最相**――教科書に書いてあることではなくて、南アジアの人々がどういうことに苦労しているかとか、その国がどういう問題を抱えているかといったことを英語で聞くのは、とても良い教育になると思います。

# 大学生の部

**齊藤**――そうですね。最相さんがおっしゃるように、確かに「International Teacher」は池上さん、最相さんをはじめ、比較的高い評価に固まっています。実現性の面は、授業のやり方を工夫して、言葉だけに頼らずに映像も使えば解決するかもしれません。

**桑津**――「International Teacher」も最終審査に進める方向で、みなさん納得していただいたという理解でよろしいでしょうか。

**一同**――賛成。

**桑津**――それでは、大学生の部の最終審査対象作品は、「ひよっこドクター」「International Teacher」「セルフサービスフードバンク」「老舗旅館」の4作品といたします。各賞は、12月20日に行われる最終審査会でのプレゼンテーションで決定します。

# 高校生の部

## やさしい心で、幅広い視点から想像力豊かに、グローバルな社会課題を提示

［論文審査会　対象論文］　＊文中での呼称

・**～バングラデシュから始まるエシカルファッションの時代～ 縫製工房Clothes Mom**　＊「エシカルな縫製工場」

縫製工場の劣悪な労働環境が明らかとなったバングラデシュのビル崩壊事故を受けて、衣服の生産に関わる人々が誰も犠牲にならない未来を目指して、バングラデシュの女性たちによるエシカルな縫製工房「Clothes Mom」の設立を提案。

・**日本を第二の故郷に　～未来の人材にクラウドファンディング～**　＊「SMILE FACTORY」

大切な故郷を捨てて難民となる人が世界に８千万人以上いるという現状に対して、日本としてできることはないかを考え、難民を未来の人材として見込んで企業から投資してもらうことで成り立つ難民受け入れ施設「SMILE FACTORY」の設立を提案。

・**世界の女性をつなぐ「Soap-Loopプロジェクト」―SRHRの実現へ―**　＊「Soap-Loop」

諸外国から後れをとる日本の性教育の現状を踏まえ、誰もが生きやすい社会にするためには性の話題をタブーとする社会の意識を変えることが必要だと主張。若者が集まって性について自由に話せる場を作り、そこで作った石けんを貧困家庭に安価で販売し、売り上げを途上国の女性の健康を守るNGOに寄付する「Soap-Loopプロジェクト」を提案。

・**人間、う○ちくれるってよ　by分解者**　＊「分解者を利用したトイレ」

世界で６億7300万人がトイレのない生活を送っている「屋外排泄」の問題に対して、分解者を糞尿処理に利用した、水も電力も不要な「Decomposer Toilet」を提案。
（注：分解者とは生態学用語で、生物の排出物や死がいなどの有機物を分解する細菌、菌類などをさす）

・**自然災害から笑顔を守る復旧・復興の新しいカタチ**　＊「サポいる」

自然災害が後を絶たない日本において、次の世代へと住み続けられる街をつくるためには、被災地の円滑で持続的な復旧・復興支援が不可欠だという思いから、災害ボランティア支援アプリ「サポいる」（被災地をサポートし、皆をすまいるに）を提案。

### 上位２作品のほか、評価の拮抗する作品がそろう

**桑津**――評価の高かった作品は、「エシカルな縫製工場」「SMILE FACTORY」で、次いで「Soap-Loop」と「分解者を利用したトイレ」、続いて「サポいる」となっています。それぞれご意見をお願いします。

審査委員長　桑津 浩太郎

# 高校生の部

## 「エシカルな縫製工場」
### ──事業の方向性を自らデザインしようとするパワー

**最相**──グローバル化のしわ寄せがいった途上国の女性たちの現状を踏まえた企業は他にもありますが、この提案の豊かさというのは、働く人たちが単にその不公平な労働から救われるということだけではなくて、保育園を併設したり、リモートで働けるような仕組みを作ったり、エネルギー確保まで目配りしているところだと思います。何とかしてエシカルファッションを世界標準にしたいという志も強く感じられました。SDGs時代にあって、エシカルファッションのブランド価値はますます向上していくと思いますし、この筆者はきっと起業するのではないかというパワーを感じ、評価しました。

**本田**──グローバルなテーマである現代奴隷という問題を取り上げ、具体的な解決策を提示している点を評価しました。バングラデシュの事情もよく調べており、具体策にはリアリティが感じられました。遊具で発電させるというアイデアもユニークです。

**齊藤**──バングラデシュで展開しようとするエシカルトレードの事業内容はやや一般的ですが、自ら起業家のごとく主体的に会社や事業の方向性をデザインしようとする攻めの姿勢が、論文から溢れ出ています。他の提案者に比べてこの点を圧倒的に強く感じ、高く評価したいと思いました。

**八代**──斬新さはありませんが、高校生の発想としては着眼点がユニークです。バングラデシュのビル崩落事故を受けて、彼女たちの苦痛をなくし、労働環境を徹底的に改善するのだという強い熱意も感じます。ロジックも文章も優れていて、読みやすい論文でした。最終段落にあった「私たち人間が作り出した衣服という素晴らしい文化が、今同じ人間を苦しめてしまっている。学校はそれを教えてくれない」という言葉が印象的でした。

審査委員　本田 健司

### 「エシカルな縫製工場」社内審査委員のコメント

- 高校生の論文とは思えないほどコンパクトに課題と解決策が整理されており、ソーシャルビジネスの肝をしっかり勉強している。類似のソーシャル事業はあるが、その着眼点や斬新な発想をこの年齢で腑に落としているところは、未来への可能性を感じる。
- ファストファッションの生産時の労働者の問題と共に、衣料の大量廃棄という社会問題もはらんでいる課題であり、世界的な視野で双方の改善につながる提案。服飾に限らず、今後このような考え方は広く考えられていかなければならないと思い、課題発見の観点でも評価した。

## 「SMILE FACTORY」
### ─「共に生きる」視点で日本の難民受け入れの仕組みを提示

**最相**──おそらくアフガニスタンの難民のニュースが論文を書くきっかけになったと思われますが、非常に短期間で考えて、調べて、集中して書いたのだろうと想像しました。難民という日本では扱いにくい社会問題を、「管理」ではなく「共に生きる」という視点から、すべての関係者にwin-winとなるシステムとして提案しています。やむなく国外に出なくてはいけなかった人たちは、故郷に帰る時までに日本で豊かな人間関係を築き、いずれは故国と日本の橋渡し役となる人材となってくれるのではないか。そういう方々にとって「SMILE FACTORY」は1つの希望になるのではないかと感じました。

**八代**──アイデアがとても面白く、実現に向けてはハードルが高そうですが、大胆な仮説、チャレンジを評価したいと思います。日本が難民の受け入れに消極的であり、「積極的に受け入れる意思がない」「保護するのではなく、管理する視点が強い」と鋭くはっきり指摘している点も良いと思いました。

**小松**──難民という世界的に大きな問題に臨んだということと、日本としてできることはないかを考えた点を評価しました。難民の受け入れには課題も多いですが、日本を

### 「SMILE FACTORY」社内審査委員のコメント

- 単なる援助としてではなく、難民、受け入れ側のコミュニティ、クラウドファンディングで投資する企業、それぞれの役割と期待できるメリットが現実的な視点で示されている。これなら実現できるかもしれないと感じるとともに、難民問題の平和的な解決方法として多く人や企業に夢や希望を与えることのできるアイデアだと思う。
- 難民問題と日本の各種問題をつなぎ合わせた問題解決策の提示、そして最後にクラウドファンディングにつなげて実現可能性を高めた点を高く評価したい。まさにサステナブルな未来だと感じた。ここに、なぜ日本は難民受け入れに消極的なのかという観点を加えた上での問題解決であれば、なお良かったと思う。

# 高校生の部

第二の故郷だと思ってくれる人を増やしたいという筆者の思いに、シンパシーを感じました。

## 「Soap-Loop」
### ──問題意識をもとに大胆に切り込む勇気と行動力

**池上**──この論文は、審査する側も男性と女性とで評価が分かれるのではないかと思いながら読みました。諸外国から後れをとる日本の性教育の現状を踏まえ、誰もが生きやすい社会にするためには性の話題をタブーとする社会の意識を変えることが必要だと主張しています。ともすればタブーとされてきた性について、国際的に考えていこうという問題意識とスケールの大きさを、高く評価したいと思いました。

**桑津**──ある意味デリケートな課題で、日本では必ずしも活発に取り組まれていない性の分野に大胆に切り込んでいった勇気を、評価しました。

## 「分解者を利用したトイレ」
### ──グローバルなテーマに対するユニークな発想

**池上**──インドのモディ首相が「インドのすべての家庭にトイレを設置する」という一大号令を掛けたぐらい、途上国にはトイレのない家が非常に多いのですが、このことが実は大問題であることをユーモアのあるタイトルで提起しています。Decomposerトイレの方式を具体的かつ合理的に発想している姿勢も、評価したいと思いました。

**桑津**──日本では綺麗なトイレが当たり前なために、これまであまり取り上げられて来なかった「屋外排泄」のテーマをあえて取り上げた視点が良いと思いました。また、技術的なアプローチの模索を行って図式で表現している点も加味して、高く評価しました。

**本田**──まず、「屋外排泄」というグローバルな問題を取り上げた点を評価しました。独自に考えたものだと思われる、具体的なトイレの作り方まで書いているところもユニークで、非常に興味深く読みました。

## 「サポいる」
### ──被災地のニーズに応じた災害ボランティアの活動を支援

**最相**──災害ボランティアに関わる提案はこれまでもありましたが、東日本大震災におけるボランティア数は震災後2年目、3年目と急激に減少した状況があり、被災地の中長期的支援に焦点を絞っている点を評価しました。今どこで何が必要か、ニーズに応じた支援が可能となるシステムで、この災害ボランティアアプリは今すぐにでも実用化してほしいと思いました。高齢者介護や障がい者支援のプラットフォームとしても応用できそうです。

**齊藤**──震災や津波などの災害時に、ボランティアが自発的かつ効果的に動けるようなアプリを開発したいという提案には、強く共感しました。こういうものは上から計画的にやっても、志ある者たちがバラバラに動いてもうまく行かないだろうと思うので、SNS時代にはこういう民間主体的なアプリをうまく活用できればという期待を込めて、評価

**「Soap-Loop」**
**社内審査委員のコメント**

- 実際に「カタリバ」を作り、実践してみた行動力、そこから学んで途上国支援や石けん作りと販売という具体的な活動を考え、さらに男性参加についても検討している。次々に考え、行動し、探りながら誰もが生きやすい社会を目指しているというのが、分かりやすく伝わってきた。これからの活動も応援したい。
- 日本における性教育の現状を把握し、何故うまく行かないのかを分析して、その原因（仮説）への対応策が、飛躍せずに納得感のある内容で記載されている。解決策も、まずは改善への第一歩として捉えることができ、現実味がある。世界から見て前時代的な社会通念にどう立ち向かうかを、目をそらさずに論じている点に好感が持てた。

**「分解者を利用したトイレ」**
**社内審査委員のコメント**

- 問題提起やその解決策について、具体的かつ根拠も明確で説得力があった。筆者の解決策が実現できれば確かにサステナブルで、安全安心な社会を実現できると感じた。
- しっかり問題提起から具体的な施策、その課題点まで検討されている点が良かった。WHOが課題提起している内容や問題の背景がよく調べられていたと思う。

審査委員　齊藤 義明

しました。もう少しアプリの要件を示してもらえたら、もっと評価は高くなったと思います。

**八代**──災害対策という視点はよくありますが、災害後にボランティアを効率よく活用するというのはなかなか良い視点で、データも上手く活用できています。自分もボランティア活動に関しては、慣れないことに中途半端に手を出すべきではないと思っているところがあるのですが、このようなものがあれば確かに一歩踏み出せると思います。東日本大震災から10年経った今でも避難者が5万人いるということも再認識できました。

## 最終審査会のプレゼンテーションで各賞を決定

**桑津**──最終審査会に進める論文をどうするかについて議論したいと思います。単純に点数だけが判断基準になるわけではありませんが、点数としては「エシカルな縫製工場」が最も高く、1点差で「SMILE FACTORY」となっています。まず、「エシカルな縫製工場」は最終審査に進めても問題ないと思いますが、いかがでしょうか。

**一同**──賛成です。

**桑津**──次いで評価の高いのが「SMILE FACTORY」で、「Soap-Loop」「分解者を利用したトイレ」は同点で、次に「サポいる」になっていますが、意見がありましたらお願いします。

**最相**──「Soap-Loop」は池上さんが高評価をつけておられますし、最終審査に進めていいと思います。

**池上**──私は構いませんが、みなさんの意見はどうでしょうか。

**八代**──私は正直、それほど新しさを感じなかったのですが、大胆にこのテーマを取り上げたことはとても勇気があると思うので、そこは評価に値すると思っています。

**最相**──池上さんがその次に高評価をつけておられる「分解者を利用したトイレ」についてなのですが、この提案ではその土地の分解者を使うと書いていますが、具体的にどういう分解者が想定されるかや、既存のバイオトイレの限界や独自の視点など、もうひとひねりがあればさらに良かったなと思います。

**桑津**──最相さんは「SMILE FACTORY」を高評価にされていますが、そのほかで推したい論文はどれでしょうか。

**最相**──「サポいる」ですね。この論文がいいと思ったのは、災害後に時間の経過と共に被害の実態が明らかになっていくにつれて、被災者の心理的な格差が広がる「ハサミ状格差」があらわとなる被災地の中長期的支援に焦点をあて、ニーズに応じた支援が可能となるシステムを提案しているからです。

**池上**──「SMILE FACTORY」についてなのですが、これを高く評価すること自体には異論はありません。ただ、日本で難民申請が認められる数が少ないということが書

**「サポいる」**
**社内審査委員のコメント**

- 自然災害とは切っても切り離せない日本に住んでいるので、復旧・復興の問題を2つに切り分け、手助けできるツールで解決しようという考えが良かった。災害の傷を笑顔にしたいと思う動機がきっかけであるところも大事。
- 日本の大きな課題である災害に対して、ボランティアの需要と供給に着目した問題発見が良かった。時系列別に課題を設定している発想も鋭い。

審査委員　八代 夕紀子

特別審査員　最相 葉月さん

審査委員　小松 康弘

# 高校生の部

かれていて、実際にその通りであるものの、日本での難民申請のかなり多くは経済目的で、結果的に難民として認められないので日本で稼いで帰っていくという実態があります。ですから、日本で難民申請が認められる数が少ないのはどうしてかという分析もあれば、「SMILE FACTORY」の説得力がより増したのではないかと思います。

特別審査委員　池上 彰さん

**桑津**──「SMILE FACTORY」「Soap-Loop」「分解者を利用したトイレ」、それぞれにご意見はあるものの、評価することにご異論はないようですね。それでは、最相さんの推す「サポいる」も併せて、すべて最終審査に進める方向で進めたいと思いますがよろしいでしょうか。

**一同**──はい。

**桑津**──議論をまとめますと、高校生の部の最終審査対象作品は、「エシカルな縫製工場」「SMILE FACTORY」「Soap-Loop」「サポいる」「分解者を利用したトイレ」の5作品といたします。各賞は、12月20日に行われる最終審査会でのプレゼンテーションで決定します。

# 論文審査　講評

審査委員長

**桑津 浩太郎**　NRI研究理事

「サステナブル未来予想図」のテーマは3回目となりますが、過去2回同様、やはりサステナビリティの枠組みでは大胆な未来像は描きにくい傾向が感じられました。次回以降のテーマ設定が課題だと思っています。

また、今回の論文審査では、これまでアイデアの発想を狭めてしまうとしてあまり評価軸の上位には置いてこなかったリアリティ、実現性についての議論が、実際には審査委員からしばしば出てくるということがありました。この評価軸を今後どうするのか、検討する必要があるのではないかと感じました。

特別審査委員

**池上 彰 さん**　ジャーナリスト、名城大学教授、東京工業大学特命教授

コンテストの回を重ねるごとに、前にも読んだような“既視感”を覚えるテーマ、提案が出てくることはどうしても避けられず、今回もその傾向が感じられました。コンテストの公式サイトには過去の受賞作品も掲載されているので、傾向と対策を研究されるということもあるでしょう。今後どのような募集テーマを設定するのかが、大きな課題になってきたと思います。

そのような中で、自分で一生懸命考えて論文を書き、応募してくれる学生のみなさんに、自分の考えを発表するチャンスを与えるのはとても意義のあることだと、改めて感じました。

特別審査委員

**最相 葉月 さん**　ノンフィクションライター

集まった論文には、途上国の人々、難民、高齢者、被災者、コロナ禍で経済困窮する家庭、ヤングケアラーなど、視野広く様々な人に対してやさしい心で向き合い、真摯に、ていねいに、想像力豊かに解決策を講じているものが数多く見られ、順位をつけがたい思いも持ちました。また、今の30代以下の人たちは、これから大変な時代を生きて行かなくてはいけないのだなということを改めて感じました。

加えて、今回、留学生の論文が非常に優秀で、かつて「留学生の部」があった頃に日本語が堪能で優秀な留学生がとても多かったことを思い出し、今後が大変楽しみだという思いを持ちました。

# 論文審査 講評

審査委員

**齊藤 義明**　未来創発センター 2030年研究室長

今回の応募論文を読んで感じたのは、今の高校生・大学生は良くも悪くも「SDGs世代だな」ということです。視野広くグローバルに物事を見る目を持っている一方で、本当の意味での“リサーチリテラシー”が弱い、つまり「なぜなのか」「本当なのか」と情報や真実を追求する力が少し足りないのではないかと感じました。メディアでSDGsと聞けば「SDGs的に正しくあらねば」と考えるのではなく、自らもう一度深く調べ尽くしてみる姿勢が大切だと思います。そのような人が育っていってくれることを期待しています。

審査委員

**八代 夕紀子**　プラットフォームサービス開発部 グループマネージャー

今回は「安全安心な社会」という設定のためか、斬新というよりは総じて安定的な提案が多かったと思います。作品のレベルは大学生、高校生とも全体的に高く、コロナ禍で推敲の時間がしっかりとれたためなのか、例年より文章力も上がっていた印象です。

特に留学生の論文は非常にレベルが高く、留学生とは気づかないほどの日本語の文章力で優秀な作品があり、驚きました。評価したい論文のレベルが拮抗していて順位をつけるのに悩みましたが、とても楽しく審査させていただきました。

審査委員

**小松 康弘**　コーポレートコミュニケーション部長

審査に携わるのは3回目ですが、今回は前にも似たような論文を読んだという“既視感”を覚える作品がかなり多くありました。3回目となる「サステナブル未来予想図」のテーマは、シリーズ的な発想で設定した経緯があり、来年はテーマ設定を刷新したいと思います。

また、論文を評価する際に、私が提案に求めるのは“実効性”であると再認識するとともに、高校生、大学生に提案の実効性をどの程度具体的にイメージできるかと考えると、あまり期待値を上げ過ぎてもいけないのではないかと感じました。

審査委員

**本田 健司**　サステナビリティ推進室長

これまでのコンテストで歴代2番目に多い3,043もの作品を応募して頂き、また、コロナ禍で留学生の数が減っているにもかかわらず、留学生からも昨年と同じ数の応募を頂けたことを大変嬉しく思うとともに、ここに深く御礼申し上げます。

審査に携わって6回目になりますが、高校生の作品にここまでグローバルなテーマが多く見られたのは初めてだと思います。今の高校生がグローバルな視点で問題を提起し、日本の政治にも関心を持っていることに「日本の将来に期待が持てるな」と、頼もしく感じました。

NRI学生小論文コンテスト2021

# 最終審査会

# 地球のサステナブルな未来のために
# それぞれの思い描く「安全安心な社会のカタチ」をプレゼン

2021年12月20日、「NRI学生小論文コンテスト2021」の最終審査会が行われました。前回は新型コロナウイルス感染予防のためオンライン開催でしたが、今回はNRI東京本社の大会議室とオンラインをつないだハイブリッド開催となりました。論文審査を通過した9作品（大学生の部4、高校生の部5）の執筆者がプレゼンテーション審査に臨み、厳正な審査を経て、受賞論文を決定しました（決定した各賞はP.73～76参照）。

審査の開始にあたって、NRI代表取締役会長兼社長の此本臣吾が挨拶。

「この最終審査に残っているのは、約3,000もの応募作品の中から選ばれた9つの論文です。どれも甲乙つけがたい素晴らしい作品ばかりで、それを書いた方々に直接お話をうかがえるのを大変楽しみにしています。それぞれの作品にかけるみなさんの想いをストレートに、できるだけリラックスして話していただきたいと思います」と激励しました。

［最終審査会　審査委員］

**審査委員長**

桑津 浩太郎　NRI研究理事

**特別審査委員**

池上 彰　ジャーナリスト、名城大学教授、東京工業大学特命教授

最相 葉月　ノンフィクションライター

梅野 修　共同通信社　客員論説委員

**審査委員**

此本 臣吾　NRI代表取締役会長兼社長

安斎 豪格　NRI代表取締役専務執行役員

桧原 猛　NRI執行役員

齊藤 義明　NRI未来創発センター 2030年研究室長

八代 夕紀子　NRIプラットフォームサービス開発部　グループマネージャー

# 最終審査会レポート

2021年12月20日に行われた「NRI学生小論文コンテスト2021」の最終審査会における「プレゼンテーション審査」の様子をレポートします。
＊プレゼンテーションは6分＋質疑応答4分で、氏名の五十音順に行いました。

# 高校生の部

## 自然災害から笑顔を守る復旧・復興の新しいカタチ

**生方 智絵**　うぶかた ちえ

プレゼン動画はこちら　https://www.youtube.com/watch?v=T9QTbwM_GTw

自然災害が後を絶たない日本で、被災地への円滑で持続的な復旧・復興支援を行うために、災害ボランティア支援アプリ「サポいる」（被災地をサポートし、皆をすまいるに）を提案。「今後大きな自然災害が起きたとしても、安心安全で住み続けられる社会、そして自然災害から笑顔を守る手助けになる」と訴えました。
文献データや図解を効果的に使いながら、災害ボランティアの現状課題やアプリの具体的機能をテンポ良くプレゼンし、「サポいる」の必要性を印象づけました。

**審査委員との質疑応答**

Q――これはいわゆるマッチングアプリだと思いますが、ボランティアに行って困ったなど、このアイデアのきっかけとなったようなご自身の体験はあるのでしょうか。

A――ボランティア活動に興味があって、調べるうちに思いついたアイデアです。アイデアの直接のきっかけとなったのはウーバーイーツで、近隣の人からの注文に応えるマッチングアプリのようなものができたらと考えました。

Q――中心として機能する災害ボランティアセンターには、どういう人が関わる事を想定していますか。行政なのか、それともボランティアの中から選ぶのでしょうか。

A――行政ではなく、ボランティア活動の経験豊かな人を募集して、その中から選びます。すでにNPO法人などで災害ボランティアを組織して活動している人たちがいるので、そのような民間の災害ボランティアに精通した人たちと協力したいと思います。

Q――災害が起こった時に、情報を共有化して最適な体制を作る上でデジタルは大きな役割を果たすと思うのですが、一方で、正しい情報が発信されなければ混乱に拍車がかかることも予想されます。情報の確からしさはどうしたら守れると思いますか。

A――「サポいる」の利用者には、主催団体である災害ボランティアセンターからの発信だけが行くようにするなどの対策を考えています。

# 日本を第二の故郷に　～未来の人材にクラウドファンディング～

**篠原 瑞希**　しのはら みずき

プレゼン動画はこちら　https://www.youtube.com/watch?v=m2jkcuPJSZs

世界に故郷を追われた難民が８千万人以上いるという問題に対し、難民を未来の人材と見込んで企業から投資してもらって運営する難民受け入れ施設「SMILE FACTORY」の設立を提案。「日本の文化と人々の心に触れ、笑顔を取り戻し、難民でなく未来の宝と呼ばれてほしい」と訴えました。
落ち着いた語り口で、地域活性化や地元企業の人材獲得などのメリットを説明。日本としてできることを考える真摯な姿勢が、プレゼン全体から伝わりました。

### 審査委員との質疑応答

Q──難民の人たちの人材育成も含めて企業に資金を募るということですが、具体的な方法としてどういったことを考えていますか。

A──まず、政府からクラウドファンディング参加企業に対して「国際的社会貢献企業」という価値をつけてもらうことを考えています。そのネームバリューによって企業の信頼性が高まり、イメージアップにもつながると思います。

Q──地方にSMILE FACTORYを設立する場合、難民の子どもたちの教育面についてどのようなサポートが考えられますか。

A──地方の小学校や幼稚園、公民館などと連携をとり、できるだけ日本の子どもたちと多く触れ合って日本ならではの文化や遊びを通してまずは環境に慣れてもらい、勉強については小学校などをうまく利用していくことを考えています。

Q──日本に行くことを希望する難民全員を受け入れることはできないと思いますが、そこに対する工夫などはありますか。

A──段階的に人数を増やしていくことを考えていて、初年度は1,000人、以降は500人、1,000人単位で増やせればと思います。ドイツやアメリカと同程度の受け入れを目標に、まずは現実的には1,000人という数字がふさわしいかなと思いました。

# 世界の女性をつなぐ「Soap-Loopプロジェクト」―SRHRの実現へ―

**原 まりこ**　はら まりこ

プレゼン動画はこちら　https://www.youtube.com/watch?v=ThrlhMpdkvI

若者が集まって性についてオープンに話せる場を作り、そこで作ったオリーブ石けんを貧困家庭に安価で販売し、売り上げを途上国の医療を支えるNGOに寄付する「Soap-Loopプロジェクト」を提案。「誰もが生きやすい社会にするためには、性の話題をタブーとする社会の意識を変えることが必要だ」と主張しました。
審査委員に語りかけるように落ち着いてプレゼンし、SRHRの向上に取り組む必要性や「一人ひとりの意識の変化が社会の変化につながる」という言葉の納得感を高めました。

※SRHR：Sexual and Reproductive Health and Rights（性と生殖に関する健康と権利）

### 審査委員との質疑応答

Q――このプロジェクトに参加する人たちをどのように集めるかが大きな課題だと思うのですが、今の時点で何か考えはありますか。

A――女子校は共学校よりも性に関する話題を出しやすい雰囲気があるので、例えば共学ではない学校から参加者を集めるのも一つの方法だと思います。

Q――この活動はどうやって男性を巻き込んでいくかということが一番のポイントになると思います。何かアイデアがあれば教えてください。

A――このプロジェクトの特徴として、途上国の人や貧困家庭などさまざまな立場の人とつながることができることが挙げられます。例えば途上国の支援をしたいということが最初のきっかけとなって、男性が参加することもあればいいなと考えています。

Q――性教育は学校教育で行ったほうが良いという意見もあると思うのですが、あえて自発的な立ち上げでやろうと考えた課題意識について聞かせていただけますか。

A――日本の性教育の遅れについて調べる中で、例えば性教育に意欲的な先生に対して教育委員会などから反対の動きがあって続けられなかった事例もあることを知りました。教育が変わることももちろん必要ですが、各個人の意識が変わらなければ社会は変わらないのではないかと考え、個人の方面からアプローチすることにしました。

## ～バングラデシュから始まるエシカルファッションの時代～

# 縫製工房Clothes Mom

**平松 明華**　ひらまつ はるか

プレゼン動画はこちら　https://www.youtube.com/watch?v=9-W8wbjpH34

縫製工場の劣悪な労働環境が明らかとなったバングラデシュのビル崩落事故を受けて、衣服の生産に関わる人々が誰も犠牲にならない未来を目指し、エシカルな縫製工房「Clothes Mom」の設立を提案。「衣服を作る人も着る人も、最善な選択をすることが必要だ」と訴えました。
練りこまれた会社の仕組みや生産する衣服の素材･デザインへの丁寧な説明から、「世界にエシカルファッションを普及させたい」という熱意が伝わりました。

※エシカルファッション：人間や地球環境などのさまざまな視点から最善の選択をするという考え方に即したファッション

### 審査委員との質疑応答

**Q**――バングラデシュ以外にも同じような状況の国はある中で、なぜバングラデシュにClothes Momを作るのか、他の国に広げる考えはないのか、教えてください。

**A**――衣服の生産率は中国に次いで高く、世界の最貧国でもあるバングラデシュが、先進国の人々の衣服を大量生産している現実に矛盾を感じ、バングラデシュに視点を絞りました。いずれ先進国、日本にもClothes Momの工場を建設していきたいです。

**Q**――Clothes Momの衣服を日本で売る場合、価格が高くなるのではないかと思いますが、その辺はどう考えていますか。

**A**――フェアトレードで公正に取引された衣服を高く感じるのは、ファストファッションの価格が安いためだと思います。エシカルファッションを普及させていくことによって、Clothes Momの商品価格が当たり前である社会になるのが理想です。

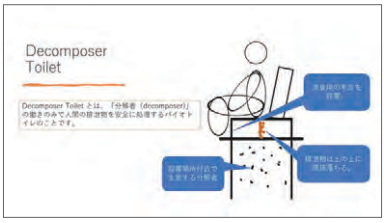
**Q**――会社の仕組みなどが詳しく考えられていますが、構想にはどの位の時間をかけましたか。また、ご自身は将来何になりたいと思っているか教えてください。

**A**――情報収集を含めて３カ月位かかりました。将来は雑誌の編集者などになって、おしゃれで人気があり、公正に取引きされ、環境にも良いエシカルファッションを多くの人に発信していくことが目標です。

# 人間、う○ちくれるってよ　by 分解者

**深尾 優子**　ふかお ゆうこ

プレゼン動画はこちら　https://www.youtube.com/watch?v=Kw9MBOxBKB8




人権・健康・環境の問題につながる「屋外排泄」に対して、設置場所付近で採れた分解者を排泄物処理に利用した「Decomposer Toilet」を提案。従来型トイレとの違いを「外部から導入するのではなく、その場で生み出すこと」と強調し、「全ての人にトイレで排泄する権利があり、それを実現する一助になる」と訴えました。
分解者の機能を実験して実現性を掘り下げる姿勢や、「屋外排泄の廃絶に強い想いを持っています」と言い切る力強さに、実現への期待感が高まりました。

※分解者：生態学用語で、生物の排出物や死がいなどの有機物を分解する細菌、菌類などをさす。

### 審査委員との質疑応答

**Q**――トイレの問題について取り上げようと思ったのはどうしてですか。

**A**――学校で何度かSDGsについてプレゼンをする機会があったのですが、SDGsの目標のうち水に関するもの取り上げたことがなかったので、取り上げたいと思いました。また、途上国などでは今でも私と同年代の女の子たちがトイレを使えず屋外排泄を余儀なくされていることを本で知って衝撃を受け、それなら自分が今までのトイレの課題点を改善できるような、今までとは違うトイレを目指そうと思いました。

**Q**――リゾート地などで、下水がなくて排泄物を微生物で分解し、浸透膜を通じて土の中にしみ出させて処理しているところがありますが、メンテナンスが必要でコストもかかります。深尾さんの論文を読んで「こんなにシンプルなものが技術的に可能なのか」と驚いたのですが、これはすでに実用化されている技術なのですか。

**A**――まだ実用化されていませんし、実用可能かどうか分かりません。なぜ分解者を用いたかというと、横山光輝さんの漫画の司馬遷の『史記』で古代中国の豚トイレというものを見て、「古代の人は、今のトイレの水の役割を豚でやっていたのか。古代に動物を使ってこんなシステムができていたなら、今でも微生物を使ってトイレの機能ができるはずだ」と考えたからです。

# 大学生の部

## 留学生から見る老舗旅館に対する改善策の提案及び観光まちづくり

**尹 思源**　いん しげん
**金 秀玟**　きむ すみん　（共著）

プレゼン動画はこちら　https://www.youtube.com/watch?v=Xuy4PeNIuAQ

老舗旅館でのインターンシップの経験を通して感じた繁忙期と閑散期の差、運営側の労働生産性の低さという課題に対して、紀南体験巡りツアーと従業員の労働生産性を向上させる仕組みを提案。「地域を持続可能な形で活性化し、各地域に合わせた取り組みをうまく推進していく必要がある」と主張しました。
流暢な日本語で龍神村や老舗旅館の課題、改善策による期待効果を掘り下げるプレゼンには、リアリティと説得力、留学生ならではの視点が感じられました。

### 審査委員との質疑応答

Q ──従業員の労働生産性を高めるために、顧客からのフィードバックをもらうというアイデアがありましたが、旅館の従業員にはお客さんと接触しない裏方の人たちもいます。そういう人たちへのフィードバックはどうするのでしょうか。

A ──龍神村では昼食や夕食に食べ放題という形で食事を出していますが、調理スタッフなどは直接お客様からフィードバックはもらえません。そういうスタッフはわざわざ龍神村に来てくれたお客様の立場に立って料理を考えたり、「自分が観光客ならどんなサービスをしてもらいたいか」と考えることが重要だと思います。

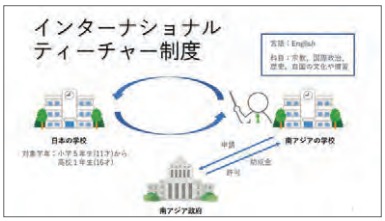
Q ──インターンシップで老舗旅館で働いたご経験から、また、留学生としての目線から、日本の旅館の問題点や改善点など気づいた点があったら教えてください。

A ──日本には特有のおもてなしがあり、それがマニュアル化されていることが多いのですが、マニュアルにない状況が発生すると、その状況を解決するためにとても時間がかかることを経験しました。例えば、お客様が「こういうことをしたい」と言っても、直接対応しているスタッフは「上の者に聞きますので」と、その場で決められずにお客様を待たせてしまいます。お客様と接するスタッフも、ある程度決める力を持ち、自分で考えて行動できるようにしたほうが良いと思います。

# 新しい教育の形を世界へ

**上原 綾乃**　うえはら あやの

プレゼン動画はこちら　https://www.youtube.com/watch?v=YWh1e4rvmul




南アジアの学生が、オンラインで日本の小中高生に宗教、自国の慣習や文化、国際政治、歴史について英語で授業を行い、その経験を活かして自国の学校で教員になる「International Teacher 制度」を提案。「異文化理解を深める教育を通して、差別がなくなり、本当の意味での共生が実現することを期待したい」と訴えました。南アジアの教育課題を掘り下げ、具体的な取組み内容を丁寧に説明するプレゼンから、「教育の新たな可能性をひらきたい」という強い想いが伝わりました。

**審査委員との質疑応答**

Q――ご自身も教育に取り組んでいこうと教員を志望されているのですか。また、この制度を南アジアに限定した理由を教えてください。

A――教職とともに、開発途上国支援の観点から制度を整える仕事にも関心があります。南アジアに限定した理由は、日本との時差が少ない地域であるために、コロナ禍で減少した国際交流や合同授業の機会をオンラインで実現できるからです。

Q――学校建設の不正や学校施設の私的流用、無断欠勤が多いなど、かなり具体的に南アジアの教育現場の問題を挙げていますが、こういったディテールが書けた根拠を教えていただけますか。

A――これは他の論文からの引用がもとになっています。ぜひその現状を自分の目で確認したいと思い、アジアを一周する計画を立てています。

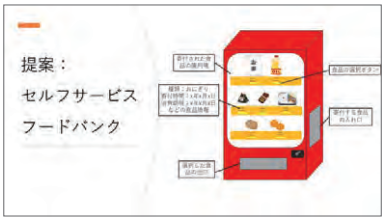
Q――南アジアの政府はIT機器の寄付を歓迎するとは思うのですが、教育分野に外資系企業が参入するにはさまざまな規制を乗り越える必要があると思います。制度の導入について現地政府の同意を得て、規制をクリアできると思いますか。

A――日本のIT企業の認知を高めた上で、現地政府に申請を受理してもらい、南アジアの教育現場に導入してもらえたらと思っています。

# セルフサービスフードバンク ～新しい食品リサイクルのかたち～

張 穎慧　ちょう えいけい

プレゼン動画はこちら　https://www.youtube.com/watch?v=vDjSMhXXwiM




コンビニでのアルバイトで感じた、毎日大量に廃棄される食品への「もったいない」という思いから、廃棄される食品を必要とする人に提供する仕組みとして自動販売機のように街角に設置する「セルフサービスフードバンク」を提案。「セルフサービスフードバンクで、食べ物を大切にする輝く未来を迎えよう」と訴えました。
流暢で的確な日本語によって国内フードバンクの課題や普及効果などを説明。実体験に根差した提案への思いや、留学生としての独自の視点が伝わりました。

### 審査委員との質疑応答

Q――セルフサービスフードバンクに、誰が何を入れるか分からないというリスクに対してのセキュリティは、どう考えていますか。また、機械の中で賞味期限が切れてしまうことも考えられますが、どのように管理し、処理するのでしょうか。

A――安全性を確保するためには、AI技術の活用が必要だと思います。今後さらにAI技術が発展したら、変性した食品を見つけて分類したり、クラウドで食品情報を遠隔管理することもできるのではないかと思います。賞味期限が切れた場合は、自動的に撤去して機械内に保存し、ロボットを設置して地域ごとにそういった食品を回収して、動物のエサにするなどの活用方法もあると考えています。

Q――コンビニの食品であればパッケージがしっかりしているので取り扱いやすいと思いますが、一般家庭から食品を出す場合、例えば容器を統一するとか、冷凍するなどが必要ではないかと思うのですが、何かお考えはありますか。

A――野菜や果物などはパッケージするときに傷が付く可能性もあるので、扱うのは難しいと思っています。セルフサービスフードバンクでは、家庭で余っている未開封のお菓子や米、調味料など、品質管理しやすいものを主に扱い、必要な人に提供したいと考えています。

# ひよっこドクターのほけんしつ

**中島 寛音**　なかじま ひろね

プレゼン動画はこちら　https://www.youtube.com/watch?v=afuZxoycdaQ

地域医療における医師不足の問題に対し、Student Doctorの資格を持つ医学生による地域住民の健康相談の場、「ひよっこドクターのほけんしつ」を提案。「安心安全でサステナブルな社会のために、誰でも気軽に医療を受けられ、体調のことを相談できるようになることが目標。本提案はその実現手段の一つである」と訴えました。
落ち着いた語り口で日本の医療の課題解決の方向性を説明するとともに、「継続的に医師を確保できる効果が期待できる」と強調し、実現への期待感を高めました。

### 審査委員との質疑応答

Q──Student Doctorは国家試験も控えており、時間的な余裕があるのかが気になります。また、普段は大学にいるStudent Doctorがどうやって地域の人と交流するのか、教えてください。

A──勉強はありますが、アルバイトやサークル活動などをしている人も多いので、時間は作ればあると思います。また、新潟で新潟市以外の市町村で「ひよっこドクターのほけんしつ」を行う場合は現地に行く必要がありますが、新潟市から離れた地域の病院での地域実習の週末などを利用し、地域の人と交流できたらと考えています。

Q──「ひよっこドクターのほけんしつ」を実施するにあたって、厚生労働省の規制の問題は特に気にしなくてもよいのですか。

A──規制については詳しくないのですが、今、新潟大学の先生方と協力しながら、実現方法を模索中です。その中で何か問題が生じたら、クリアしていきたいと思います。

Q──地域の中に医師が少ないとは言え、地域で実際に頑張っている地元の医師がいると思います。地域の医師会との関係についてはどう考えていますか。

A──地域の医師会との連携は最も重要だと思っています。指導医になっていただけるよう地元の医師会にお願いし、連携できればと考えています。

# 最終審査結果および評価のポイント

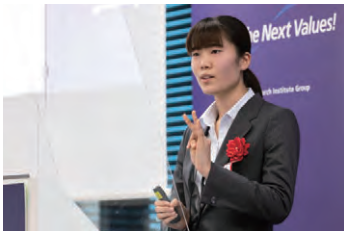
「サステナブル未来予想図〜こんな地球で暮らしたい・安全安心な社会のカタチ〜」をテーマとして開催された「NRI学生小論文コンテスト2021」は、大学生の部4作品、高校生の部5作品、計9作品が最終審査会に進みました。
2021年12月20日の最終審査会で筆者によるプレゼンテーションを実施し、厳正な審査を行った結果、以下のとおり受賞論文を決定しました。

# 大学生の部

## 大賞

**ひよっこドクターのほけんしつ**
**〜Student Doctorたちによる地域住民の健康相談の場〜**

中島 寛音




**評価のポイント**

地域医療におけるかかりつけ医の不在、医学生が全人的に患者を診る視点の欠如、独居や老老介護による高齢者の孤独などの課題意識から、「誰でも気軽に医療を受けられ、体調のことを相談できる」安全安心な社会を目指し、全国共用試験に合格したStudent Doctorの資格を持つ医学生による「ひよっこドクターのほけんしつ」を提案。

医師に必要な複眼的レンズを身につけるための試みが地域を支え、ひいては日本の医療全体の底上げにもつながる、全国的なスタンダードとなりうる実現可能性のある仕組みであり、審査委員の高い評価を集めた。内容、構成、表現など、論文としての完成度も高い。

## 優秀賞

**新しい教育の形を世界へ**

上原 綾乃

**評価のポイント**

南アジアの教員志望の学生が、オンラインで日本の小中高生に自国の文化、歴史、宗教、政治などについて英語で授業を行い、その経験を活かして自国の学校で教師になる「International Teacher 制度」を提案。

理想とする、すべての人がどこにいても笑顔でいられる多様性社会の実現のために、「人」への理解を深める必要があるという思いと、教師不足や教育の質が低いといった途上国の教育課題を掛け合わせた視点に独自性を感じる。国境を越えて双方にメリットのある、具体的な取組みが提示されている点も評価した。コロナ禍でオンラインコミュニケーションが実効的になったことも、本提案の実現性を強めている。

# 最終審査結果および評価のポイント

## 大学生の部

### 特別審査委員賞

**セルフサービスフードバンク**
**～新しい食品リサイクルのかたち～**

張 穎慧

**評価のポイント**

まだ食べられるのに廃棄される食品への「もったいない」という思いを出発点に、廃棄されてしまう食品をリサイクルして食べ物に困っている人たちを支援する「セルフサービスフードバンク」を提案。

コンビニでのアルバイトや米国の本格的なフードバンクでのボランティアなど、実体験を通じて得た現場での気づきを、自動販売機のように街角に設置するという新しい食品リサイクルの提案につなげている点を評価した。国内のフードバンクの普及を妨げている諸問題もよく分析している。誰でも食品を寄付して支援者になれるアイデアで、設置場所の工夫などで安全性への配慮を強化すれば実現性もあるだろう。

### 留学生特別賞

**留学生から見る老舗旅館に対する改善策の提案及び観光まちづくり**

尹 思源
金 秀玟 （共著）

**評価のポイント**

老舗旅館でのインターンシップの経験を通して感じた、繁忙期と閑散期の差、運営側の労働生産性の低さという課題に対して、紀南体験巡りツアーと従業員の労働生産性を向上させる仕組みづくりを提案。

地方の優良な観光資源をいかに活性化させるかというテーマ設定と課題解決の流れが明瞭で、留学生とは思えない文章力と論文としての完成度が際立っている。分かりやすい論展開で、地に足のついたリアリティと説得力がある。具体的なツアースケジュールも興味深い。コロナ禍で弱った観光業界を留学生が活性化しようとする提案で、これからのインバウンドを考える上でも注目に値する。

# 高校生の部

## 大賞

**～バングラデシュから始まるエシカルファッションの時代～**

**縫製工房 Clothes Mom**

平松 明華

**評価のポイント**

縫製工場の劣悪な労働環境が明らかとなったバングラデシュのビル崩壊事故を受けて、衣服の生産に関わる人々が誰も犠牲にならない未来を目指して、バングラデシュの女性たちによるエシカルな縫製工房「Clothes Mom」の設立を提案。

現代奴隷というグローバルな問題を取り上げ、具体的な解決策を提示している。働き方や保育園の整備、エネルギー確保まで目配りし、自ら起業家のごとく主体的に会社や事業の方向性をデザインする、攻めの姿勢や熱意を高く評価した。エシカルファッションを世界標準にしてClothes Momの衣服を流通させたいという志に、実現への期待感を強く抱かせられた。

## 優秀賞

**日本を第二の故郷に**

**～未来の人材にクラウドファンディング～**

篠原 瑞希

**評価のポイント**

大切な故郷を捨てて難民となる人が世界に8千万人以上いるという現状に対して、日本としてできることはないかを考え、難民を未来の人材として見込んで企業からの投資してもらうことで成り立つ難民受け入れ施設「SMILE FACTORY」の設立を提案。

難民という日本では扱いにくい世界的な問題にチャレンジし、「管理」ではなく「共に生きる」という視点から、すべての関係者にwin-winとなる仕組みを大胆に考案している点を評価した。やむなく祖国を離れなくてはならなかった難民にとって、SMILE FACTORYは一つの希望になると思われる。

# 最終審査結果および評価のポイント

## 高校生の部

### 優秀賞

**世界の女性をつなぐ「Soap-Loopプロジェクト」**
**―SRHRの実現へ―**

原 まりこ

**評価のポイント**

諸外国から後れをとる日本の性教育の現状を踏まえ、誰もが生きやすい社会にするためには性の話題をタブーとする社会の意識を変えることが必要だと主張。若者が集まって性について自由に話せる場を作り、そこで作った石けんを貧困家庭に安価で販売し、売り上げを途上国の女性の健康を守るNGOに寄付する「Soap-Loopプロジェクト」を提案している。

日本では活発に取り組まれていない性の分野に大胆に切り込んだ勇気、実際にカタリバを作り実践した行動力、国際的に考えていこうという問題意識とスケールの大きさを評価した。LGBTQや男性参加という課題を検討している点も良い。

### 特別審査委員賞

**人間、う○ちくれるってよ　by分解者**

深尾 優子

**評価のポイント**

世界で6億7300万人がトイレのない生活を送っている「屋外排泄」の問題に対して、分解者を糞尿処理に利用した、水も電力も不要な「Decomposer Toilet」を提案。

衛生問題、環境汚染、人権問題にもつながり、SDGsの課題の一つにも掲げられるこの問題に着眼した点に、まず独自性がある。ユーモアのあるタイトルで提起しながら、Decomposer Toiletの方式を具体的かつ合理的に考案しようという姿勢、技術的なアプローチの模索を評価した。設置地域の生態系を壊さない分解者を使い、分解者が生息しない地域のために人工分解者の開発まで考察している点も良い。

### 特別審査委員賞

**自然災害から笑顔を守る復旧・復興の新しいカタチ**

生方 智絵

**評価のポイント**

自然災害が後を絶たない日本において、次の世代へと住み続けられる街をつくるためには、被災地の円滑で持続的な復旧・復興支援が不可欠だという思いから、災害ボランティア支援アプリ「サポいる」（被災地をサポートし、皆をすまいるに）を提案。

文献データを上手に活用し、被災地の中長期的支援に焦点を絞り、災害後ボランティアの効率的な活用や普及に着眼した点が優れている。今どこで、どんな支援が必要か、ニーズに応じた支援が可能となるようシステムの具体的内容もよくイメージされており、説得力がある。実用化への期待感を強く抱かせる提案である。

# 最終審査を終えて

審査委員長

**桑津 浩太郎**　NRI研究理事

プレゼンテーションでは、非常にユニークなものや実際の活動に基づくもの、質疑応答への当意即妙な受け答えなど、評価したい点が多くありました。そのため、最終審査においては点数が拮抗し、例年になく順位づけが困難な状況であったということが言えると思います。

また、高校生の部、大学生の部とも受賞者はすべて女性でしたが、これも厳正な審査の結果だと思っております。

受賞された高校生、大学生のみなさん、おめでとうございます。このたびはコンテストにご参加いただきまして、ありがとうございました。

特別審査委員

**池上 彰 さん**　ジャーナリスト、名城大学教授、東京工業大学特命教授

最終審査の前に論文審査を行っていますが、名前も学校も性別も全て伏せられた上で最終審査に進む論文を選定しています。結果的に最終審査に進んだのは女性ばかりでしたが、みなさんは本当に実力で勝ち抜いてきたと言えます。

その上で、本日のプレゼンテーションはどなたも大変見事でした。緊張のために早口になってしまった人もいましたが、プレゼンテーションというのは経験を積んでいくと次第に上手になってくるものなので、さらに研鑽を積んでいただきたいと思います。

このたびは、本当におめでとうございました。

特別審査委員

**最相 葉月 さん**　ノンフィクションライター

非常にレベルの高い論文とプレゼンテーションを拝見して、私自身もとても勉強になりました。総じて非常に実直で、しかも優しい視点で書かれた論文が多く、「この地球を守ってくれる人たちが着実に育っているな、未来は安心だな」と思いました。

最終審査まで残らなかった作品の中にも、ヤングケアラーやSNSでのいじめの問題などジャーナリズムでニュースになっているテーマを取り上げたものがあり、みなさんが広い視野で社会の課題を捉えていると感じました。

受賞されたみなさん、誠におめでとうございました。

# 表彰式

2021年12月20日、「NRI学生小論文コンテスト2021」の最終審査会において、表彰式が行われました。
表彰式では、NRI代表取締役会長兼社長の此本臣吾が、10名の受賞者（大学生の部5名、高校生の部5名）に表彰状と副賞を授与し、会場のNRI東京本社大会議室に大きな拍手が響きました。
会場やオンライン上で晴れやかな笑顔を見せてくれた受賞者のみなさん、本当におめでとうございました！

受賞者一人ひとりに向け表彰状を読み上げるNRI代表取締役会長兼社長の此本 臣吾

大学生の部 大賞受賞の中島 寛音さん

大学生の部 留学生特別賞受賞の金 秀玟さん（左）と尹 思源さん

高校生の部 大賞受賞の平松 明華さん

閉会挨拶をするNRI代表取締役専務執行役員の安斎 豪格

閉会後、最相・池上両特別審査委員としばしの歓談

大学生の部５名、高校生の部５名の受賞者のみなさん、おめでとうございます

# 受賞者の言葉

## 大学生の部　大賞

### ひよっこドクターのほけんしつ ～Student Doctorたちによる地域住民の健康相談の場～

**中島 寛音** さん　新潟大学 医学部３年

本日はこのようなプレゼンテーションの機会を設けてくださり、本当にありがとうございます。

応募した時には、まさか賞をいただけるとは思っていませんでしたが、医学生として自分がこうあってほしいと思うことを論文に書いて、その結果賞を頂けたのかなと受け止めています。また、自分の論文をとても丁寧にこんなにたくさんの審査員の方が読んでくださり、コメントをくださったことで、本当に貴重な経験をさせていただいたと思っています。

それから、司会の山岡さんが、はじめに発表者に「みなさん、大丈夫ですか?」と声をかけてくださったのですが、そこで私は本当は「大丈夫じゃないです!」と言いたかったのですが、（緊張をグッとこらえて）なんとか「大丈夫です」と言いました……今日一日を無事に終えることができて良かったです。ありがとうございました。

司会のNRI 山岡 依子

## 大学生の部　留学生特別賞

### 留学生から見る老舗旅館に対する改善策の提案及び観光まちづくり

**尹 思源**さん　高崎経済大学 地域政策学部３年
**金 秀玟**さん　高崎経済大学 地域政策学部３年　（共著）

左：金 秀玟さん
右：尹 思源さん

**尹さん**――本日はこのような大変名誉ある賞をいただき、本当にありがとうございます。関係者のみなさまに心より感謝いたします。

私たちは今回のインターンシップを通して、教科書から教えられた日本ではなく、実際の日本を味わうことができました。日本特有のおもてなしを提供する立場に立ちながら、今ある課題と解決策を考えました。インターンシップ先で旅館の方々が温かく接してくださり、また旅館の担当者に和歌山県の熊野古道や白浜など有名な観光地へ連れて行ってもらったことにより、和歌山県への愛着が増しました。和歌山県でより良いまちづくりができるように、また、和歌山県だけではなく、日本の地方の観光地にも貢献したいと思っています。

**金さん**――素人の考えばかりで、論文を書いた段階では可能性だけで必ずしも確実な効果を期待できるとは言い難いのが事実です。しかし重要なことは、より良い社会を作るために自分ができること、頭の中にあることを実際の行動に移すことではないかと思っています。そのために、私たちが大学で学んだことやインターンシップで経験したことを生かして、小さな力であっても役に立ちたいと思いました。

今回、こうして賞を頂けたのも、そのような私たちの気持ちが伝わったからではないかと思います。今後も一層活躍できるように頑張りたいと思います。本日は誠にありがとうございました。

# 受賞者の言葉

## 高校生の部　大賞

### ～バングラデシュから始まるエシカルファッションの時代～ 縫製工房 Clothes Mom

平松 明華 さん　北海道 函館白百合学園高等学校２年

最初にこのコンテストに応募しようと思ったきっかけは、学校で配布していた『ハイスクールタイムズ』という高校生向けの新聞でコンテストの広告を見て、自分が興味を持っている“持続可能性”という言葉にひかれたからです。入賞できるとは思っていなかったので、最終審査会のために東京に行くことが決まった時は大泣きしました。本当に東京まで来ることができて、こうして大賞を頂けたこともまだ全然実感がなくて、今でも驚いています。

でも、夏休み中に自分で考えたり調べたりして、学校の先生方や友達に励まされながら最後まで論文を書き切って、プレゼンテーション資料も完成させることができて、本当に頑張って良かったなと心から思っています。本日お集りくださった審査員のみなさん、そして自分の家族にもお礼を言いたいと思います。本当にありがとうございました。

株式会社 野村総合研究所
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-9-2
大手町フィナンシャルシティ グランキューブ